

松江市文化財調査報告書 第61集



文化財愛護  
シンボルマーク

# 出雲国分寺跡発掘調査報告書

1995年3月

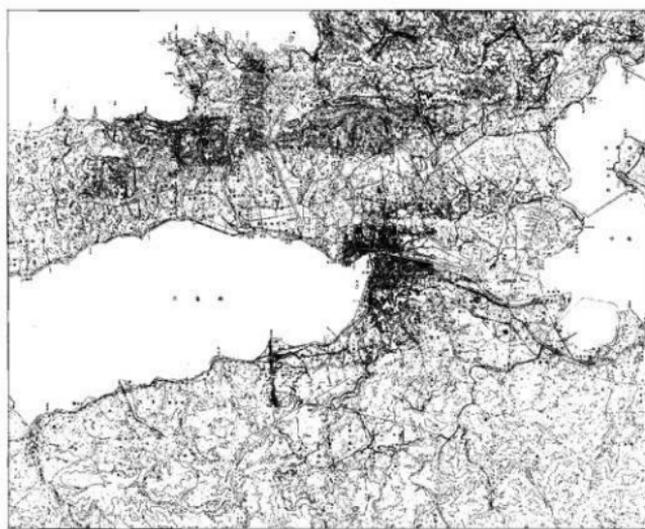
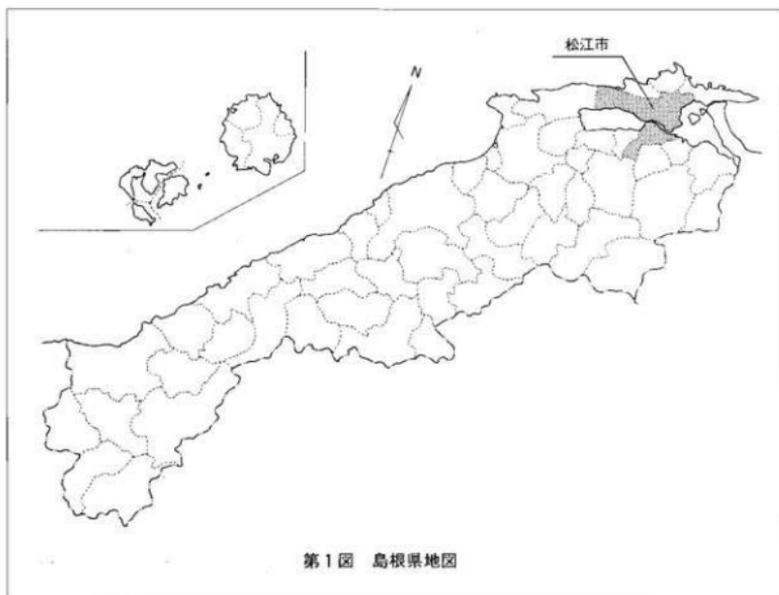
松江市教育委員会  
財松江市教育文化振興事業団

## 例 言

1. 本書は、平成5年度において財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した特殊林道開設事業（井ノ奥～上竹矢線）にかかる山雲洞分寺跡（指定地外）の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、松江市経済部農林水産課から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施したものである。
3. 調査の組織は下記のとおりである。

依頼者	松江市経済部農林水産課
主体者	松江市教育委員会
事務局	教 育 長 諏訪 秀富
	生涯学習部長 中西 宏次
	文化課長 村松 榮（平成6年3月まで）
	中林 俊（平成6年4月から）
	文化財係長 岡崎雄二郎
実施者	財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課
理事長	吉岡 俊雄（平成6年3月まで）
	大塚 雄史（平成6年4月から）
事務局長	日高 稔夫（平成6年3月まで）
	佐藤千代光（平成6年4月から）
調査係長	中尾 秀信
調査者	調査担当者 宮木 英樹（平成6年3月まで）
	調査員 稲田 奨
	〃 飯塚 康行

4. 調査の実施にあたっては、次の方々の指導と協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。  
〔調査指導〕川原和人（島根県教育庁文化課主幹）、平野方英（島根県古代文化センター主任）  
内田律雄（島根県埋蔵文化財センター調査第4係長）  
〔調査協力〕陶山 明（松江市経済部農林水産課林務水産係長）
5. 出土遺物は松江市教育委員会文化課で保管している。
6. 遺物の実測は稲田、飯塚、遺物の拓本は荻野哲二（松江市教育委員会）、遺物写真の撮影は飯塚、執筆・編集は飯塚と遠藤正樹（財団法人松江市教育文化振興事業団）が行った。



# 目 次

1. 調査に至る経緯	4
2. 周辺の歴史的環境	4 (遠藤)
3. 調査の概要	(飯塚)
(1) SD-01について	9
(2) 瓦溜りについて	10
4. 出土遺物について	(飯塚)
(1) 土器類	14
① 須恵器	16
② 土師器	18
③ 土師質土器	19
④ 陶磁器類	21
(2) 瓦 類	32
① 軒丸瓦	32
② 軒平瓦	32
③ 丸 瓦	33
④ 平 瓦	34
⑤ セ ン	35
(3) 木製品	35
5. ま と め	58 (飯塚)

## 文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会(現文化庁)が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗<sup>うし</sup>拱<sup>こう</sup>、すなわち斗<sup>うし</sup>と拱<sup>こう</sup>の組み合わせによって全体で軒を支える脚本の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していこうというものです。



文化財愛護  
シンボルマーク

## 1. 調査に至る経緯

松江市では市内上竹矢町地内において平成3年度に森林資源の有効活用と地区住民の生活道路の開発のために「特殊林道井ノ奥上竹矢線開設事業」を策定し、平成3年9月6日付、農第762号で予定路線内の埋蔵文化財分布調査依頼書が松江市教育委員会教育長宛に提出されたが、上竹矢側の起点が「史跡出雲国分寺跡」の史跡指定区域北西隅の隣接地に当たり、国分寺西側の寺域が確定していないことから「出雲国分寺跡」に関連する遺構が存在することが予想された。

平成3年12月17日に予定路線内全線の分布調査（現地踏査）を行ったが、「史跡出雲国分寺跡」に隣接する区域については本格的な発掘調査（全面調査）が必要であると判断された。

この分布調査の結果を平成4年1月14日付、教文第154号で松江市長宛に回答するとともに「①平成5年度以降に出雲国分寺跡に隣接する区域についての本格的な発掘調査（全面調査）が必要なこと。②それ以外の区域については伐採後再度の分布調査が必要なこと。」を通知し、また松江市長宛に回答したことを鳥根県教育委員会教育長宛に報告した。

発掘調査については、平成5年9月20日から平成5年11月26日の期間に約130㎡を対象として実施した。

## 2. 周辺の歴史的環境

出雲国分寺（僧寺）跡は松江市街地から南東方向にあたる松江市竹矢町（上竹矢）字寺領に存する。当地は八束郡八雲村に源を発する意字川によって形成された沖積平野である。意字平野と呼ばれるこの地域は有数な穀倉地帯の一つとなっており、古くから発達していた地域でもあった。

本寺跡は、この平野の北東隅にあたる低い丘陵の南麓に接する緩傾斜地に位置する。西方には『出雲国風土記』に「神名備野」と記されている茶白山（171m<sup>(1)</sup>）を臨むことができ、南方には意字平野全域を広く見渡すことができる景勝の地である。

本寺跡周辺は古くから発達した地域であったことから、知られている縄文・弥生時代の遺跡も相当数にのぼる。

縄文時代の遺跡としては、保地道跡(32)、さっぺい遺跡(50)などの遺跡が意字平野の縁辺や馬橋川下流域の低湿地に点在している。また石鎌の発見された旧竹矢小学校遺跡(46)や石斧が出七した才塚遺跡(11)も知られている。

弥生時代の遺跡としては、後期の水田跡が検出された夫敷遺跡(122)、向小紋遺跡(7)、上小紋遺跡(8)や、前期から中期の溝状遺構を中心として土壇や住居跡が検出された布田遺跡(24)がある。

古墳時代になると中期・後期に出雲地域の中でも著名な古墳群が築造されるようになり、その数も密集するほどに増えていく。

古墳時代の遺跡は、中期には大橋川南岸に多く、比較的大型の古墳が築造されている。手間古墳(35)、井ノ奥4号墳(34)といった前方後円墳や、石屋古墳(77)といった方墳はその代表的なものであ

る。また意宇平野周辺の丘陵上には大庭鶏塚(94)や、東・西百塚山古墳群(59,60)、後谷古墳群(86)といった群集墳も造られ、後期の内陸部勢力強化に伴った出雲中部部推移の萌芽が見受けられる。

後期の古墳では、門頭大刀の「石冢阿戸(額田部臣)……」の銘文で全国的にも有名な岡山山1号墳(64)や御崎山古墳(62)などのように横穴式石室を持つものや、山代方墳(99)、古天神古墳(58)、岩屋後古墳(61)などのように石棺式石室を伴うものもある。また意宇平野周辺部の丘陵斜面には、これらと時期を同じくすると考えられる土工免横穴群(72)、狐谷横穴群(71)、安部谷横穴群(52~54)など、石棺式石室の形態をまねた大規模な横穴群が点在している。

律令時代になると意宇平野の一角に出雲国庁(27)が設置され、当地は政治上重要な位置を占めることとなる。このような背景の下、天平5(733)年に勅造された『出雲国風土記』には公的施設に関する記述が散見する。

- ①「……意宇社者、郡家東北邊、……」……郡家は意宇郡家のこと。
- ②「意宇軍團、即屬<sub>二</sub>郡家<sub>一</sub>。」……意宇軍團は意宇軍団のこと。
- ③「黒田驛、郡家同處。郡家西北……」……黒田驛は黒田駅のこと。
- ④「……故云<sub>二</sub>山代<sub>一</sub>也。即有<sub>二</sub>正倉<sub>一</sub>。」……正倉は山代郷正倉のこと。

また『出雲国風土記』には、

⑤「新造院一所、在<sub>二</sub>山代郷中<sub>一</sub>、郡家西北四里二百步。建<sub>二</sub>立嚴堂<sub>一</sub>也。日置君日烈之所<sub>三</sub>造也<sub>二</sub>。」

⑥「新造院一所、在<sub>二</sub>山代郷中<sub>一</sub>、郡家西北二里。建<sub>二</sub>立嚴堂<sub>一</sub>。飯石郡少領出雲臣弟山之所<sub>三</sub>造也<sub>二</sub>。」とあり、山代郷内には「新造院」とされる私寺が2か所あったことが窺われる。

現在、発掘調査の成果からこの2か所の「新造院」は、茶臼山北方の末美庵寺(74)と茶臼山南方の四王寺跡(67)であるという説が有力である。

さらに平野の北辺に、天平13(741)年国分寺造営の詔により建立された国分寺(1)と国分尼寺(22)跡があり、これらの寺院で使用された瓦を焼いた出雲国分寺瓦窯跡(21)も発見されている。また最近の発掘調査で、中竹矢遺跡(19)でも国分寺の瓦が焼かれていた可能性がある、との報告も寄せられている。

当時の日本は、役小角の配流事件に見られるように仏教の民間布教を好まず、<sup>91</sup> 仏教は国家鎮護の面を強く現出しており、国家の秩序体系に組み込まれていた。<sup>92</sup> 従って中央の詔によって当地に国分寺・国分尼寺が建立されたことは、律令時代、当地一帯が政治面だけでなく国家鎮護の上からも出雲の中心部であったということを暗示している。

註(1) 『出雲国風土記』には、「神名籠野、郡家西北三里一百廿九步。高八十丈、周六里卅二步。」とある(郡家は意宇郡家を示しており、出雲国庁と同所)。

註(2) 出雲国分寺南方に位置する意宇平野には奈良朝のものと考えられる条里制遺跡が存している。

註(3) 1歩=1.78m、1里=300歩=534.54m。

従って、四里二百歩は約2,494mになる。

註(4) 「無<sub>二</sub>僧<sub>一</sub>」とあり、在寺の僧がなかったことが窺われる。

- 註(5) 「出雲神戸日置君鹿麻呂之祖也。」とある。
- 註(6) 約1,069m
- 註(7) 「住僧一軀。」とあり、僧が一人住していたことが窺われる。
- 註(8) 天平18(746)年出雲国造に任ぜられた。
- 註(9) 續日本紀卷第十四 天平十三年三月乙巳(三月十四日)の条に、「朕(聖武天皇)以薄上。忝承重任。未弘政化。寤寐多慚。(中略)頃者年穀不豊。疫癘頻至。慙懼交集。唯勞罪己。足以廣驅爲蒼生。遍求景福。」とあり、深い仏教信者であった聖武天皇が、社会不安・不作・疫病などからの救済を仏教に求めるに至った背景が窺われる。
- 註(10) 生没年不詳。大和の葛城山にいた呪術者。仏教が民間に浸透することを嫌厭する律令国家の下で伊豆に配流される。後に修験道の開祖と仰がれた。
- 註(11) 僧尼令に「凡僧尼。非在寺院。別立道場。聚衆教化。竝妄説罪福。及毆擊長宿者。皆還俗。」とあり、民間布教は厳しく禁止されていた。
- 註(12) 僧尼令が律令の中に存するものであることから、仏教は律令的規制の中に組み込まれていたといえる。

#### 参考文献

- 加藤義成 校注 『出雲国風土記』 報光社 1965年
- 加藤義成 『修訂 出雲国風土記参究』 今井書店 1957年
- 地方史研究所 『出雲国分寺址・国府址調査報告』 平凡社 1963年
- 島根県教育委員会 『出雲岡田山古墳』 1987年
- 島根県教育委員会 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅳ  
—島根県松江市山代町所在・四王寺跡—』 1985年
- 建設省松江国道工事事務所 島根県教育委員会  
『一般国道9号松江道路建設予定地内  
埋蔵文化財発掘調査報告書X (中竹矢遺跡)』 1992年
- 井上光貞・関見・土田直鎮・吉木和夫 校注  
『律令 日本思想大系 3』 1976年 岩波書店
- 黒板勝美・国史大系編修会 編  
『新訂増補 国史大系 續日本紀 前篇』 1971年 吉川弘文館



- |                |               |
|----------------|---------------|
| 1. 出雲国分寺       | 62. 御崎山古墳     |
| 2. 国分寺跡付近遺跡    | 63. 小谷横穴群     |
| 3. 天平古道        | 64. 岡田山古墳群    |
| 4. 庁々坪遺跡       | 65. 団原古墳      |
| 5. 神田玉作跡       | 66. 団原遺跡      |
| 6. 西配田遺跡       | 67. 四王寺跡      |
| 7. 向小紋遺跡       | 68. 大谷横穴群     |
| 8. 上下小紋遺跡      | 69. 茶臼山城跡     |
| 9. 大平遺跡        | 70. 永久宅後古墳    |
| 10. 間内遺跡       | 71. 狭谷横穴群     |
| 11. 才塚遺跡       | 72. 十王免横穴群    |
| 12. 上竹矢遺跡      | 73. 米美遺跡      |
| 13. 上竹矢古墳群     | 74. 米美塚寺      |
| 14. 才ノ崎古墳群     | 75. 米美塚墓      |
| 15. 才ノ崎遺跡      | 76. 西家古墳群     |
| 16. 長峰遺跡       | 77. 石原古墳      |
| 17. 中竹矢後1号墳    | 78. 明泰山古墳     |
| 18. 武内神社裏山古墳群  | 79. 福富神社境内遺跡  |
| 19. 中竹矢遺跡      | 80. 阿弥陀寺裏山古墳群 |
| 20. 社日古墳       | 81. 阿弥陀寺古墳    |
| 21. 出雲国分寺瓦葺跡   | 82. 大古墳群      |
| 22. 出雲国分寺跡     | 83. 正林寺遺跡     |
| 23. 法華寺前遺跡     | 84. 出雲国史跡     |
| 24. 布田遺跡       | 85. 大石横穴群     |
| 25. 大草遺跡       | 86. 荒神谷後谷古墳群  |
| 26. 大草玉作遺跡     | 87. 秋上家古墳群    |
| 27. 出雲国分寺跡     | 88. 黒田畦遺跡     |
| 28. 樋口玉作跡      | 89. 黒田館跡      |
| 29. 瀬田古墳       | 90. 東洞寺古墳     |
| 30. 平所遺跡       | 91. 大庭小学校校庭遺跡 |
| 31. 間内砥墳墓群     | 92. 中島古墳群     |
| 32. 保地遺跡       | 93. 向山古墳群     |
| 33. 荒神塚古墳      | 94. 大庭鶏塚      |
| 34. 井ノ奥古墳群     | 95. 大庭住宅東遺跡   |
| 35. 手間古墳       | 96. 山代遺跡      |
| 36. 岩舟古墳       | 97. 山代正倉跡     |
| 37. 瀬山古墳       | 98. 山代二子塚     |
| 38. 観音寺古墳群     | 99. 山代方墳      |
| 39. 迎接寺山古墳群第1群 | 100. 井手古墳群    |
| 40. 迎接寺山古墳群第2群 | 101. 鎌兵塚跡1遺跡  |
| 41. 代官家横穴群     | 102. はせ岡遺跡    |
| 42. 案内岩舟古墳     | 103. 岡崎穴群     |
| 43. 八幡宮下横穴     | 104. 岡古墳群     |
| 44. 平浜八幡宮前遺跡   | 105. 喰々谷遺跡    |
| 45. 宮内遺跡       | 106. 虎尾古墳推定地  |
| 46. 旧竹矢小学校校庭遺跡 | 107. タルミⅣ遺跡   |
| 47. の場遺跡       | 108. タルミⅠ遺跡   |
| 48. の場横穴群      | 109. タルミⅡ遺跡   |
| 49. の場古墓群      | 110. タルミⅢ遺跡   |
| 50. さっぺい遺跡     | 111. 舟津田遺跡    |
| 51. 安部寺古墓群     | 112. 石谷遺跡     |
| 52. 安部谷横穴群第2群  | 113. 高杉第2号古墳  |
| 53. 安部谷横穴群第1群  | 114. 高杉第1号古墳  |
| 54. 安部谷横穴群第3群  | 115. 高杉古墓群    |
| 55. 安部谷古墳群     | 116. 伍兵衛山古墓   |
| 56. 大草岩船古墳     | 117. 伍兵衛山古墳   |
| 57. 天満谷遺跡      | 118. 鹿日神社前遺跡  |
| 58. 古天神古墳      | 119. 東光台団地古墳  |
| 59. 東百塚山古墳群    | 120. 魚見塚古墳    |
| 60. 西百塚山古墳群    | 121. 中竹矢古墳    |
| 61. 岩屋後古墳      | 122. 夫敷遺跡     |

第3図 周辺の遺跡分布図

### 3. 調査の概要

調査対象範囲内について、遺物および遺構の検出を目的として地表面まで掘り下げた。

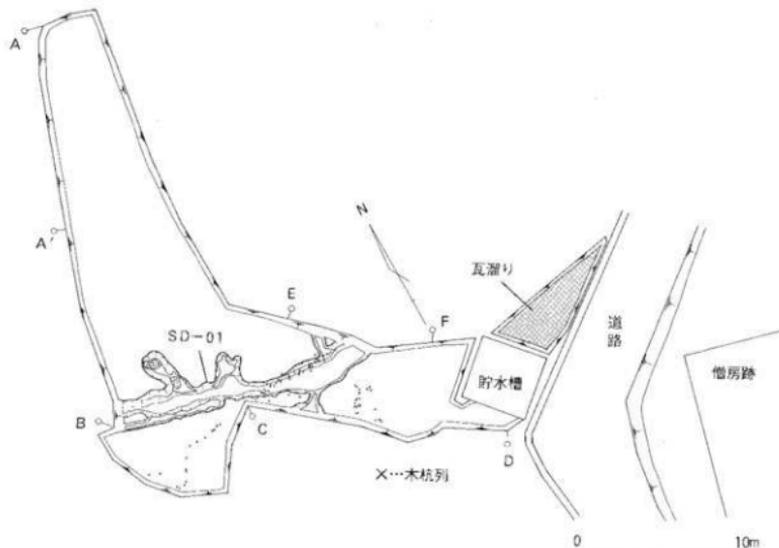
土層の堆積状況は、表土（赤褐色土）の下には灰色粘質土が約40cmの厚さで存在する。この上層中からは多量の上器類、瓦類が出土しており、遺物包含層と考えられるが、出土遺物はすべて破片で、磨滅したものが多く。この層を取り除くと、地表面は黄褐色を呈しており、地表面からSD-01が掘り込まれている。また、SD-01を斜めに横断する形で木杭列が検出されているが、その配列状況にはSD-01との関連は認められず、恐らく後世の田畦に因わるものと推定される。

#### ・SD-01について

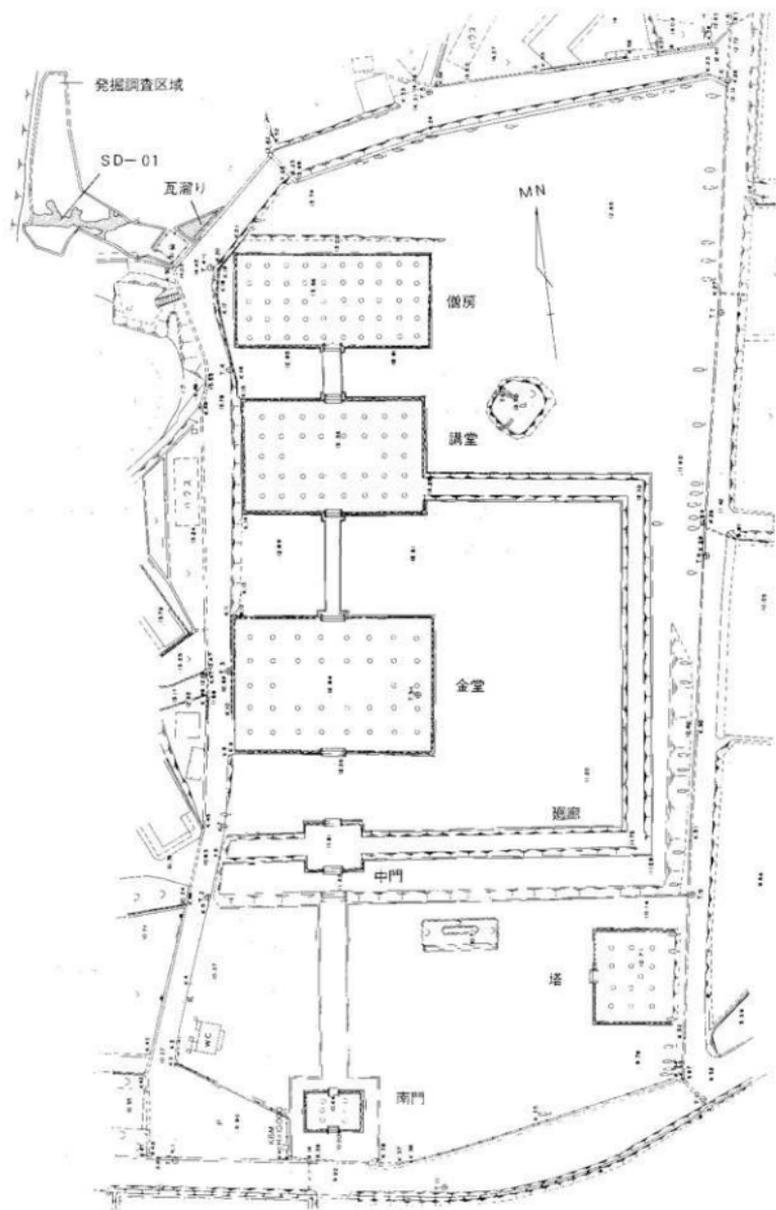
地表面で検出された旧河川状の遺構で、調査区を東西に横断する形で検出された。SD-01はさらに調査区外西方および東方に続いているものと考えられる。

SD-01の規模は長さ15.2m、上端幅0.4~1.5m、深さ60~70cmを測り、埋土の灰色砂質土中から土器類、瓦類が多量に出土しているが、すべて破片で磨滅したものが多く。

またSD-01は高低差からすると西から東へ向かって流れていたものと考えられるが、その流路は調査区東端部で約26°北方へ屈曲する状況が窺われる。



第4図 調査区全体図(S=1/300)



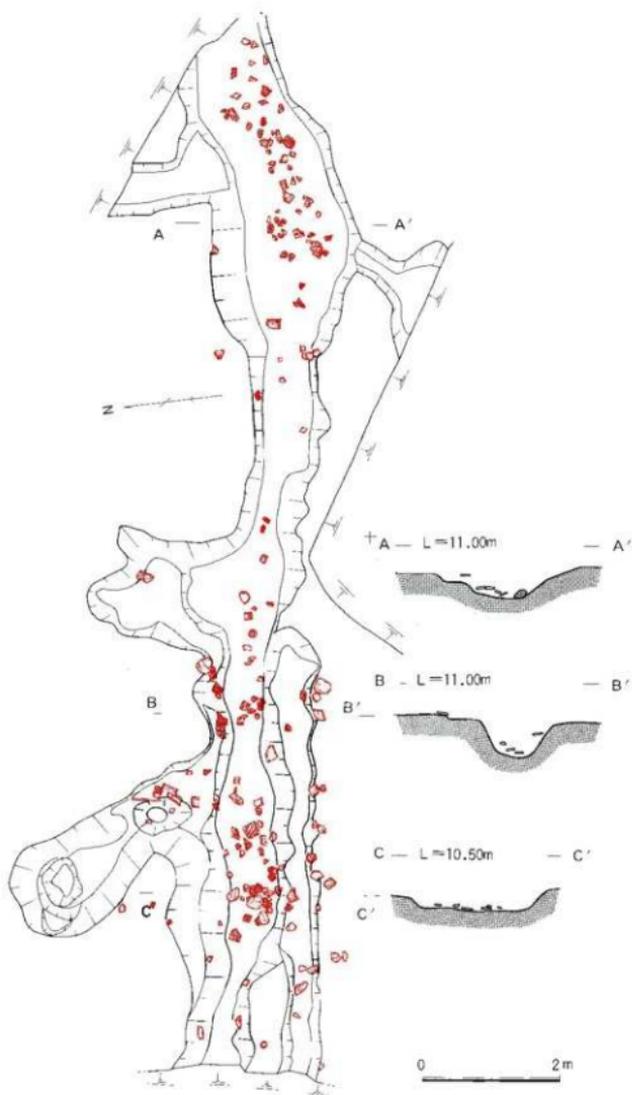
第5図 出雲国分寺全体図(S=1/800)

### ・瓦溜りについて

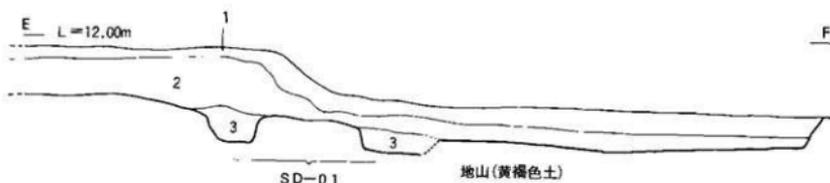
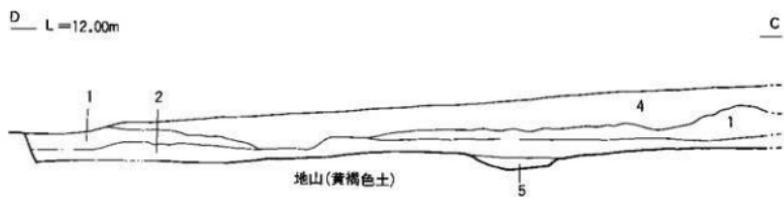
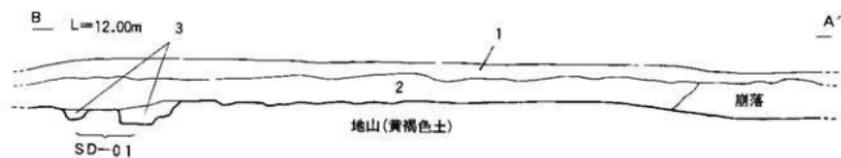
調査区東端、回分寺側から見ると僧房の基壇の北西隅に近い位置で、灰色粘質土の下から集中的に多量の瓦類が検出された。調査区が限られていたため、一部のみを検出であり、さらに調査区東方に広がる状況が観察された。調査時に壁面が崩壊し、その時点で調査を終えたため、土層の観察は不十分であるが、灰色粘質土の下は灰色砂質土が堆積しており、このレベルから多量に瓦類が出土している。この調査区に特徴的な点としては、瓦類に比して土器類の出土量が少ないことと、磨滅したものが少なく、完形品または大形の破片が多いことである。



第6図 瓦溜り実測図



第7图 SD-01实测图



1. 赤褐色土
2. 灰色粘質土
3. 灰色砂質土 (SD-01 埋土)
4. 黒褐色土 (攪乱土)
5. 3層と同質

0 2m

第8区 調査区土層堆積図

#### 4. 出土遺物について

今回の調査の結果、検出された遺物は総数5,153点にのぼり、その内訳は土器類2,532点(49.1%)、瓦類2,613点(50.7%)、セン8点(0.2%)である。

##### (1) 土器類

土器類については、総数2,532点のうち、灰色粘質土中から1,565点(61.81%)、SD-01中から915点(36.14%)、瓦溜り中から52点(2.05%)が検出されており、灰色粘質土中からの出土が最も多く、瓦溜り中からの出土は、その瓦出土量に比べると極端に少ない(第9図)。

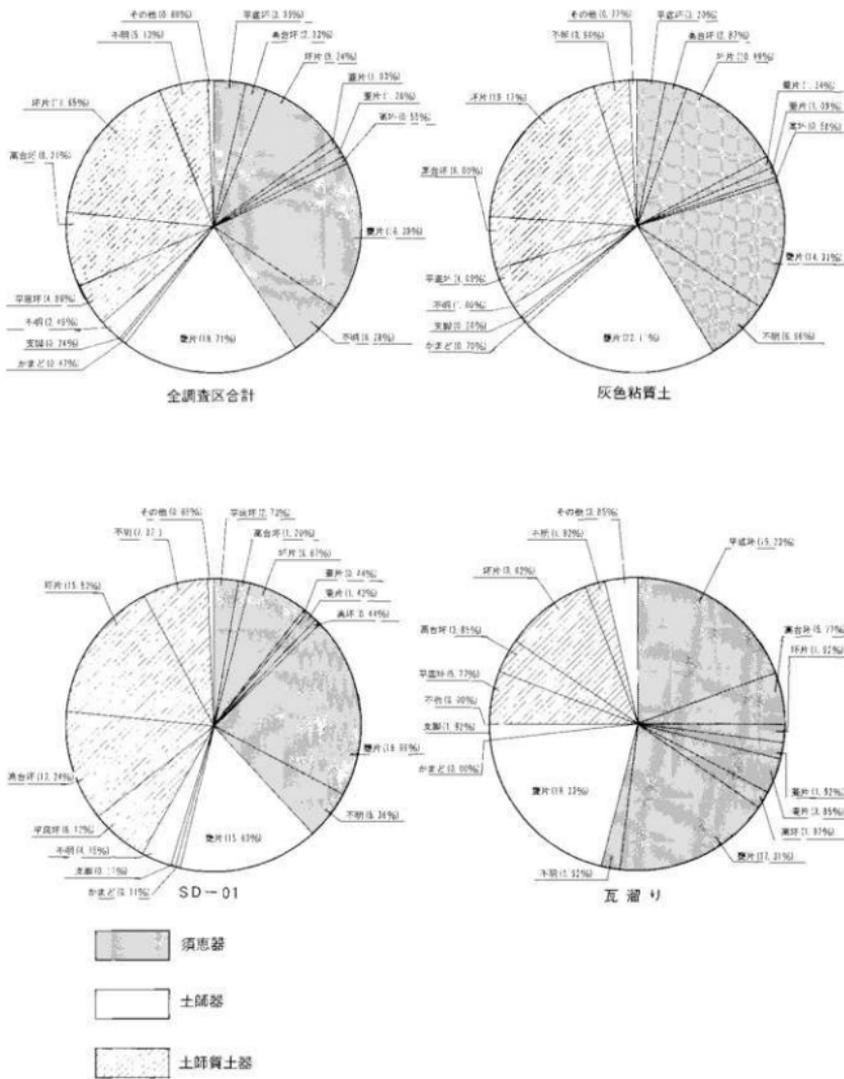
土器類の種別としては、須恵器、土師器、土師質土器を主体とする中に若干の陶磁器類が混入するもので、いずれも坏類、甕類の生活雑器がほとんどで、すべて破片で磨滅したものが多い。

各地点毎に出土遺物の内訳を見ると(第10図)、各地点ともに同程度の比率を占めるのが土師器であり、2割程度の割合で検出されている。器種構成としては、各地点ともに甕類が圧倒的な比率を占め、若干のかまど、土製支脚が混入する。須恵器については瓦溜りから最も高い比率で検出されており、5割以上を占める。器種構成としては平底坏が最も多く、甕類がそれに次いで多い。灰色粘質土およびSD-01ではともに約4割程度の比率で須恵器が検出されているが、それぞれの器種構成を見ると、灰色粘質土中では坏類と甕類が同程度なのに対し、SD-01では甕類の比率が高くなっている。土師質土器については、SD-01において最も高い比率で検出されており、4割程度を占める。また瓦溜りでは最も少なく、SD-01の約半分の比率で検出されている。器種構成を見ると、坏類がほとんどであるが、灰色粘質土および瓦溜りでは平底のものと同程度の付くものがほぼ同じ割合を占めるのに対し、SD-01では高台の付くものが平底のものより約2倍の割合を占めるという特徴が認められる。

第9図 出土遺物集計表

(出土点数および存在比%)

区分	種別	灰色粘質土	SD-01	瓦溜り	合計
土器類	須恵器	647 (41.34)	349 (38.14)	28 (53.85)	1,024 (40.44)
	土師器	386 (24.66)	183 (20.00)	11 (21.15)	580 (22.91)
	土師質土器	520 (33.23)	377 (41.20)	11 (21.15)	908 (35.86)
	その他	12 (0.77)	6 (0.66)	2 (3.85)	20 (0.79)
小計		1,565 (100.00) (61.81)	915 (100.00) (36.14)	52 (100.00) (2.05)	2,532 (100.00) (100.00)
瓦類	軒丸瓦	7 (0.72)	3 (0.27)	6 (1.10)	16 (0.61)
	軒平瓦	5 (0.51)	2 (0.18)	9 (1.65)	16 (0.61)
	丸瓦	256 (26.34)	296 (26.81)	202 (37.07)	754 (28.77)
	平瓦	701 (72.12)	797 (72.20)	327 (60.00)	1,825 (69.63)
	セン	3 (0.31)	4 (0.36)	1 (0.18)	8 (0.31)
	その他	0 (0.00)	2 (0.18)	0 (0.00)	2 (0.07)
小計		972 (100.00) (37.09)	1,104 (100.00) (42.12)	545 (100.00) (20.79)	2,621 (100.00) (100.00)
合計		2,537 (49.23)	2,019 (39.18)	597 (11.59)	5,153 (100.00)



第10図 土器類器種別存在比(破片数比)

## ① 須 恵 器

今回の調査で検出された須恵器には坏蓋、坏身、高坏、壺類、甕類などがある。

### ・坏蓋（第11図№1～6，第17図№96）

いずれも破片で全形を窺えるものはないが，№1～3，96は輪状つまみの破片である。いずれもつまみの高さは低く，つまみの周囲は回転ヘラケズリの後ナデで仕上げられている。つまみの内側もナデ調整を施す。№4～6は坏蓋口縁端部の破片で，かえりを付けるものである。いずれもつまみの形態は不明であるが，今回の調査で擬宝珠のつまみは出土していないので，№1～3のようなタイプの輪状つまみが付くものと考えられる。時期としては7c代後半～8c代前半にかけて見られるタイプのものと考えられる。

### ・坏身（第11図№7～14，16～18，第12図№19～34，第17図№97～101，第20図№163～166）

口縁部および坏底部の形態によって以下のように分類される。

## ★口縁部の形態

A類……内湾して伸びて口縁部に至る。端部は丸くおさめる。

（第11図№7，11，第17図№101）

B類……内湾して伸びた後口縁部で屈曲して小さく外反する。

（第11図№8～10，第20図№163，164）

C類……内湾して伸びた後口縁部付近で大きく外反する。

（第11図№13，14）

D類……坏底部から立ち上がった後直線的に伸びて口縁部に至る。

（第12図№27，28）

## ★坏底部の形態

1類……平底でゆるやかに立ち上がる。

（第11図№10～12，16～18，第17図№100，第20図№163，165）

2類……高く「ハ」の字に開く高台を坏底部外周より内側に付ける。坏部はゆるやかに立ち上がる。

（第12図№19～26，第17図№97～99）

3類……低い高台を坏底部外周付近に付ける。坏部は角度を持って急激に立ち上がる。

（第12図№27～34，第20図№166）

A類のものは，坏蓋と坏身が逆転して坏身の受部が消失する段階以降に一般的に見られる口縁部の形態である。

B類のものは，出雲地方に特有の形態であると指摘されており，<sup>(註1)</sup> 国庁3形式～4形式，<sup>(註2)</sup> 柳浦2式～4式<sup>(註3)</sup>（または柳浦6期～8期）<sup>(註4)</sup>に見られる。B類の口縁部形態を持つものの中で高台を付けるものは管見の限りでは存在せず，平底の底部を持つものと考えられる。

C類のものは、資料的に乏しく、編年の対象に成り得ていないため、年代的には不明である。

D類のものは、国庁4形式以降、柳浦3式（または柳浦7期）以降に見られ、年代的に新しい要素として捉えられているものである。

1類のものには、糸切りで切り離した後ナデ調整を行うものa類（No11, 165）と、ナデを行わず未調整のものb類（No12, 17, 18, 100, 163）が見られる。これらの技法については、糸切りが出現し、その後ナデ調整を施す時期が国庁3形式、柳浦3式（または柳浦7期）、回転糸切りの後調整を施さないものが国庁4形式以降、柳浦4式（または柳浦8期）以降であり、糸切り後未調整の底部を持つものが後出するとされている。

2類のものには、切り離し手法は不明であるがナデ調整を施した痕跡が認められるものa類（No22, 23, 24, 26）、糸切りの後にナデ調整を施すものb類（No20, 21, 99）があり、糸切りの後に未調整のものは見られない。このことから糸切りの後にナデ調整を施すものは国庁3形式、柳浦3式（または柳浦7期）に併行し、ナデ調整のみ認められるものはヘラ切りの可能性が考えられることから、やや古い様相を残すものと考えられる。

3類のものは、糸切り後未調整のもの（No28, 30, 31, 32, 33, 34, 166）のみで、ナデ調整を施すものは見られない。また、低い高台を坏底部外周付近に取り付け、坏部が角度を持って急激に立ち上がるものは、国庁4形式以降、柳浦4式（または柳浦8期）以降に存在するとされている。

以上の口縁部形態と、坏底部形態との対応関係を見ると、A類に対応するものに1a類があり、A-1a類（No11）とする。B類に対応するものには1b類があり、B-1b類（No10, 163）とする。これらの実年代は、坏底部の調整手法から考えると、A-1a類が8c中頃、B-1b類は8c後葉と考えられる。C類に対応する坏底部は今回の調査では確認されていないため不明である。D類に対応する坏底部には3類があり、D-3類（No27, 28）とする。坏底部の形態から8c後葉以降の実年代が考えられるが、No27, 28のように坏部が直線的に長く伸びるものは更に新しい要素として捉えられており、類似のものは小松窯跡群<sup>(註5)</sup>、神田遺跡<sup>(註6)</sup>、平廻田3号窯<sup>(註7)</sup>から検出されている。しかし、本遺跡では平廻田3号窯で見られるような大きく口縁部が外反する坏や皿がないことから、10c代までは下らず、9c代末葉までのものとするのが妥当であると思われる。

#### ・皿類（第11図No15, 第17図No102）

いずれも口縁部の破片であるが、直線的に短く開き器高が低いため、皿類に含まれるものと考えられる。底部形態は欠損しているため不明であるが、No15は平底、No102は高台が付く可能性が考えられる。

#### ・壺類（第13図No36, 37, 45~47, 第17図No103, 106~107, 第18図No116, 第20図No167）

壺の口縁部と考えられるものにはNo36, 106がある。口縁端部は欠損しており、形態は不明であるが、小さく外反して開いた後端部を上方につまみ上げるタイプのものと思われる。

No37は長頸壺の口縁部であり、口縁端部の形態は不明であるが、やや張り気味な肩部を持つものと考えられる。

壺類の底部と考えられるものには、高台を付けるもの（No45~47, 103）と、無高台のもの（No116,

167)がある。このうち底部の調整が判明するものは、No45、167は回転系切り後未調整、No46、103は切り離し手法は不明であるが、ナデ調整を施した痕跡が認められる。またNo116は細片であるが、底部には回転系切りの痕跡を留める。

・壺類 (第13図No35、38~44、48、第17図No108~115、第18図No117~120、第20図No169)

壺類の口縁部と考えられるものには、口縁部が短く外反して開くもの (No35、38、39、108、109)と、口縁部が長く、外面を沈線と波状文で装飾するもの (No40、41、110~113)がある。

壺類の胴部と考えられるものには、No42~44、114、115、169があり、いずれも外面には平行叩きやカキ目の痕跡を残すが、No114、169は内面の<sup>(註8)</sup>で具痕が通常の同心円状ではなく、放射状の形態を持つ。このタイプの類例は、四土寺V区出土のものや<sup>(註9)</sup>平廻田遺跡Ⅲ区の灰原出土のもの、<sup>(註10)</sup>別所遺跡I-1区出土のものに見られる。

壺類の底部と考えられるものには、No48、117~120がある。いずれも厚手の平底でよく焼けているが、No120は内外面が淡黒灰色、断面が淡灰色を呈し、瓦質のものである。いずれのものも底部の調整はヘラ状の工具、またはナデによる調整を施したかのような痕跡が認められる。

・高坏 (第14図49~53、第17図No104、105、第20図No168)

高坏には、長脚のもの (No50)と、低脚のもの (No49、51~53、105)がある。いずれも破片であるため透しの有無及び形態は不明であるが、No51、104、105、168には透しを穿った痕跡が認められる。また脚端部の形態を見ると、端部で上下に拡張するものの、シャープさを失っており、7c代に見られるタイプのものと考えられる。

・その他の器種 (第14図No54~56、第16図95、第20図No162)

No54は腹胴部の破片である。胴部外面に2条の沈線を巡らせ、その間にクシ状工具による刺突文を施す。

No55は把手状の破片で、平瓶に付けられるタイプのものである。

No56は大型の把手を取り付けた須恵器の破片であるが、用途、器種は不明である。

No95は須恵質の土馬である。残存胴部長8.2cm、最大胴部径3.2cmを測り裸馬である。頭部、四肢、尻尾はすべて欠損しており、雌雄の区別は不明である。

No162は窯体の破片である。壺の破片が外面を上に向けた状態で溶着しており、断面の一部が二次焼成を受けていることから、焼き台として使われた破片であると考えられる。この壺の溶着した側の窯体の表面は滑らかであるが、裏面は凹凸が著しく、小さな土器片や砂粒が多量に付着している状況が観察されるため、何度か窯の作業を行った後、床面を部分的に補修したことが考えられる。

## ② 土 師 器

今回の調査で検出された土師器は、壺類がほとんどであり、それ以外の器種としては若干のかまど、支脚が見られる程度である。

・壺類 (第14図No57~62、第18図No121~126)

いずれも口縁部が外反する単純口縁のものであり、口縁部以下肩部および胴部は張らずに垂下して

丸底の底部に至るものと考えられる。いずれもよく磨滅しており、外面にハケ目などの調整が残るものはないが、内面には横方向にヘラケズリを施した痕跡が観察されるものもある。

・その他の器種（第16図No91～94，第18図No127，128，第20図No173）

No93，128はかまどの破片で，焚口の部分に当たると考えられる。

No91，127，173は土製支脚の破片で，完形品のものはないが，裾部は凸形に広がり，頂部の三方に枝を付ける通有のタイプのもと考えられる。

No92は把手の破片で，壘類に取り付けられるものと考えられる。

No94は直径9.2cmを測る円盤状の土製品で，鏡の模造品と思われるものである。<sup>(註11)</sup>鏡面は凸形にゆるいカーブを描き，鏡背部には鉤にあたる突起がある。器厚は中心部が最も厚く1.3cmを測る。

### ③ 土師質土器

今回の調査では，須恵器に次いで多量の土師質土器が検出されている。破片がほとんどであるため全形の観察できるものは少ないが，器種としては椀類，坏類，皿類などがある。

・椀形土器（第19図No129，130）

No129は，口径15.1cm，底径6.0cm，器高5.7cmを測る。口径：器高の比率が2：1に近いことから椀形土器の範疇に含まれるものと考えられる。形態の特徴としては，糸切り痕を残す平底の底部からゆるやかに立ち上がり，逆「八」字状に開きながら直線的に伸びる。

No130は底部を欠損しているが，口径：器高の比率から考えると椀形土器に分類される。口縁部の形態についてはNo129とは異なり，内弯気味に伸びた後，口縁端部付近で小さく反外する。

・坏形土器（第15図No63，第19図No131～133）

No63，131は口径：器高の比率が3：1に近いので，坏形土器の範疇に含まれるものである。<sup>(註12)</sup>

No63は回転糸切り後未調整の平底から角度をもって急激に立ち上がり，短く直線的に伸びて口縁部に至る。

No131は糸切りの残る平底からゆるやかに立ち上がり，やや内弯気味に伸びて口縁部に至る。また，立ち上がり部外面にはくびれ部分を持つ。

No132，133は底部を欠損しているが，器高は皿形土器よりも高くなるものと考えられ，坏形土器に含める。口縁部は直線的に伸びるもの（No132）と，端部がわずかに反外するもの（No133）がある。

・皿形土器（第19図No142，143）

No142は坏部が浅く，口縁部はほとんど立ち上がりを見せずに横方向に伸びる。高台は端部が欠損しているが，細長く「八」字状に開くタイプのものと思われ，石台遺跡<sup>(註13)</sup>に類例が見られる。

No143は破片であるが，坏部が浅く，同類のものであると考えられる。

・脚付きのもの（第15図No84～86）

底部に空洞のない柱状の脚を付けるもので，裾部は広がるタイプのものである。同様の器種は石台遺跡<sup>(註14)</sup>，大溝谷遺跡SD-01<sup>(註15)</sup>，大屋敷遺跡<sup>(註16)</sup>，中竹矢遺跡Ⅳ区<sup>(註17)</sup>などに見られる。本遺跡出土のものは磨滅が著しいため調整は不明であるが，他遺跡出土のものを見ると，底部調整は回転糸切り後未調整である。

・土鍋（第20図No160）

口径23.8cmを測る厚手の土器で、口縁部は小さく開いて外反する。内外面に横または斜め方向のハケ目調整が見られる。

・鉄鉢形土器（第20図No171, 172）

内湾した口縁部を持つ鉢形の土器である。色調は暗褐色を呈する。No171は口縁部の破片であるが、端部から2.5cm下がった部位にφ3.5mm程の穿孔が見られる。

・坏類の破片と思われるもの

坏類の破片と思われるものの内、特に底部の形態に注目して分類すると以下ようになる。

★坏底部の形態

A類……平底の底部を持つもの。

このうち、口縁部が角度を持って急激に立ち上がるものをA-1類、口縁部がゆるやかに立ち上がり、たちあがり部外面にくびれを持つものをA-2類とする。

・A-1類（第15図No63, 64, 67）

・A-2類（第15図No65, 66, 68, 70, 第19図No131, 134~137, 139~141）

B類……底部に高台が付くものの中で、高台が高く「ハ」字状に開くもの。

このうち、高台端部を丸くおさめるものをB-1類、端部に平坦面を持つものをB-2類とする。

・B-1類（第15図No71~73, 79~83, 第19図No144~153, 第20図No170）

・B-2類（第15図No74, 75）

C類……底部に高台が付くものの中で、高台が低く、断面三角形状を呈するもの。

（第15図No76~78, 第19図No154~159）

次にそれぞれのタイプ別に底部径を計測すると、A類のものでは、A-1類が6.2~7.5cmの範囲に分布する。

A-2類は4.4~5.3cmの範囲に集中する小型のもの（No65, 131, 134~137, 141）、6.4~7.2cmの範囲に集中する中型のもの（No66, 68, 139, 140）、8.9cmを測る大型のもの（No70）が存在する。底径の大きさによる形態の違いはあまり見受けられないが、小型のものの中には皿形土器に属するもの、中型のものの中には碗形土器に属するものが存在する可能性がある。

B類のものでは、B-1類は4.1~5.4cmの範囲に分布する小型のもの（No79~83）、6.0~7.8cmの範囲に集中する中型のもの（No72, 73, 144~150, 170）、8.5cm以上の大型のもの（No71, 151~153）が存在する。このうち小型のものは灰色粘質土中からの出土のみ、中~大型のものはSD-01からの出土に集中する傾向が認められる。大きさによる形態的な特徴としては、小型のものは高台部が先細りに作られ、あまり開かないものが多く、中~大型のものは高台が厚く作られ、大きく「ハ」字状に開いて安定感のあるものが多い。

B-2類のものは2例しかないが、No74は7.2cm、No75は8.3cmを測る。両者間に形態的な相違は見られない。

C類では5.2~5.4cmの範囲に分布する小型のもの（No154、155）、6.0~7.1cmの範囲に分布する中型のもの（No76~78、156~159）がある。形態的な特徴として、底径の小さいものは高台が低くなる傾向が認められる。

このようにA~C類は、底径によって小型から大型のものに分類されるが、これが時期的なものを示すのか、または上部に取り付く口縁部との関連を示すのかは不明であり、現時点では明言できない。

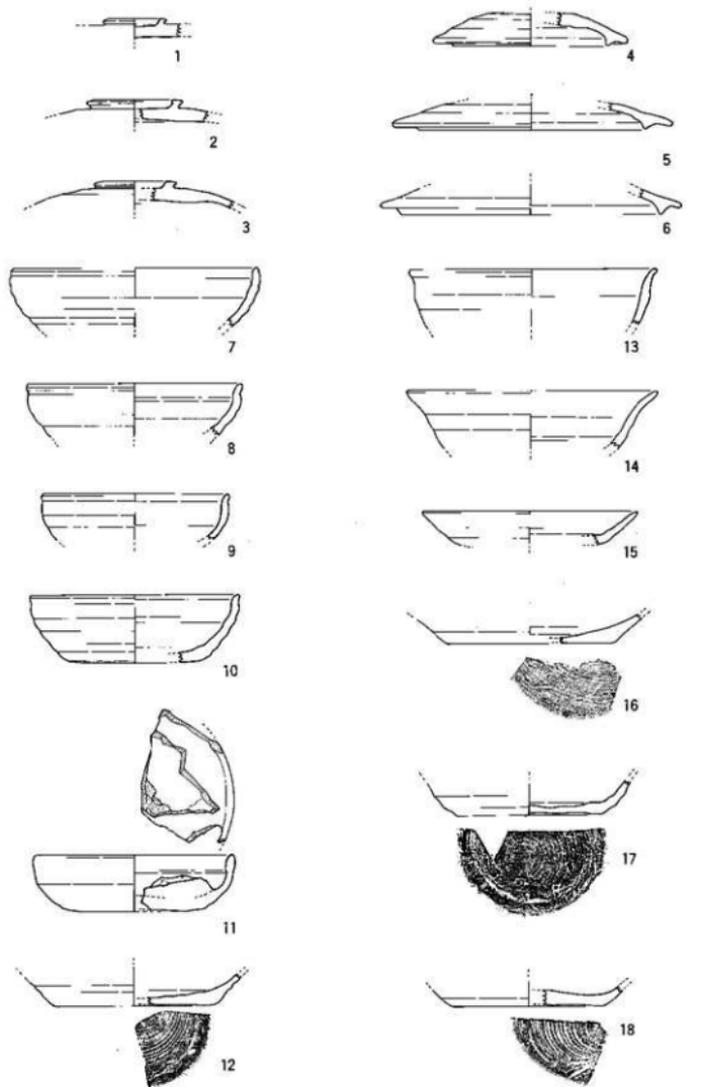
#### ④ 陶磁器類

今回の調査で出土した陶磁器類はごくわずかであり、灰色粘質土中から出土している。うち4点を掲載した。

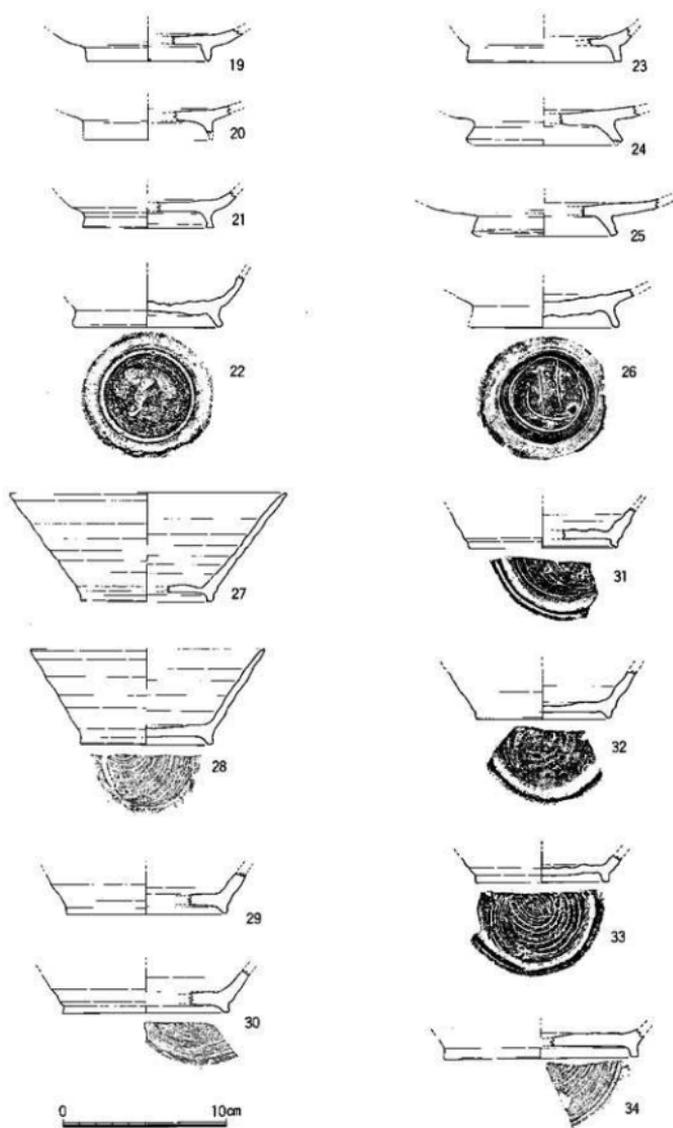
No87は輸入白磁碗である。高台は削り出しで低い。軸は高台にかからず、坏部内外面に認められる。口縁部は欠損しているが、口縁部を玉縁状に肥厚させるタイプが付くものと考えられ、太宰府の分類<sup>(註18)</sup>によるⅣ類に相当するものと考えられる。

No88は口径15.8cmを測る国産の陶器で、口縁部は内側に玉縁状に肥厚する。外面に雷文と蓮花文を浮き彫り状に施す。用途は不明である。

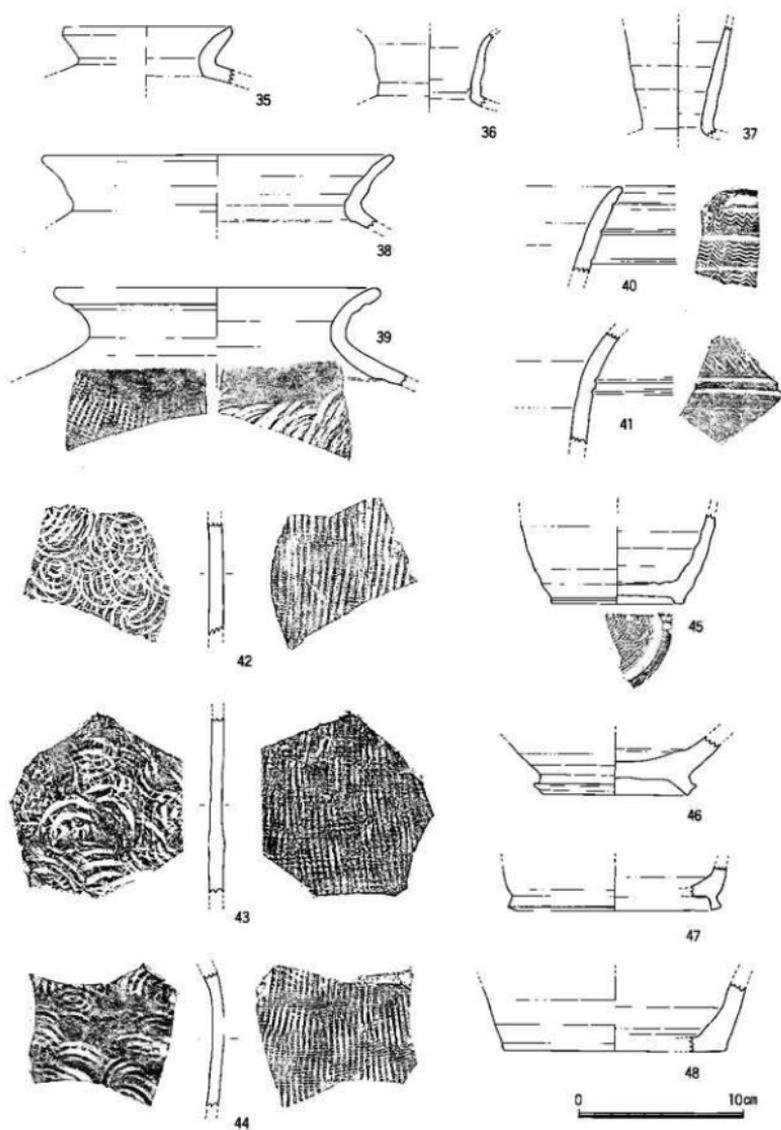
No89、90は国産の陶器で、いずれも淡緑灰色の釉が坏底部中心と周縁部および外面は高台付き部以外に施される。恐らく近世のものと考えられる。



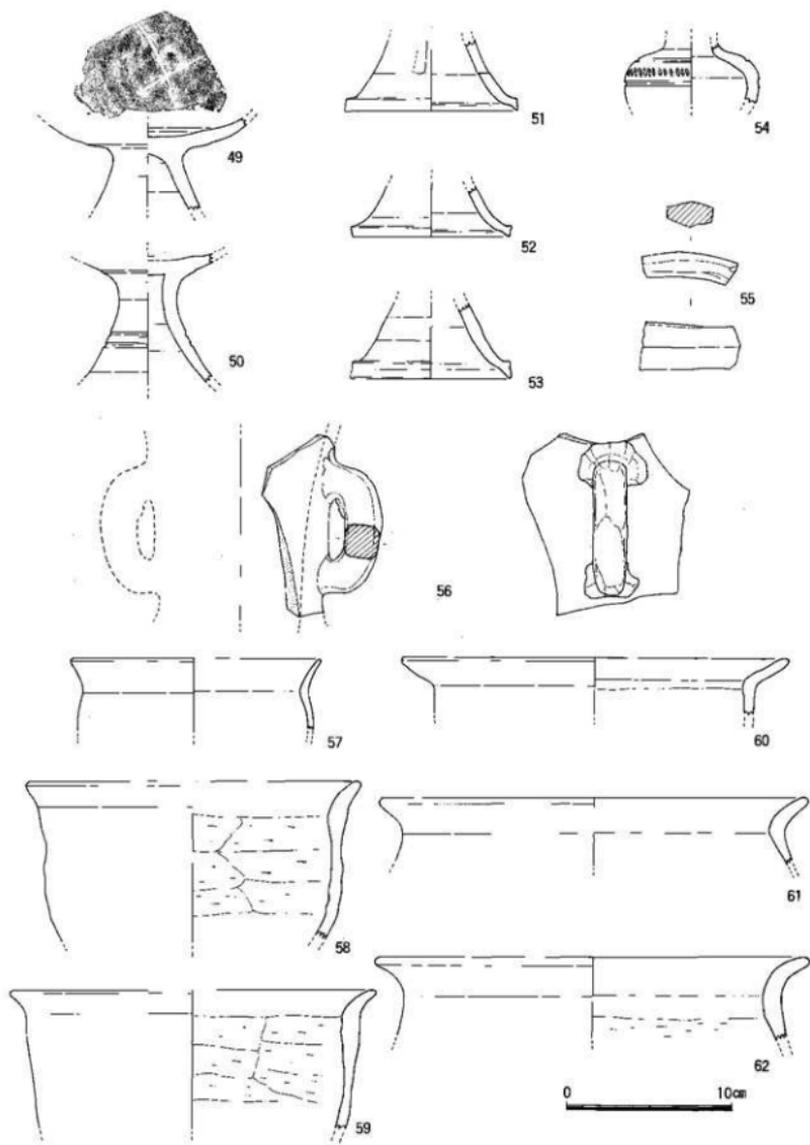
第11圖 灰色粘質土出土遺物(須惠器)



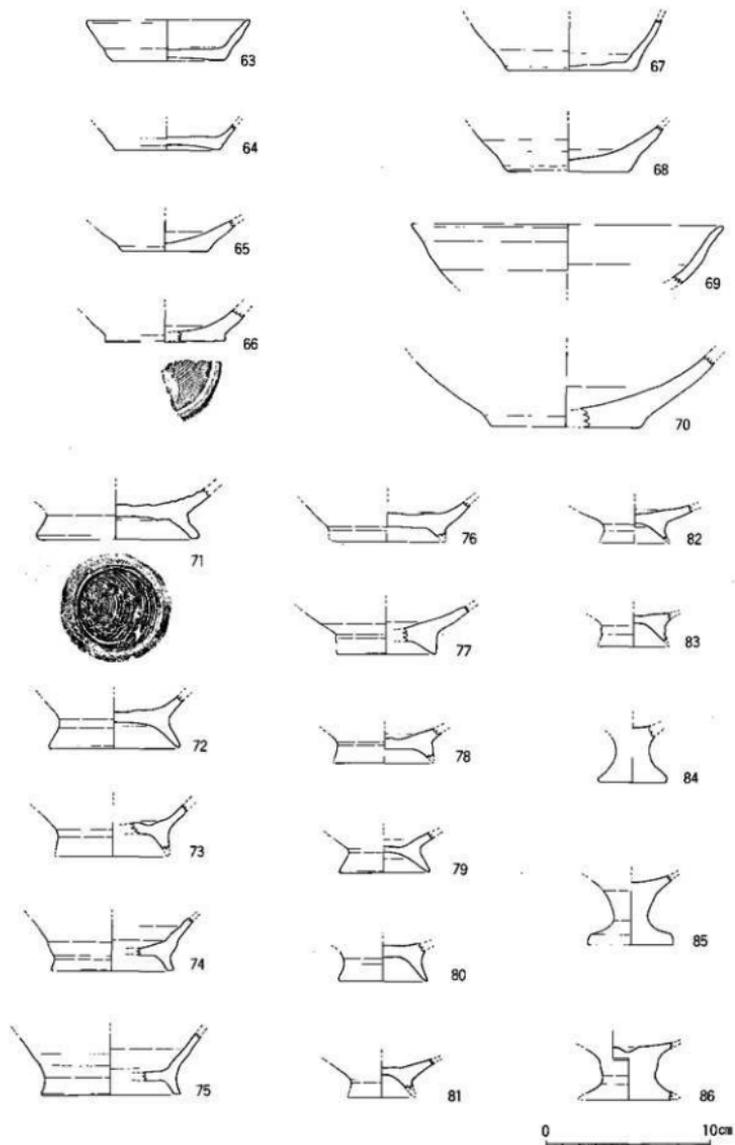
第12圖 灰色粘質土出土遺物(須恵器)



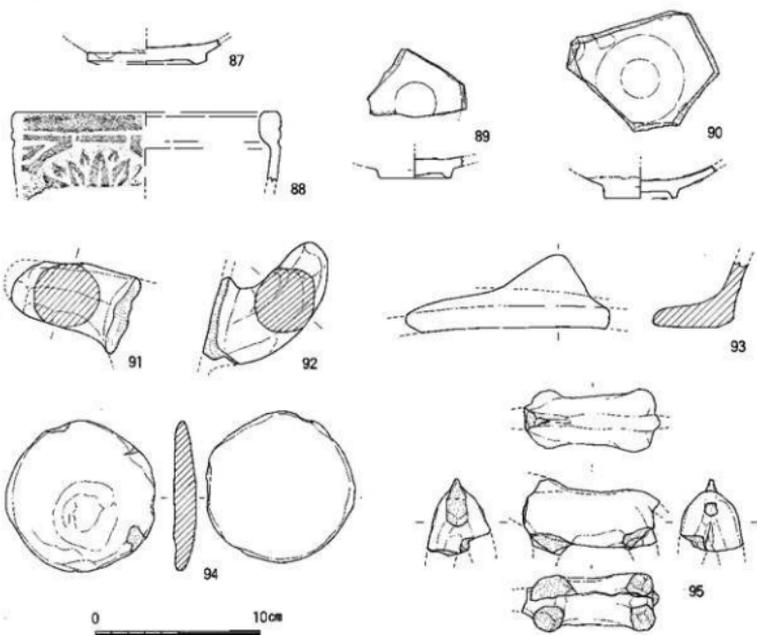
第13圖 灰色粘質土出土遺物(須惠器)



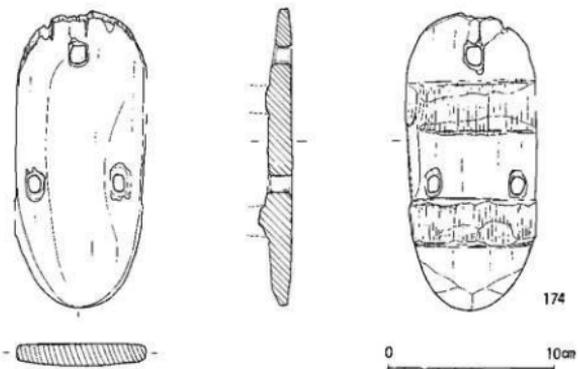
第14圖 灰色粘質土出土遺物(須惠器49-56、土師器57-62)



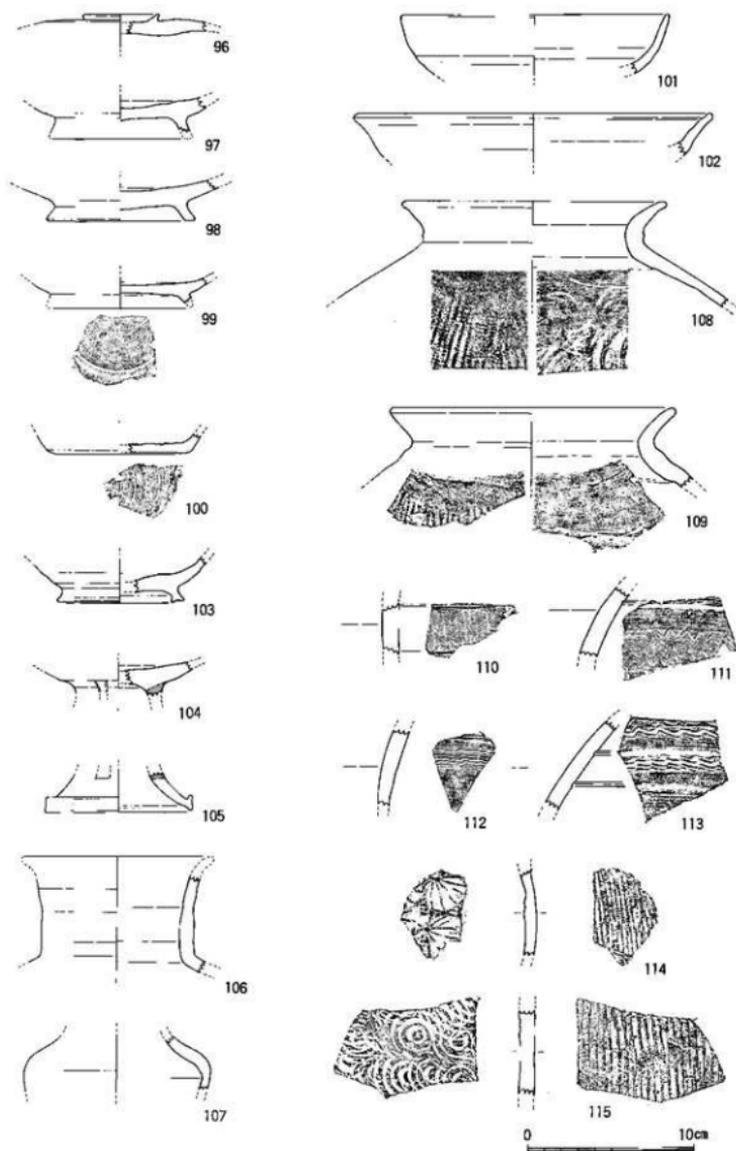
第15图 灰色粘质土出土遗物(土师质土器)



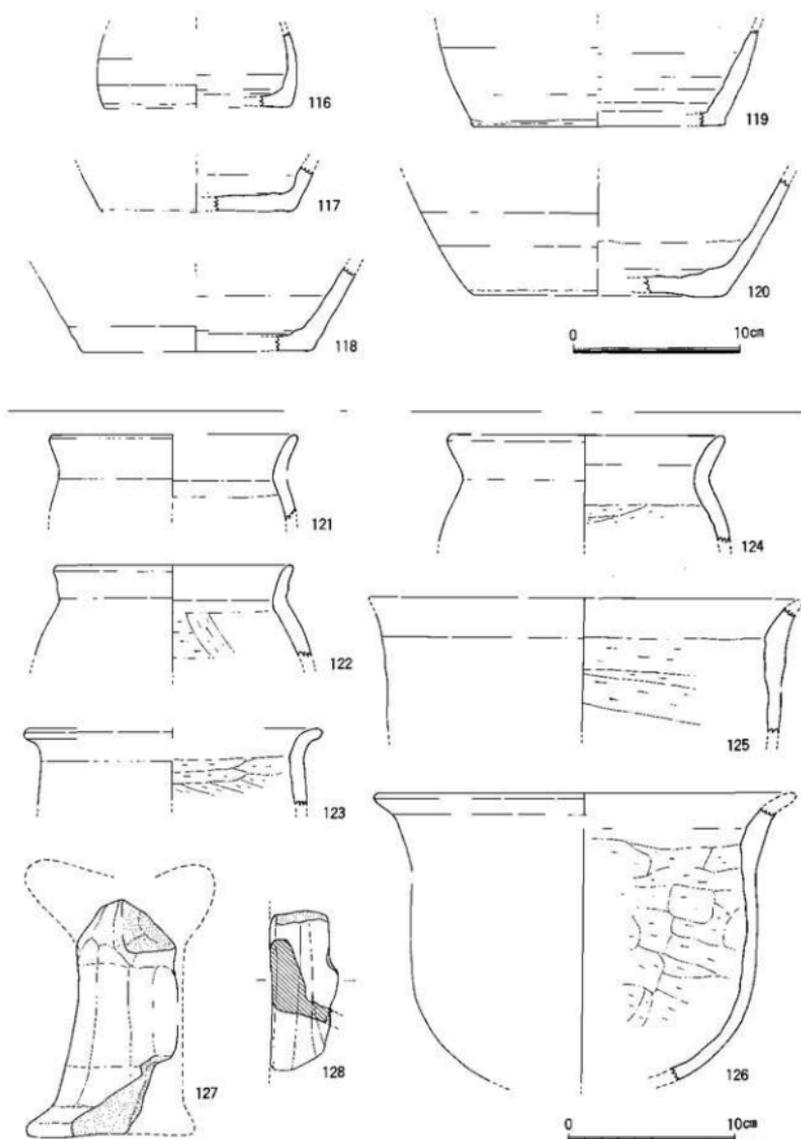
灰色粘質土出土遺物(その他)



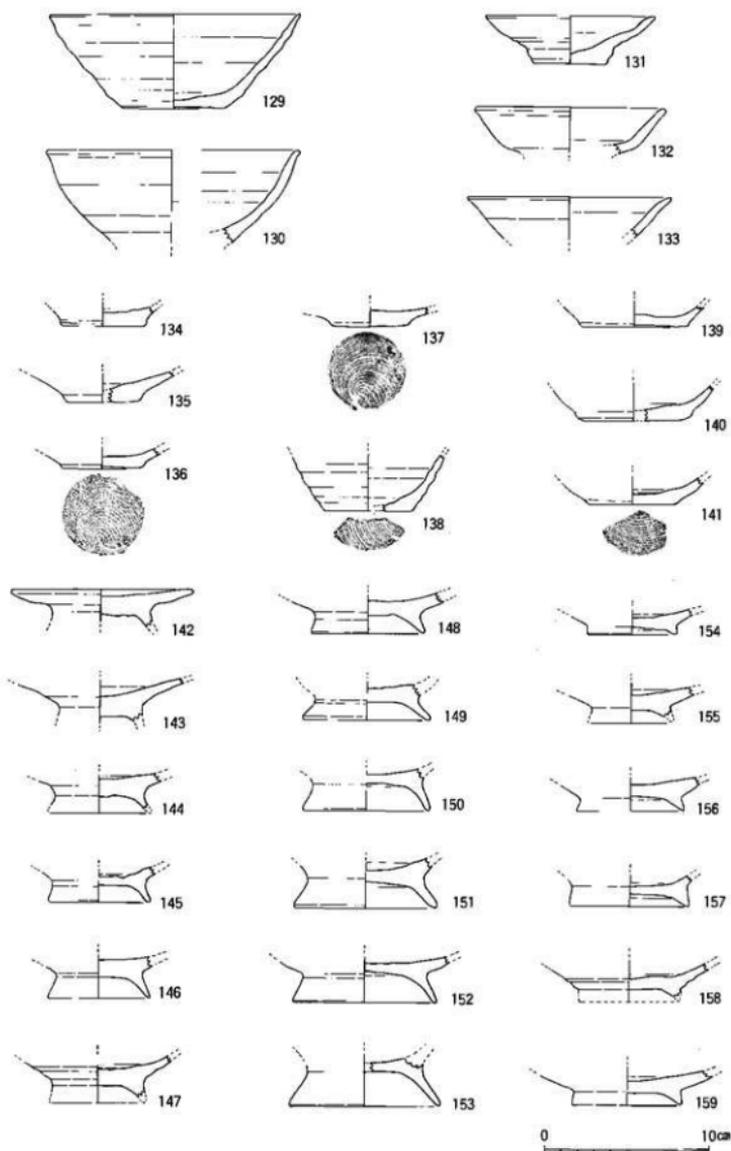
第16図 SD-01 出土遺物(下駄)



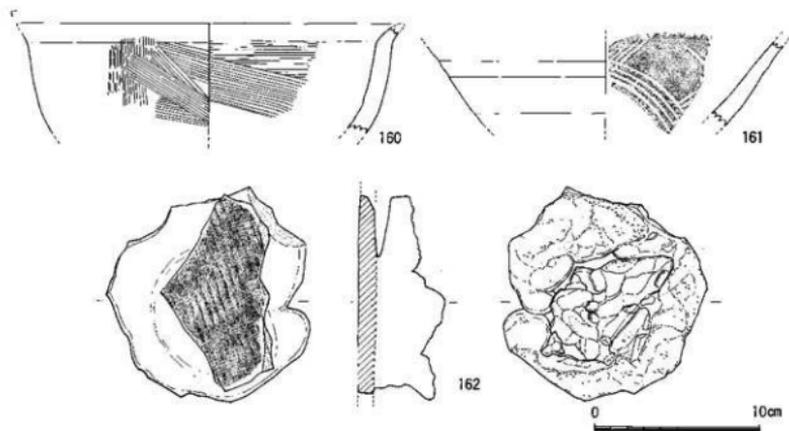
第17図 SD-01出土遺物(須恵群)



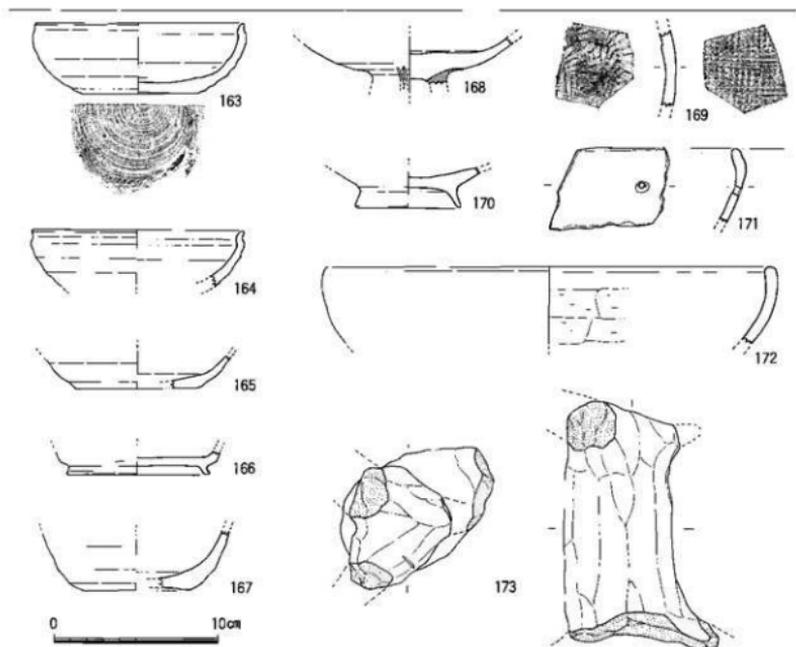
第18図 SD-01 出土遺物(須恵器116~120、土師器121~128)



第19圖 SD-01 出土遺物(土師質土器)



SD-01出土遺物(その他)



第20図 瓦溜り出土遺物(須恵器163~169、土師質土器170~172、支脚173)

## (2) 瓦 類

瓦類については、総数2,621点の内、灰色粘質土中から972点(37.09%)、SD-01中から1,104点(42.12%)、瓦溜り中から545点(20.79%)が出上している(第9図)。数量的にはSD-01や灰色粘質土からの出上数が多いが、小さな破片が多く、また磨滅したものが多くという特徴がある。またこれとは対象的に、瓦溜り中から出上したのものの中には完形品(軒平瓦、平瓦)が見られ、破片についても大形で磨滅したものが少ないため、出上点数はSD-01の約1/2にもかかわらず、総重量ではSD-01を上回る。また狭い調査区の割に瓦が集中して出上しているという特徴がある。

各地点ごとに器種構成を見ると、その構成比がよく似ているのは灰色粘質土とSD-01で、平瓦が多く、70%以上を占め、次いで丸瓦が多く約26~27%を占める。瓦溜りについてもこの傾向は変わらないが、平瓦が60%、丸瓦が37%と、若干丸瓦の存在比が高くなるという特徴が見られる。

### ① 軒丸瓦(第24図No1~6)

今回の調査において軒丸瓦は破片を含めて16点出土しており、瓦類出土数の0.61%を占める。この内瓦当文様の明確に残るもの6点を掲載した。No1~4は瓦溜り、No5、6は灰色粘質土出上である。

No1~5は国分寺の分類による第1類に含まれるものであり、隆起した中房に6個の蓮子を容れ、7弁の花文を陽刻し、圏線で画した外に7単位の唐草文帯を巡らし、外区に珠文帯を巡らす。このうち外周に細い圏線を伴うものB類(No1、4)と、伴わずに平縁で終わらせるものA-2類(No2、3)、また平縁で終わらせ、更に面取りを施すものA-1類(No5)が見られるが、文様自体は全く共通のものである。このA、B類の突帯の有無については、瓦当の型枠に粘土を詰める段階において、型枠からはみ出たものを取り除く方法(A類)と、はみ出た粘土を活かして周縁部を突帯状に作る方法(B類)があることを示唆するものである。

また、瓦当裏面はいずれもナデ調整を施しており、指頭痕を残し、丸瓦との接合部が観察できるものには、接合面の切り込みが平行線状のもの(No3、4)と、鋸歯状になっているもの(No5)がある。

焼成はNo1、4は須恵質で堅緻、淡青灰色を呈し、No2、3はやや軟質で内外面黒灰色、断面灰白色を呈し、二次焼成を受けた可能性も考えられる。No5は焼成は良好であるが、淡褐色を早する。

No6は国分寺第3類に含まれるものであり、蓮子を持たない退化した小型の中房を中心に四葉風の花文を持ち、外区に変形した唐草文四単位を配する。本来は更に圏線で画した外周に珠文帯を巡らすタイプのものであるが、本例では欠損している。焼成はやや軟質で黄褐色を早する。二次焼成を受けた可能性がある。

### ② 軒平瓦(第24図No7~第27図No18)

今回の調査において軒平瓦は破片を含めて16点出土しており、瓦類出土数の0.61%を占める。この内瓦当文様の明確なもの12点を掲載した。瓦溜り出上のはNo9、10、14、15、16、17、18、SD-01出土のものはNo8、灰色粘質土出上のはNo7、11、12、13である。また、完形品が4点

あり、全て瓦溜りに集中している。

№7～9、12～18は<sup>(319)</sup>国分寺1類に含まれるものであり、3個の花文に四単位の唐草文を配し、内外を突線で囲んだ珠文帯で囲むものである。この内外周に突帯を伴うものb類(№9、15、16、17)と、伴わないものa類(№7、8、12、13、14、18)がある。このa、b類の突帯の有無については、軒丸瓦と同じ理由によるものと考えられ、その結果、a類は瓦当部が小振り、b類は大振りなものとなっている。

このa、b類については、ともに瓦当面の文様構成および細部の形態に至るまで全く同一であるが、a類のものは文様がシャープであるのに対し、b類のものはシャープさに欠けてやや鈍くなる感がある。さらに、a類のものには段頸が付けられ、b類のものには明瞭な段を持たず曲線頸で、せいぜい瓦当部の下部に狭い平坦面を作り出す程度である等、関連性が認められ、頸の形態の変遷が段頸から曲線頸へと変遷するという編年観からすれば、a類のものが時期的に若干先行するタイプであると考えられる。軒丸瓦については、A、B類間に文様の相違はないが、同様に考えれば突帯に共通の特徴を持つA類のものが時期的に先行するタイプであることが考えられる。

また3個の花文のうち、中央の花文を挟んで対峙する左右の花文の外側には、小さな三葉文状の文様が見られる(第42図)。今回の調査で出上した軒平瓦には全てのものに観察されるが、これが同范関係を知る手がかりとなる可能性があるとの教示を受けた。<sup>(320)</sup>

平瓦部の調整は、凹面には布目痕および糸切り痕を残し、周縁部にケズリを施す。模骨痕を残すものがないことから一枚作りによる可能性が考えられる。凸面はタタキ痕をへら状工具によるケズリおよびナデにより消しているものが大半であるが、№14は凸面に縄目タタキ(NB)を残す。

その他に特徴として見られるのは、№16の平瓦尻部端面の4箇所に粘土塊状のものが付着しており、焼成前の乾燥を行う段階で瓦を倒立させていたことが想定される。

№10、11は平瓦の端面にタタキを施して軒平瓦風に仕上げた補修瓦である。№10の端面に見られるタタキは平瓦凸面にも同様のタタキが見られ、また№72に見られることから、平瓦のタタキ用原体が流用されていることが窺われる。

### ③ 丸瓦(第28図～第30図)

今回の調査において丸瓦は破片を含めて754点出土しており、瓦類出土数の28.77%を占める。このうち掲載したものは8点であり、瓦溜りから№19、20、21、22、24、25、26、灰色粘質土から№23が出土している。

今回の調査で出土した丸瓦のうち、破片であるために全形の不明なものが多いが、玉縁式のものほとんどであり、行基式のものごくわずかである。

№19～25は玉縁式のものであり、一般的な形態を持つものが大半であるが、№25のように寸法が短い小型のものも1点出土している。調整の手法としては、凹面には布目痕が残り、中には糸切り痕が観察できるものもある(№19、22)。また、凹面に粘土をつなぎ合わせた痕跡が見られるものがあり(№19、20、21)、№21はつなぎ合わせ目をナデ消す調整が施されている。凸面はナデで、タタキは

残らない。

焼成は須恵質で青灰色を呈するものが多い。

No26は行草式になるもので、凹面に布目痕、凸面にナデ調整を施す。焼成は軟質で灰白色を呈する。

#### ④ 平瓦 (第31図～40図)

今回の調査で出土した平瓦は総数1,825点(69.63%)、総重量409,020gにおよぶ(第21図)。平瓦についてはほとんどが破片であり、瓦溜り中から完形のもが4点出土したのみである。このうち特徴的なものとしては、No29, 48は隅切り瓦であり、No27, 48は端部の2箇所に凹みが見られ、これは平瓦作成時の乾燥段階に立て並べた際に隣接する瓦と癒着するのを防ぐために緩衝材を挟んだ痕跡であると考えられる。またNo29には凹面に模骨痕<sup>(深30)</sup>と思われる痕跡が認められるが、その痕跡は上下で一致しない部分がある。

平瓦のタタキには縄目タタキ(N A, N B)、格子状タタキ(K A～K I)、平行タタキ(H)が見られ、次のように分類できる(第23図)。

#### ★タタキの形態

N A……縄目タタキで縄目が太いもの。焼成はややあまく、淡灰色を呈するものが多い。タタキは深いものが多い。(第38図No61, 第39図No62, 63)

N B……縄目タタキで縄目が細いもの。薄手で焼成は良好なものが多いが、茶褐色を呈する。タタキは浅いものが多い。(第39図No64, 65, 66, 67)

K A……斜格子状のタタキを施すもの。焼成は須恵質のものと同良のものがある。タタキは深いものが多い。(第31図No27, 28, 第32図No29)

K B……菱形格子状のタタキで大型のもの。焼成は良くなく、茶褐色を呈するものが多い。タタキは浅い。この内、格子内部が突出するものをK B<sub>1</sub> (第32図No32)、突出しないものをK B<sub>2</sub> (第32図No30, 31, 33)とする。

K C……菱形格子状のタタキで小型のもの。焼成は須恵質のものが多い。タタキはやや浅いものが多い。(第34図No34, 35, 36, 37, 38, 39)

K D……方形格子状のタタキで大型のもの。焼成はあまく内外面淡黒灰色、断面灰白色を呈する。タタキは深い。(第34図No40, 41, 42)

K E……方形格子状のタタキで小型のもの。焼成は須恵質のものが多い。タタキはやや浅い。(第34図No43, 44)

K F……方形格子状のタタキで縦長のもの。大型のもの (No45) と小型のもの (No46) があり、大型のものは須恵質、小型のものは内外面淡黒灰色、断面灰白色のものが多い。タタキはやや深い。(第34図No45, 46)

K G……縦方向の平行線とK Bとの組み合わせ。焼成は須恵質で厚手のものが多い。タタキは深い。(第35図No47, 48, 第36図No49, 50)

KH……縦方向の平行線とKBとの組み合わせで、平行線の幅が広いもの。焼成は良くなく、茶褐色を呈する。タタキは浅い。(第36図No51, 52)

KI……筋違いの方形格子状のタタキ。焼成は須恵質のものとの不良のものがある。タタキはやや浅い。(第37図No53, 54, 55)

H………平行タタキ。焼成は須恵質のものが多い。タタキは浅い。この内、タタキが平行線状を呈するものをH<sub>1</sub>(第37図No56, 第38図No57)、タタキが交差するものをH<sub>2</sub>(第38図No58, 59, 60)とする。

その他…何れにも属さず、個体数が少ないために一つの形式として設定し得ないもの。

(第40図No68, 69, 70, 71, 72, 73)

この内、No69, 70はKD類、No73はH<sub>2</sub>類に含まれる可能性があるとの教示を受けた。<sup>(註20)</sup>

これらの分類により、各地点ごとに破片数、重量を計測して集計を行ったものが第21図である。なお、平瓦の破片には完形品から小さな破片まで大小の格差があり、これが存在比率の算出に影響するのを防ぐために、第22図の円グラフは重量%で表わしている。

次にそれぞれのタイプの出土状況を見れば、灰色粘質土中で存在比率(重量%)の高いものを順に挙げると、1. NB (14.6%), 2. KA (13.29%), 3. NA (10.69%)となり、縄目タタキが上位を占める。その他のタイプではKG (8.5%)が目立つ程度である。格子類(KA～KI)：縄目類(NA, NB)の比率は1:0.68である。

SD-01のタイプ構成は灰色粘質土とよく似ており、1. KA (19.81%), 2. NB (11.04%), 3. NA (10.54%)という順位となり、やはり縄目タタキが目立つものの、最も高い比率を占めるものが格子タタキ(KA)に逆転している。その他のタイプではKG (8.69%)が目立つ。格子類：縄目類の比率は1:0.54となる。

瓦溜りのタイプ構成は1. KA (26.76%), 2. KG (20.29%), 3. KC (11.68%)という順位となり、上位を全て格子類が占める。また他の出土地点では少数であったKC, KGの出土量が多いことが注目される。瓦溜りでの格子類：縄目類の比率は1:0.19となり、縄目類の出土量は、格子類の1/5に満たない。

### ⑤ セン (第41図No74, 75)

今回の調査ではセンの出土量が少なく、全調査区を通して8点(0.31%)が出土したのみである。

No74は一部欠損しており、全形を知ることはできないが、23.8×15.2cm、厚さ8.2cmを測る。焼成はやや軟質で灰白色を呈する。

No75は破片となっているが、2面に平坦な面が見られる。焼成は良く、須恵質である。

### (3) 木製品 (第16図No174)

今回の調査で出土した木製品としては下駄1点のみである。全長17.9cm、幅9.8cmを測り、歯部を欠損しているが、2枚の削り出しの歯を持つ高下駄で、鼻緒の孔が3箇所にあけられている。

- 註1) 柳浦俊一「出雲地方の須恵器生産」『山陰考古学の諸問題』1986年
- (2) 松江市教育委員会『出雲国府跡発掘調査概報』1970年
- (3) 柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』3号, 1980年
- (4) 柳浦俊一 註1)と同じ
- (5) 宍道町教育委員会『小松古窯跡群範囲確認調査報告書』1983年
- (6) 島根県教育委員会「神田遺跡」『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』1987年
- (7) 島根県教育委員会『古首志遺跡群発掘調査報告書』1989年
- (8) 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書V—島根県松江市山代町所在, 四王寺跡』1988, 27頁No90
- (9) 註7)と同書, (90頁No13, 14)
- (10) 松江市教育委員会「別所遺跡」『中国電力北松江変電所造成予定地内発掘調査報告書(図版編)』1988年, (40頁NoS54~58)
- (11) 島根県教育委員会「オノ峠遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』1983年
- (12) 島根県教育委員会『石台遺跡—馬橋川改修に伴う発掘調査報告—』1986年  
本書の中で土師質土器の器種分類の基準として, □径:器高の比率が4:1程度のものを皿形土器, 3:1程度のものを坏形土器, 2:1程度のものを碗形土器としている。
- (13) 註12)と同書, (29頁No12)
- (14) 註12)と同書, 脚付きのものとして分類されているもの(26~28頁)
- (15) 註6)と同書, 台付皿, 台付坏とされているもの(214頁No8, 9, 11, 12)など, また遺構外出土のもの(236~237頁)
- (16) 註6)と同書, 台付皿とされているもの(182頁No19~31)
- (17) 島根県教育委員会『般国道松江道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書—X(中竹矢遺跡)』1992年, 台付皿とされているもの(120頁, No421~423)
- (18) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入陶磁器について—形式分類と編年を中心に—」『九州歴史資料館研究論集』4集, 九州歴史資料館, 1978年
- (19) 山本 清「出雲」『新修国分寺の研究, 第4巻—山陰道と山陽道—』古川弘文館, 1991年
- (20) 島根県埋蔵文化財センター第4調査係長内田律雄氏の教示による。

第21図 平瓦タイプ別集計表

(全調査区合計)

タイプ	破片数(個) 存在比(%)	破片重量(g) 存在比(重量%)	内はなれ砂(個) 存在比(%)	内はなれ砂(g) 存在比(重量%)
KA	254(13.92)	84,400(20.63)	47(18.50)	29,450(34.89)
KB	49(2.66)	14,490(3.54)	9(18.37)	3,430(23.69)
KC	54(2.95)	27,880(6.82)	20(37.04)	13,310(47.74)
KD	17(0.93)	4,340(1.06)	1(5.88)	510(11.75)
KE	21(1.15)	4,070(1.00)	1(4.76)	520(12.78)
KF	29(1.59)	4,890(1.20)	1(3.45)	400(8.18)
KG	112(6.14)	52,900(12.93)	69(61.61)	41,380(78.22)
KH	19(1.04)	5,200(1.27)	2(10.53)	520(10.00)
KI	8(0.44)	2,590(0.63)	0(0)	0(0)
H	37(2.03)	16,000(3.91)	9(34.32)	6,510(40.69)
NA	152(9.07)	42,280(10.34)	9(4.85)	2,980(7.05)
NB	214(11.73)	36,840(9.01)	18(8.41)	5,750(15.61)
その他	40(2.19)	14,150(3.46)	5(12.50)	2,800(19.79)
不明	786(43.23)	98,000(24.20)	119(15.08)	23,890(24.13)
合計	1,825	409,020	310(16.99)	131,450(32.14)

(灰色粘質土)

タイプ	破片数(個) 存在比(%)	破片重量(g) 存在比(重量%)	内はなれ砂(個) 存在比(%)	内はなれ砂(g) 存在比(重量%)
KA	74(10.55)	14,470(13.29)	11(14.86)	2,520(17.42)
KB	17(2.43)	4,430(4.07)	4(23.53)	1,070(24.15)
KC	16(2.28)	4,500(4.13)	7(43.75)	1,750(39.89)
KD	6(0.86)	1,210(1.11)	0(0)	0(0)
KE	15(2.14)	2,770(2.54)	0(0)	0(0)
KF	7(1.00)	1,230(1.13)	0(0)	0(0)
KG	34(4.85)	9,260(8.50)	24(70.59)	6,640(71.71)
KH	9(1.28)	1,470(1.35)	2(22.22)	520(35.37)
KI	4(0.57)	840(0.77)	0(0)	0(0)
H	14(2.0)	2,240(2.06)	2(14.29)	100(4.46)
NA	57(8.13)	11,640(10.69)	2(3.51)	370(3.18)
NB	99(14.12)	15,890(14.60)	7(7.07)	2,860(18.00)
その他	10(1.43)	1,750(1.61)	0(0)	0(0)
不明	339(48.36)	37,180(34.15)	35(10.32)	6,280(16.89)
合計	701	108,880	94(13.41)	22,110(20.32)

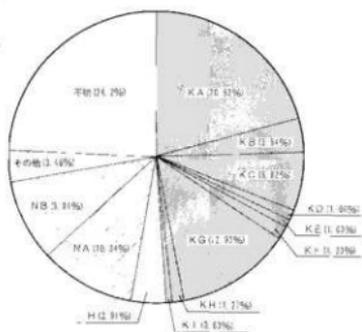
(SD-01)

タイプ	破片数(個) 存在比(%)	破片重量(g) 存在比(重量%)	内はなれ砂(個) 存在比(%)	内はなれ砂(g) 存在比(重量%)
KA	120(15.06)	29,360(13.92)	19(15.85)	8,950(30.48)
KB	17(2.13)	4,050(2.73)	2(11.76)	460(11.36)
KC	14(1.76)	5,670(3.82)	4(28.57)	1,730(30.31)
KD	9(1.13)	2,100(1.42)	0(0)	0(0)
KE	4(0.50)	720(0.49)	0(0)	0(0)
KF	18(2.26)	2,780(1.88)	0(0)	0(0)
KG	41(5.14)	12,880(8.69)	17(41.46)	4,350(33.77)
KH	3(0.38)	1,670(1.13)	0(0)	0(0)
KI	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
H	13(1.63)	4,190(2.83)	3(23.08)	1,280(30.55)
NA	85(10.66)	15,630(10.54)	6(7.06)	2,420(15.48)
NB	99(12.42)	16,370(11.04)	6(6.06)	980(5.99)
その他	20(2.51)	8,190(5.52)	1(5.00)	830(10.13)
不明	354(44.42)	44,630(30.11)	32(14.69)	10,160(22.76)
合計	797	148,240	110(13.80)	31,160(21.02)

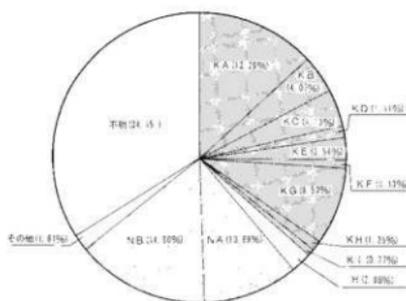
(瓦溜り)

タイプ	破片数(個) 存在比(%)	破片重量(g) 存在比(重量%)	内はなれ砂(個) 存在比(%)	内はなれ砂(g) 存在比(重量%)
KA	60(18.35)	40,570(26.76)	17(28.33)	17,980(44.32)
KB	15(4.59)	6,000(3.96)	3(20.00)	1,900(31.67)
KC	24(7.34)	17,710(11.68)	9(37.50)	9,830(55.51)
KD	2(0.61)	1,030(0.68)	1(50.00)	510(49.51)
KE	2(0.61)	580(0.38)	1(50.00)	520(89.66)
KF	4(1.23)	890(0.58)	1(25.00)	400(45.45)
KG	37(11.31)	30,760(20.29)	28(75.68)	28,600(92.98)
KH	7(2.14)	2,060(1.36)	0(0)	0(0)
KI	4(1.23)	1,750(1.16)	0(0)	0(0)
H	10(3.06)	9,570(6.31)	4(40.00)	5,070(52.98)
NA	40(12.23)	15,010(9.90)	1(2.50)	190(1.27)
NB	16(4.89)	4,580(3.02)	5(31.25)	1,910(41.70)
その他	11(3.36)	4,210(2.78)	4(36.36)	1,970(46.79)
不明	95(29.05)	16,890(11.14)	32(33.68)	7,450(44.11)
合計	327	151,600	106(32.42)	76,330(50.35)

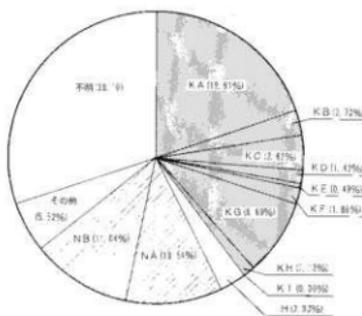
(※ KB-KB<sub>1</sub>+KB<sub>2</sub>, H=H<sub>1</sub>+H<sub>2</sub>)



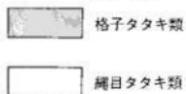
全調査区合計



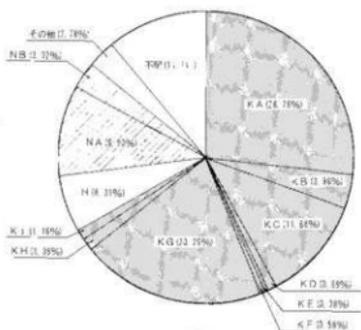
灰色粘質土



SD-01

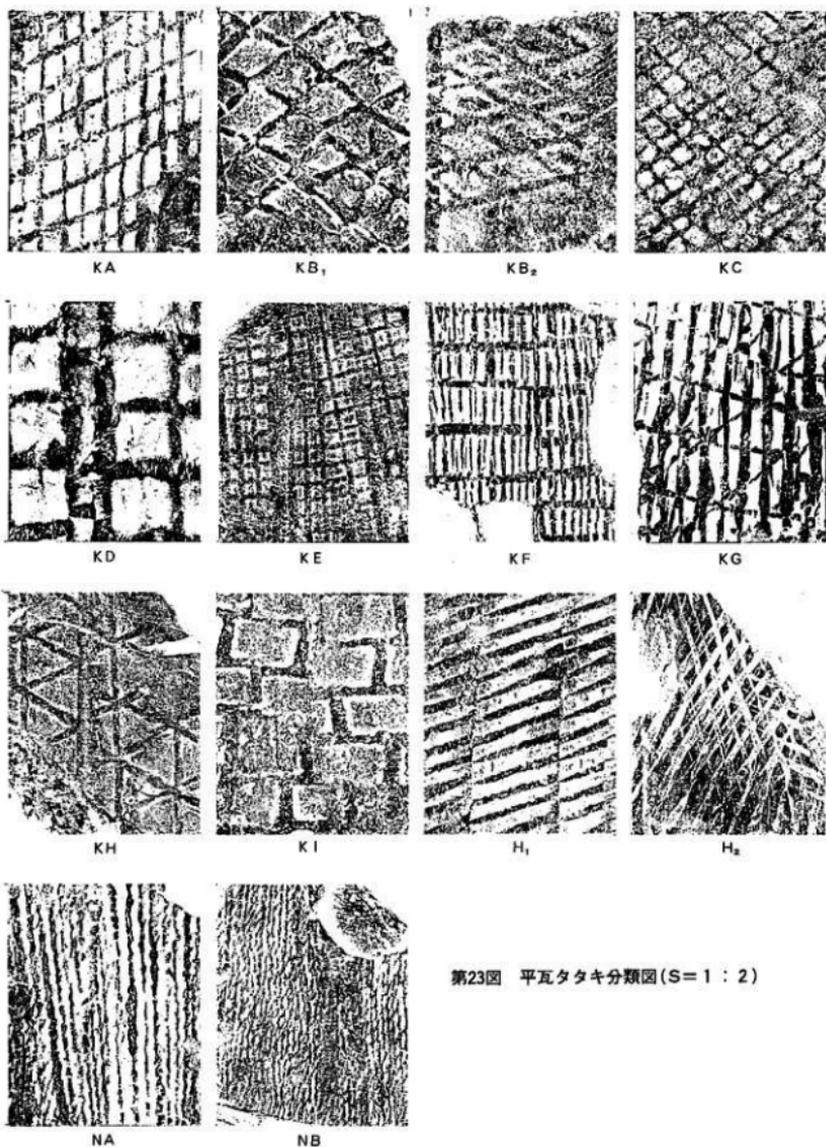


※ KB=KB<sub>1</sub>+KB<sub>2</sub>,  
H=H<sub>1</sub>+H<sub>2</sub>

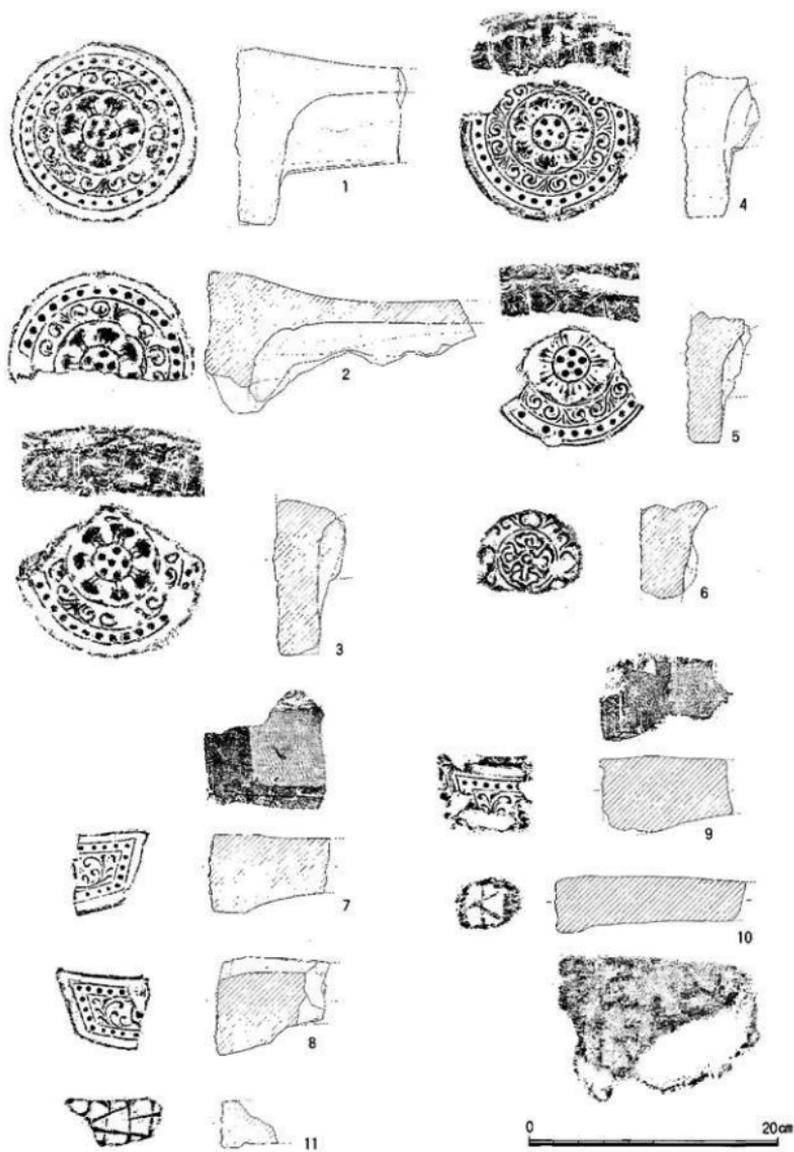


瓦溜り

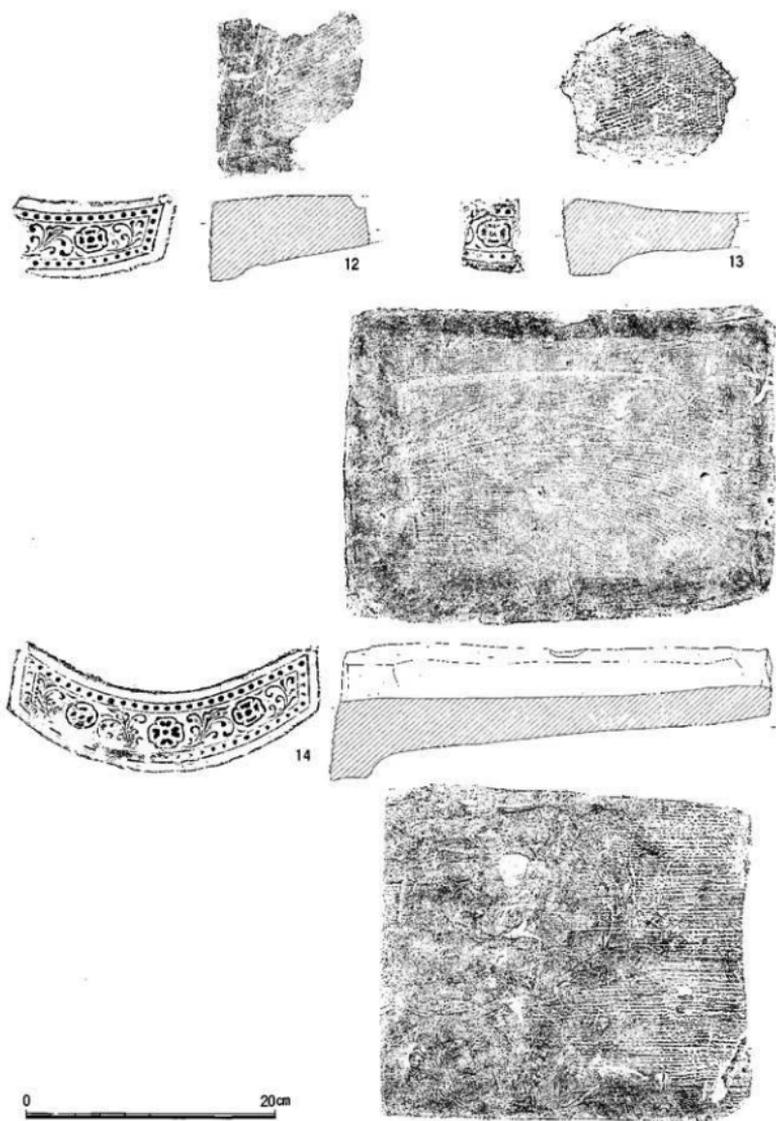
第22図 平瓦タタキ種類別存在比(重量%)



第23図 平瓦タタキ分類図(S=1:2)



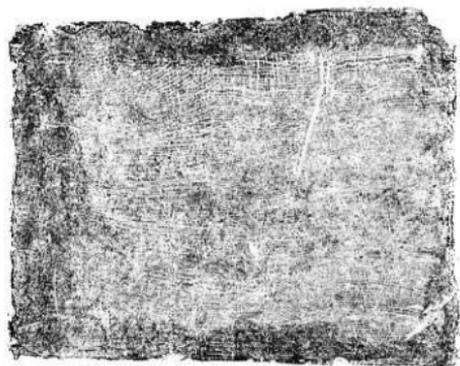
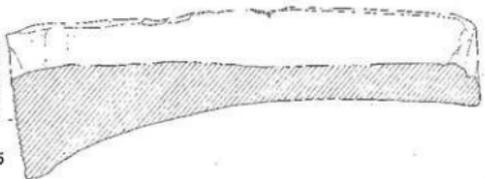
第24图 軒丸瓦、軒平瓦实测图



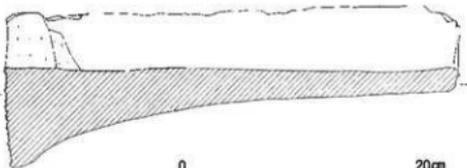
第25圖 軒平瓦実測図



15

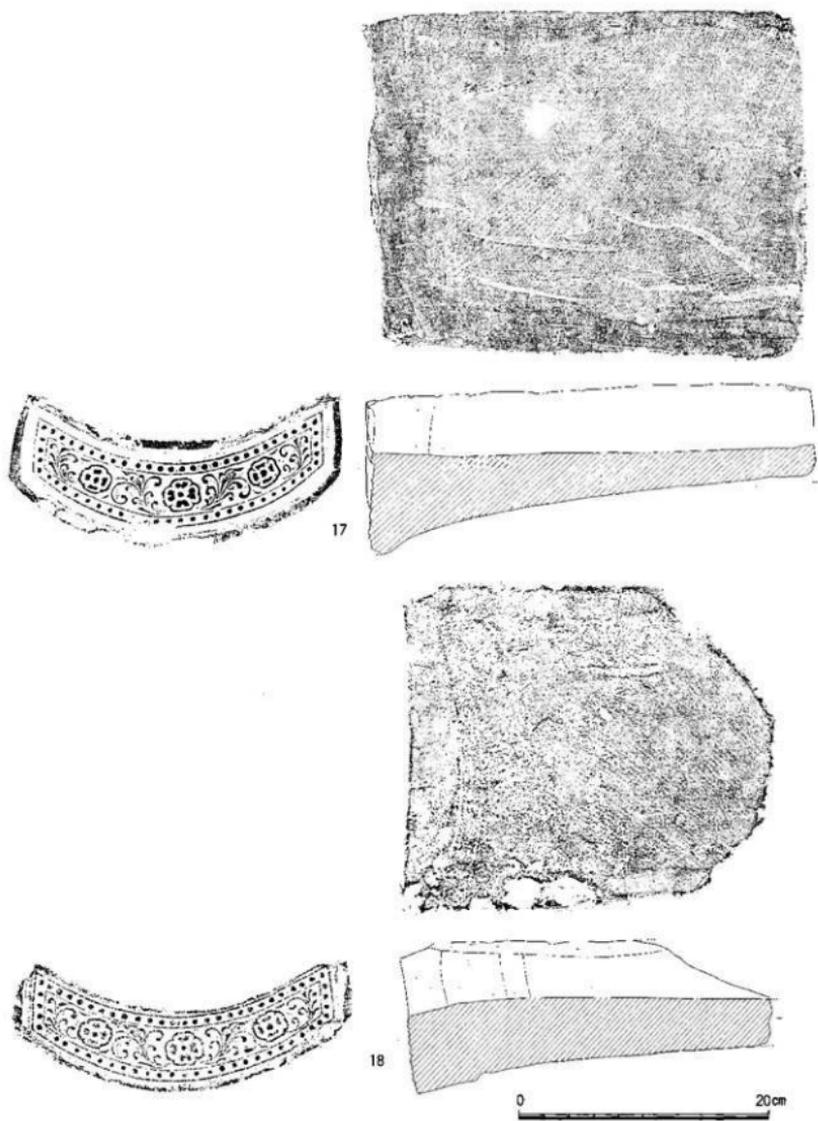


16

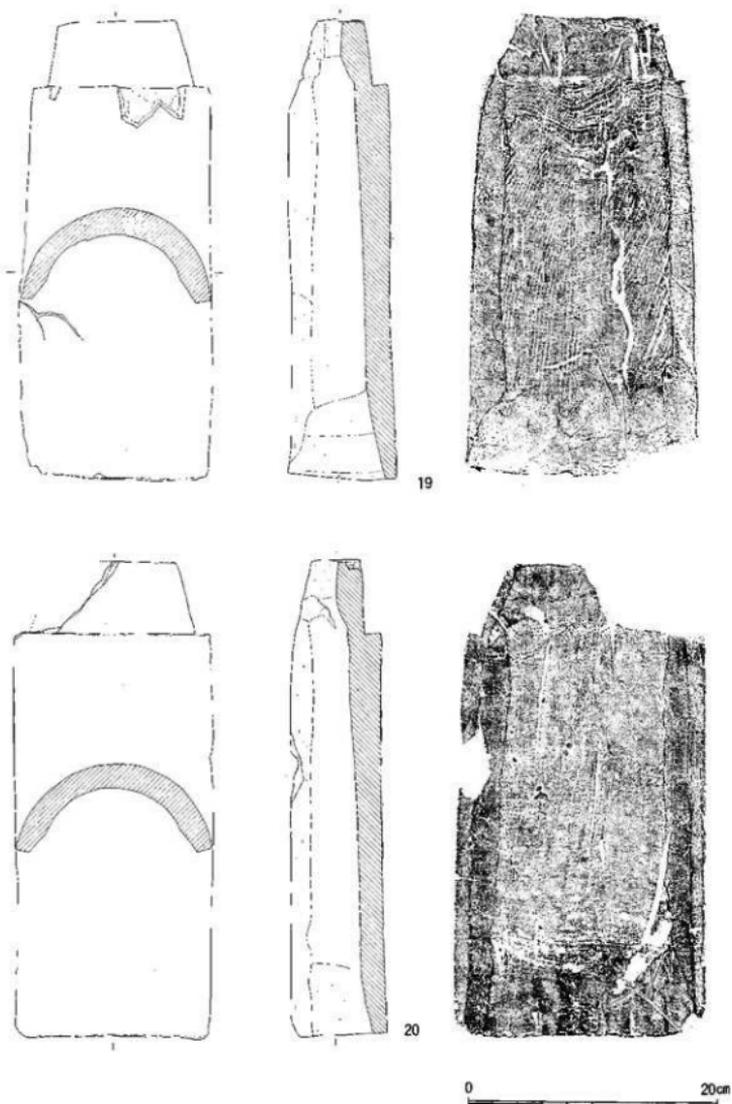


0 20cm

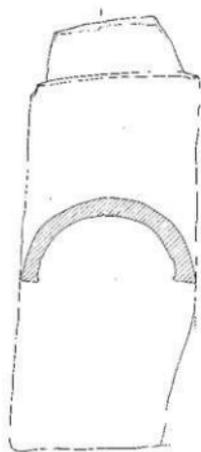
第26图 軒平瓦実測図



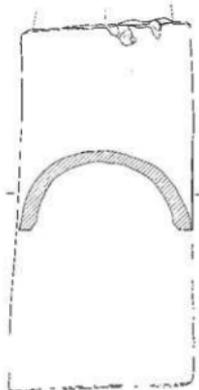
第27图 軒平瓦実測図



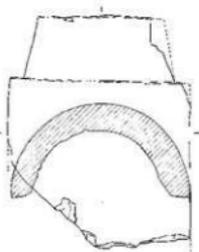
第26图 丸瓦実測図



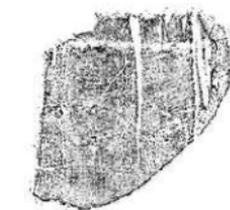
21



22

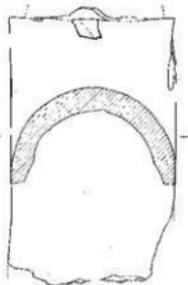


23

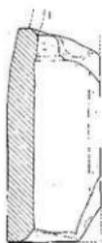
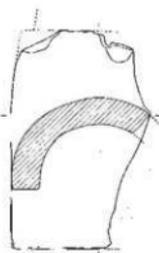


0 20cm

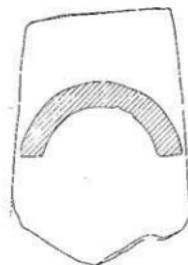
第29図 丸瓦実測図



24



25

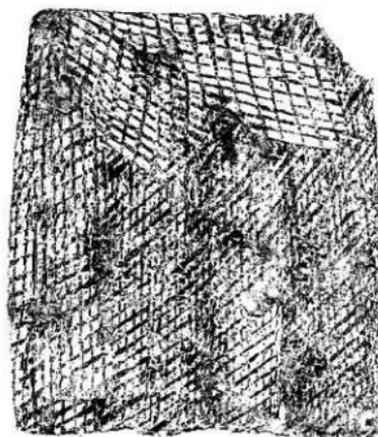


26



0 20cm

第30图 丸瓦実測図



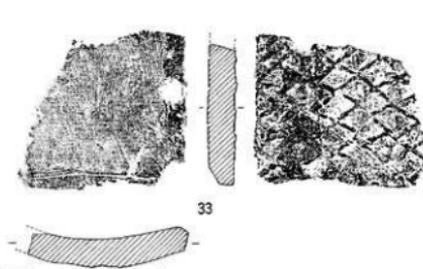
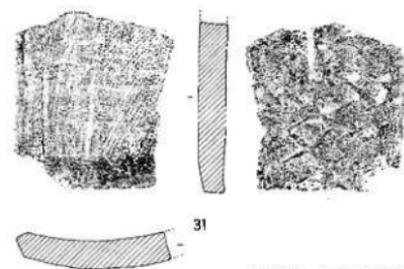
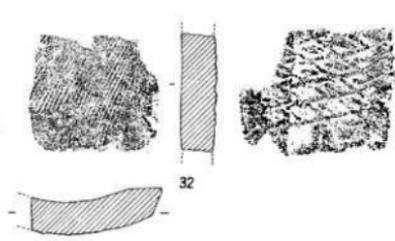
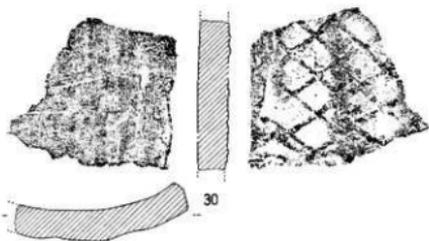
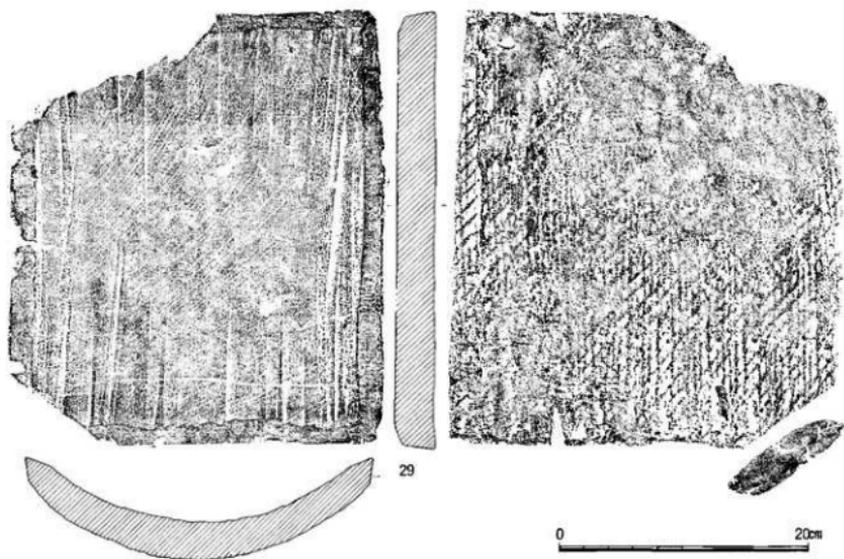
27



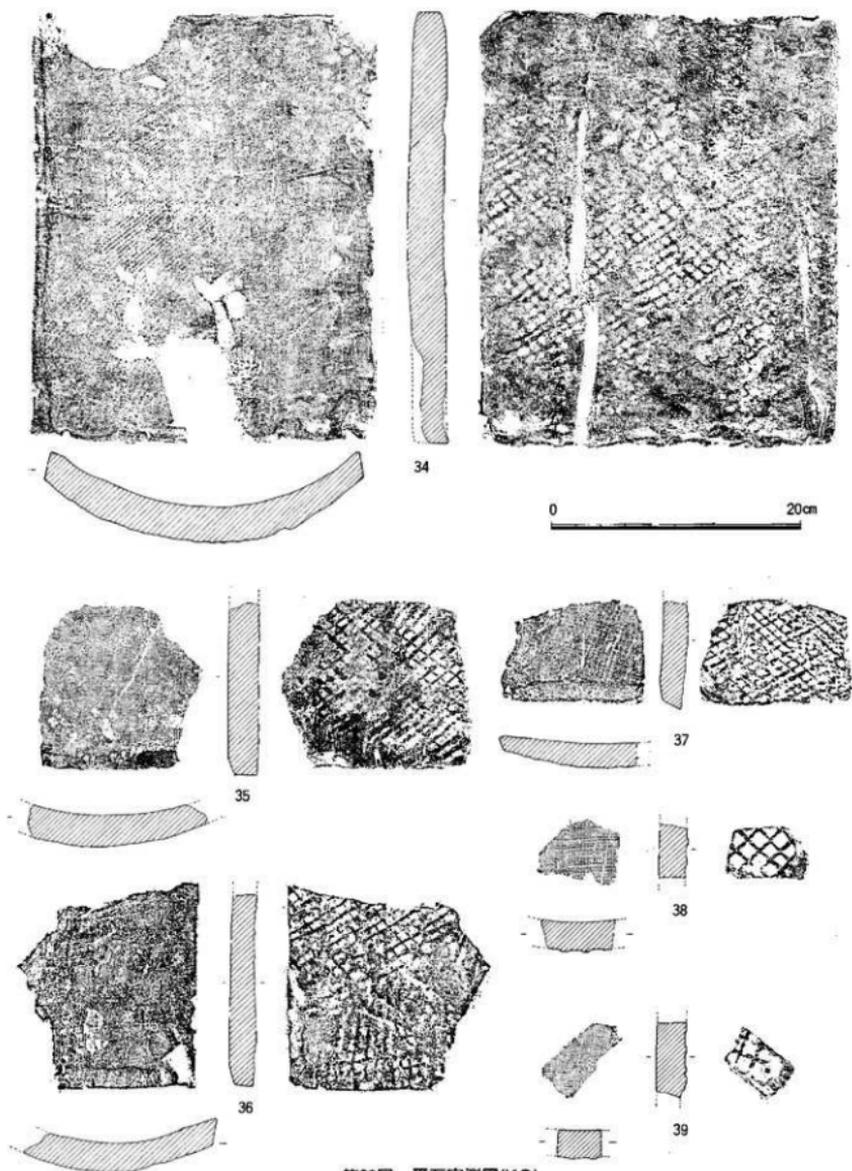
28



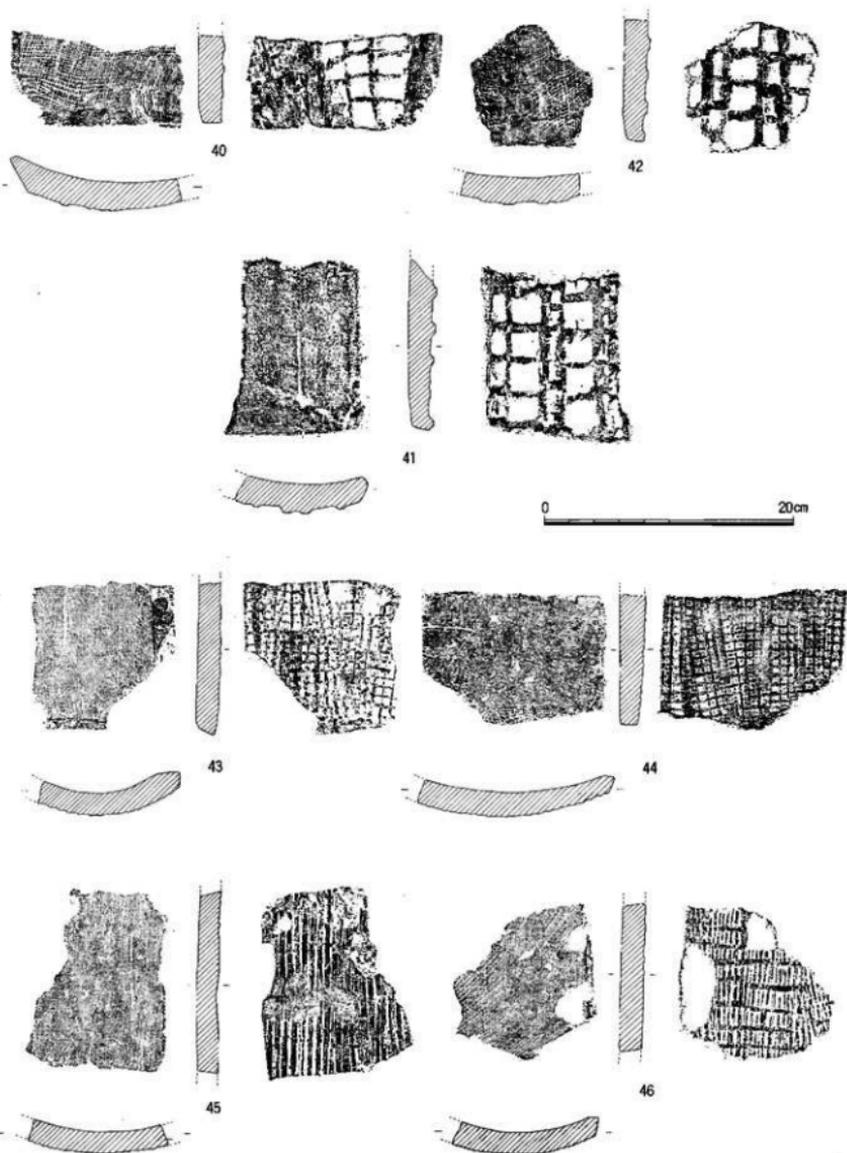
第31图 平瓦实测图 (KA)



第32图 平瓦寅洲园 (KA: 29, KB: 30~33)



第33图 平瓦実洲图(KC)



第34图 平瓦美洲图(KD:40~42, KE:43, 44, KF:45, 46)



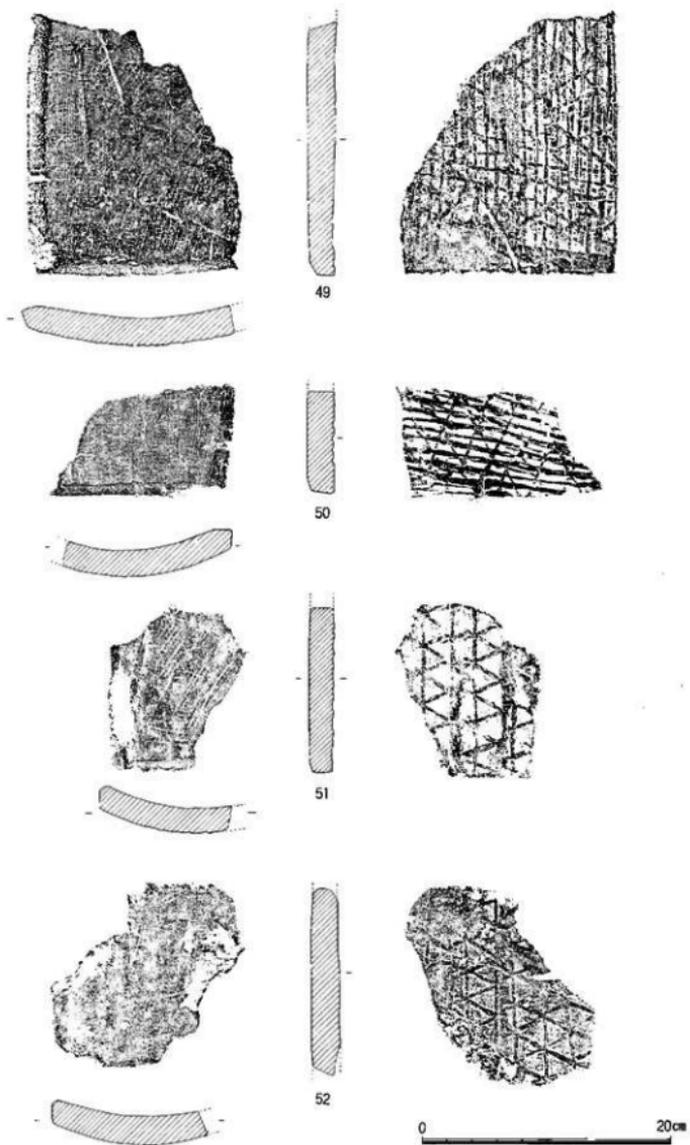
47



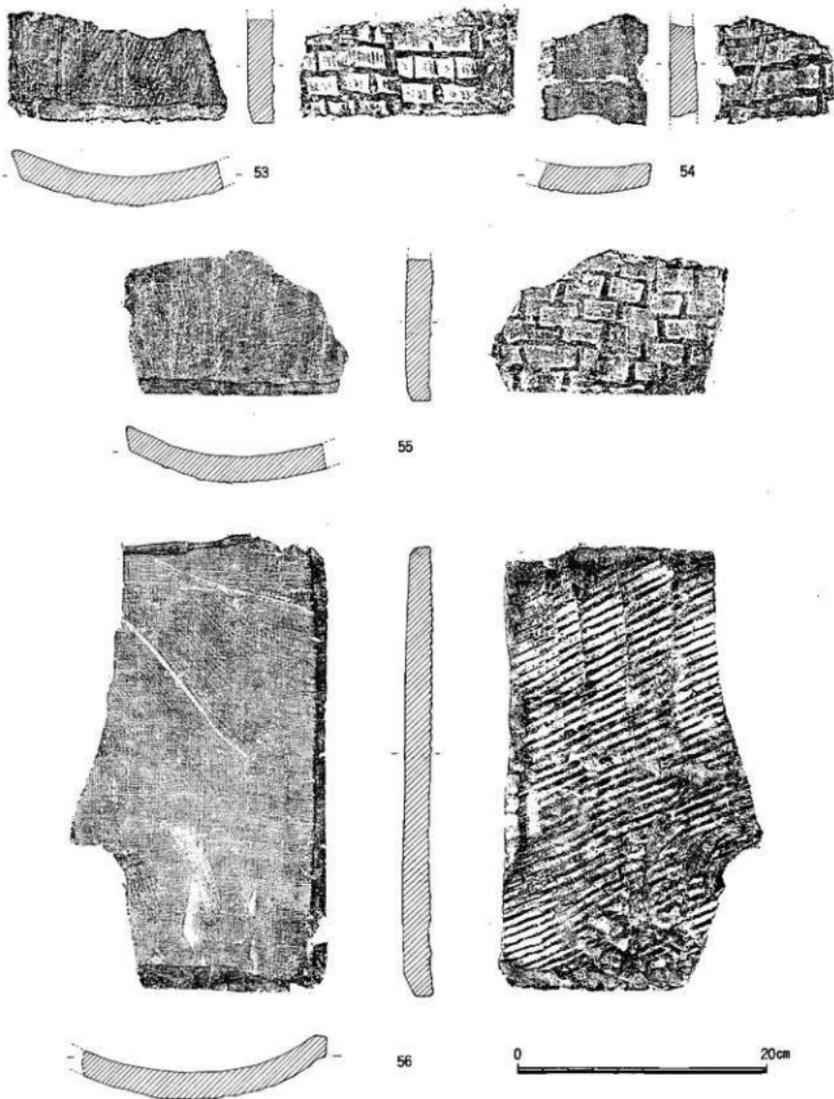
48

0 20cm

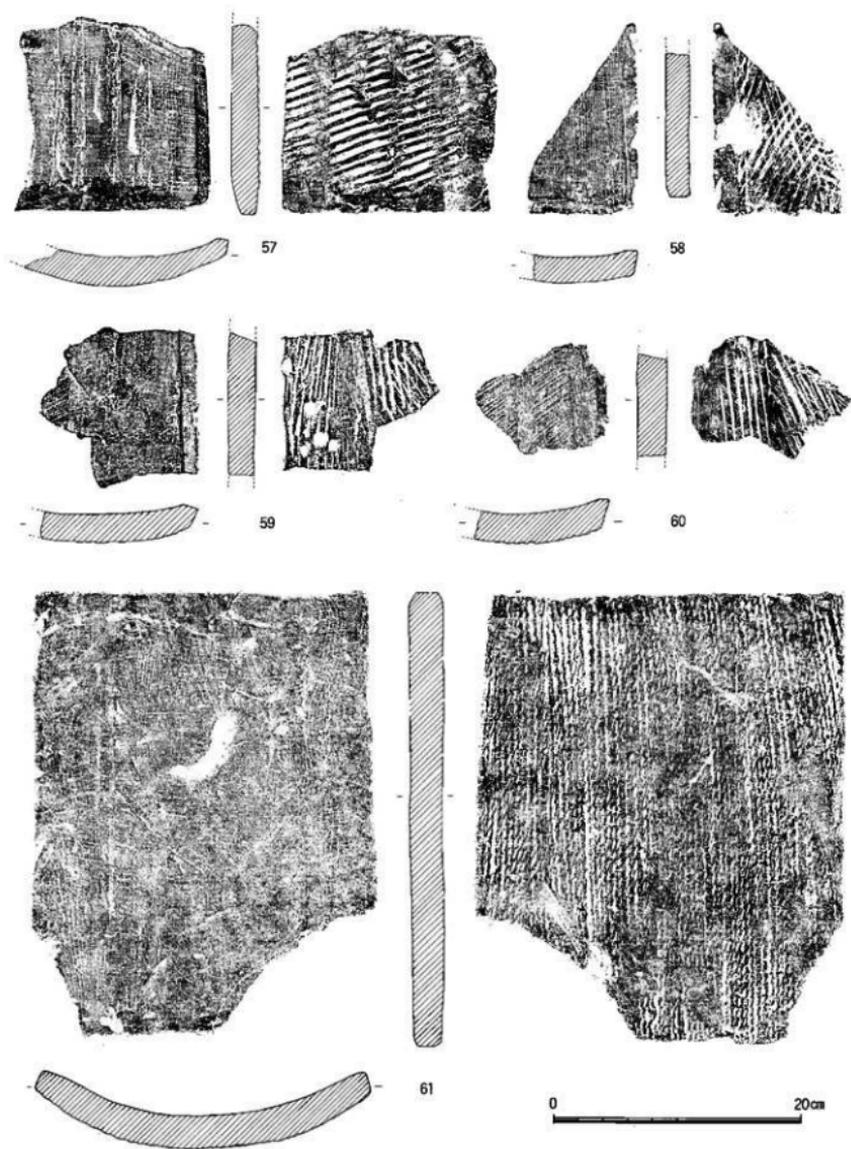
第35图 平瓦实测图(KG)



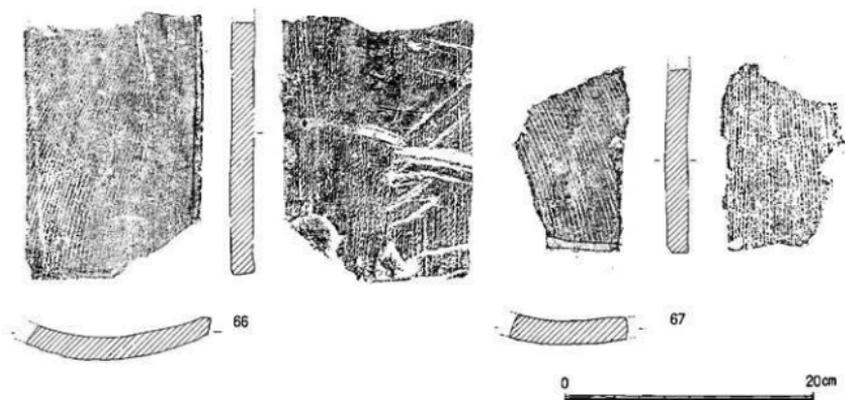
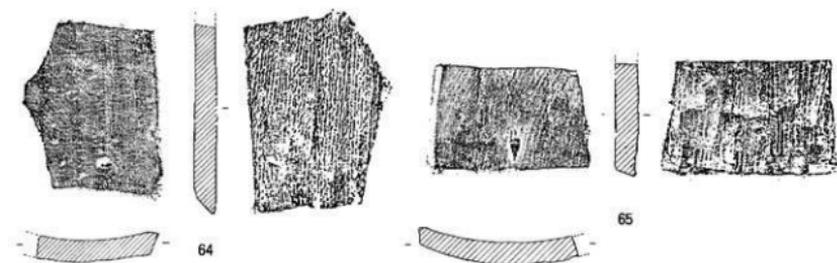
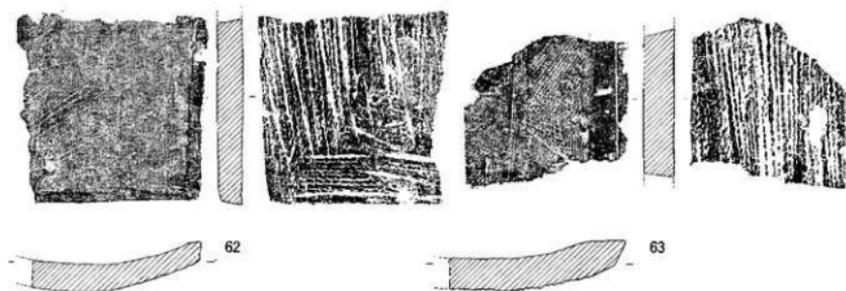
第36图 平瓦实测图(KG:49、50、KH:51、52)



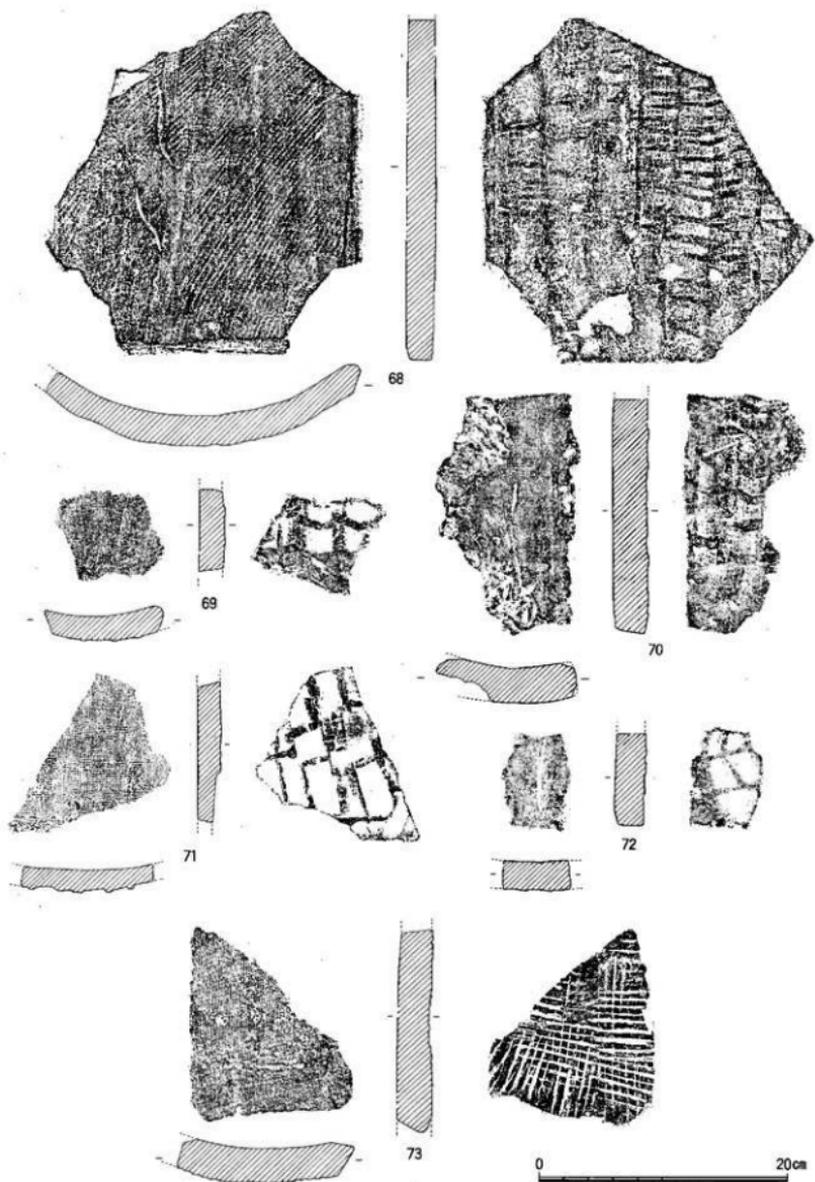
第37圖 平瓦実測図 (K1:53~55、H:56)



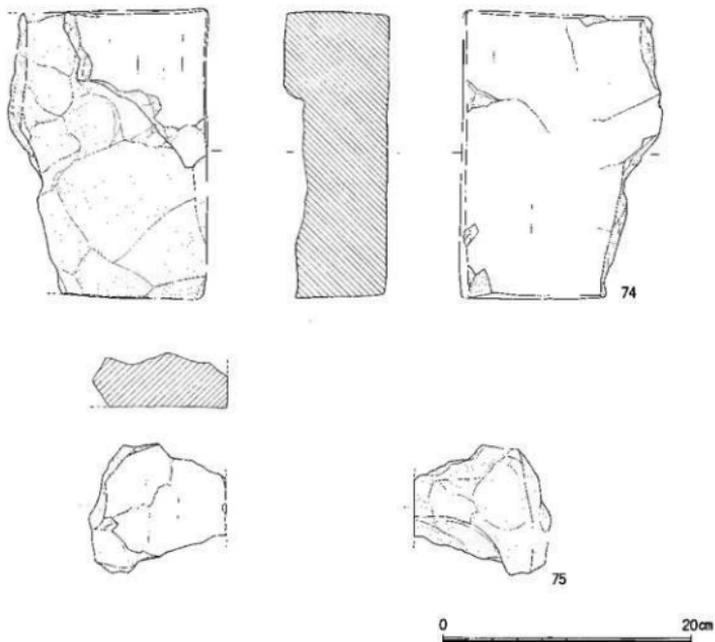
第38图 平瓦夷测图(H:57~60、NA:61)



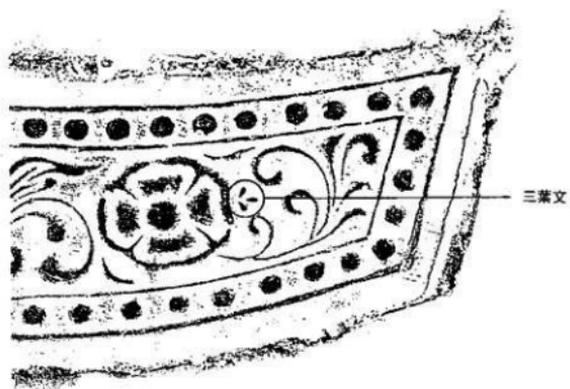
第39圖 平瓦実測図 (NA:62、63、NB:64~67)



第40図 平瓦実測図(その他)



第41図 セン実測図



第42図 軒平瓦1類三葉文(実寸大)

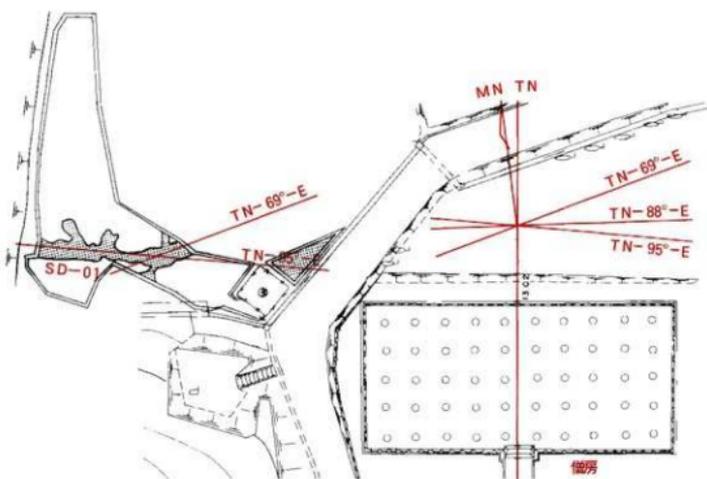
## 5. ま と め

### ★遺構の性格から考えられること

今回の調査で検出された瓦溜りについては、僧房の北西隅に近接した位置となっており、僧房に関連する遺構であるとも考えられるが、断定はできない。瓦溜りの出土遺物について、他地点と比較すると、①瓦類の出土量に比して土器の出土量が圧倒的に少ない。②出土した瓦類は磨滅したものが少なく、完形品をはじめほとんどが大形の破片であることなどから考えると、建物が倒壊した際に瓦を投棄した場所というよりも、使用前の瓦を備蓄していた場所としての可能性が考えられる。また、軒丸瓦がⅠ類のものであること、8c代の須恵器も出土していることから、創建時から存在していたことが推定される。

次にSD-01と国分寺との関連については、その方向性に注目すると（第43図）、国分寺の南門、中門、金堂、講堂、僧房を結ぶ中軸線はほぼ真北に合わせていることが知られているが、この中軸線をTNとすると、SD-01の流路は上流から見てTN-95°-Eの方位を示す。この延長線は瓦溜り（<sup>〔註1〕</sup>）を通過して僧房の北辺にあたる。僧房北辺の方位はTN-88°-Eであるから、7°の差があるものの、ほぼ方位を同じくするものである。しかし、SD-01は途中で流路を約26°北方へ変えてTN-69°-Eの方位を示す。これはあたかも瓦溜りを回避するかのようでもある。この流路の変更が瓦溜りを意識しているものならば、SD-01は国分寺が存続している同時期に存在していたことを裏付けるものである。

次にSD-01の用途としては、その形態が整備されたものとは考えにくいこと、また途中で流路を



第43図 SD-01 国分寺僧房跡方位相関図(S=1/500)

変えることなどから考えると、僧房に直接関連する遺構である可能性は低い、またSD-01の西方は、現在上手が築かれ、山根堤として農業用水を供給するため池となっている。この堤の成立年代は定かではなく、恐らく後世に築かれたものであろうが、古来より雨水を集めて豊富な湧水を供給した水源であったことは十分想像できることで、本来自然流路であった河川を国分寺内に取り込んで生活用水として利用していたことが考えられる。また、SD-01からのおびただしい量の上器類、瓦類は建物の存在を窺わせるものの、すべて破片で磨滅したものが多く、今回の調査区域内において柱穴の検出がないことからすると、生活の場というよりはSD-01が機能を失った時点で不要になった物を投棄した跡であることが考えられる。

#### ★出土遺物から考えられること

今回の調査で検出された上器類は、多量の須恵器、土師器、土師質土器と、若干の陶磁器類、木製品、祭祀遺物がある。このうち年代の明らかな須恵器を観察すると、7c代の須恵器も散見されるものの、8c中葉～9c代末葉にかけての時期のものが多く、国分寺が創建された時期以降に当る。土師器については、歴史時代以降の編年が確立されていない現状では明言できないが、甕類が単純口縁を持ち、肩部が張らずにやや長胴気味に垂下して丸底となるタイプは奈良時代以降に見られるものであり、須恵器の時期とはほぼ同じくすることができる。

土師質土器については、近年の調査成果により、石台遺跡<sup>(註2)</sup>、中竹矢遺跡<sup>(註3)</sup>、大塚敷遺跡<sup>(註4)</sup>、天満谷遺跡<sup>(註4)</sup>などから良好な資料が多数検出されており、相伴した白磁碗の時期から12c代の年代が与えられている。今回の調査で出土した土師質土器については、全形の判明するものが少なく、年代を決め難いが、同類のものは前掲した遺跡にも見られる。石台遺跡のものと照らし合わせてみると、本遺跡出土の高台付きの皿形土器(第19図No142)は、石台遺跡の第25図No12と同類のものと思われ、本遺跡出土の坏類のうち、底部形態によって分類したB-1類は、石台遺跡での高台による分類のc、d類、C類としたものは石台a類に相当することが考えられる。また、本遺跡では白磁碗も1点出土しており、高台部は低く、やや幅広で割り出しの浅いものである。口縁部は欠損しているが、口縁部を下縁状に肥厚させたタイプのものに見られ、太宰府の分類によるⅣ類<sup>(註5)</sup>に相当するもので、12c代の年代観が与えられる。石台遺跡でも同類の白磁碗が出土していることを考え合わせると、本遺跡出土の上師質土器にも同じ年代が考えられる。

また、今回の調査では土馬、鏡の上製模造品が出土している。これらは祭祀に深く関わる遺物として知られているが、今回の調査区で祭祀が行われていたかどうかは判断できないにしても、少なくとも国分寺でこれらを用いた祭祀があったことを窺わせる資料である。また須恵器の窯体が1点検出されている。国分寺東方の丘陵裾には史跡出雲国分寺瓦窯跡、また近年の調査で中竹矢遺跡から発見された瓦窯跡があり、国分寺、国分尼寺に瓦を供給していたことが知られているが、今回の調査区付近にも一連の窯跡が存在することを窺わせるものである。

瓦類については、瓦溜り中出土のものに良好な資料が見られ、国分寺創建期の一括遺物として取り扱えるものと考えられる。このうち軒丸瓦、軒平瓦のセット関係を瓦当周縁の突帯の有無に注目して

考えると、国分寺1類の中では軒丸瓦A-1、2類が軒平瓦a類に対応し、軒丸瓦B類が軒平瓦b類に対応することが考えられ、軒平瓦の類の形態と、文様のシャープさから推定すれば、A+a類が若干古相を示すものと考えられる。また、瓦溜り中からは丸瓦も完形品を含めて多数出土しているが、玉縁式がほとんどで、行基式のものが少ない。この傾向は他地点でも同様であり、国分寺では玉縁式のもの一般的に用いられていた可能性が考えられ、国分寺1類の軒丸、軒平瓦と組み合わせて使われていたことが推定される。また補修瓦とした軒平瓦は応急修理用の軒平瓦と考えられるものであり、形式的なものではなく、時期については断定できない。

瓦溜りから出土しなかった軒丸瓦として国分寺3類のものがあり、灰色粘質土中から1点検出されているが、対応する軒平瓦は今回の調査では出土していない。

平瓦については様々なタイプのタタキ目が見られ、第4章で分類したとおりであるが、年代を知る手掛かりは少ない。このうちNBのタタキ目については、軒平瓦1類の内のa類とした第25図No14の平瓦部凸面部に見られ、創建期から存在した古いタイプであることが考えられる。その他のタイプについて国分寺周辺の遺跡から出土した資料と比較すると、中竹矢遺跡においては、国分寺でKAとしたものは中竹矢の分類の小型のKFに相当し、以下(国分寺→中竹矢)で表わすと、KB<sub>1</sub>→KC、KB<sub>2</sub>→KF、KC→KH、KD→KI、KE→KG、H、→第72図No305(タイプ分け無し)、H2→第72図No306(同)、NA→NA、NB→NBまたはNC、また、その他に分類した長方形格子第40図No68はKAに相当する。中竹矢遺跡出土の瓦は、相伴した須恵器の年代から9c後半とされており、国分寺KA~KE、H、NA、NBはこの頃まで存続していたことが考えられる。また、中竹矢遺跡で見られないタイプのものには、KF、KG、KH、KIがあるが、四王寺出土の資料と比較すると、四王寺ではKGをはじめNA、NB、KA、KF、その他に分類した第40図No69タイプなどが出土している。これらのタイプが四王寺軒丸瓦Ⅱ類、軒平瓦Ⅱ類の時期を下らないものであるならば、8c中~後期には存在する古いタイプであることが考えられる。また国分寺出土のKAタイプの中には模竹痕らしい痕跡を残すもの(No29)や、複数方向のタタキが見られるものNo27(KA)、No62(NA)など、桶巻き作りを想定させるものがあり、これらのタイプは古相を示すことを裏付けている。

#### ★むすびにかえて

今回の調査成果を概観して問題となることは、まず国分寺の寺域についてである。これまでの研究成果により方500尺とされているものの、西側については丘陵が迫り、自然地形を取り込む形となるため、実際に寺域として機能した西限については不明であった。今回の調査で寺域を画する明確な遺構は検出されなかったため、過去の研究成果を前進させることにはならなかったが、瓦溜りが瓦の備蓄場所であるとすれば、寺域の西限が現在の史跡指定境界よりはさらに西方へ広がることを裏付けるものと考えられる。

次に問題となるのは国分寺の存続期間についてである。出土遺物から辿れるのは、須恵器の年代からより8c中頃~9c後半代まで、上師質土器の年代から12c代を中心とした時期であるが、10~11c代が空白の期間となることである。上師質土器の中にこの時期に遡る遺物が存在するかどうかについ

て今後さらに検討を必要とするものと思われるが、12c代の遺物が存在することにより、平安末期までは国分寺が確実に存続するものと考えられ、これまでの研究成果を裏付けけるものとして意義深いものである。

- 証1) 山本 清「出雲」『新修国分寺の研究、第4巻—山陰道と山陽道—』吉川弘文館、1991年  
本書の中で「僧房の中心は、南門、金堂、講堂を結ぶ同じ中軸線上にありながら、建物の方向は約2°磁針の方向に偏している…」という記述がある。(116～117頁)
- (2) 島根県教育委員会『石台遺跡—馬橋川改修に伴う発掘調査報告—』1986年
- (3) 島根県教育委員会『一般国道松江道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書—X』1992年
- (4) 島根県教育委員会「大屋敷遺跡」『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』1987年
- (5) 島根県教育委員会「天満谷遺跡」証(4)と同書
- (6) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入陶磁器について—形式分類と編年を中心にして—」『九州歴史資料館研究論集』4集、九州歴史資料館、1978年

出雲国分寺跡発掘調査遺物観察表

(土器類)

No	出土地点	陶器器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	灰色粘質土	須恵器 蓋	つまみ径 3.8	平底な天井部に輪状つまみを付ける	つまみ内面は回転ナデを施す	焼成: 良好、色調: (外周)暗赤褐色(内周)淡灰褐色
2	灰色粘質土	須恵器 蓋	つまみ径 5.8	平底な天井部に輪状つまみを付ける	つまみ内面は回転ナデを施す	焼成: 良好 色調: 淡青灰色
3	灰色粘質土	須恵器 蓋	つまみ径 5.0	天井部外周に輪状つまみを付ける	天井部外周に輪へラケズリを施す。つまみ内面回転ナデ	焼成: 良好 色調: 暗青灰色
4	灰色粘質土	須恵器 蓋	口径 9.4	低い天井部を持ち、口縁部にはかえりを付ける	天井部外周に輪へラケズリ、その他回転ナデ	焼成: 良好 色調: 暗青灰色
5	灰色粘質土	須恵器 蓋	口径 13.6	口縁部にかえりを付ける	内外面回転ナデ	焼成: 良好 色調: 淡青灰色
6	灰色粘質土	須恵器 蓋	口径 15.6	口縁部にかえりを付ける	内外面回転ナデ	焼成: 良好 色調: 淡青灰色
7	灰色粘質土	須恵器 杯	口径 15.1	内寄して伸びて口縁部に至る縁部は丸い	内外面回転ナデ	焼成: 良好 色調: 暗灰色
8	灰色粘質土	須恵器 杯	口径 12.8	口縁部は直曲して小さく外反する	内外面回転ナデ	焼成: 良好 色調: 淡青灰色
9	灰色粘質土	須恵器 杯	口径 11.2	口縁部は直曲して小さく外反する	内外面回転ナデ	焼成: 良好 色調: 淡青灰色
10	灰色粘質土	須恵器 杯	口径高さ 12.6 4.0	口縁部は直曲して小さく外反する	底部外面不明、その他回転ナデ	焼成: 良好 色調: 淡灰色
11	灰色粘質土	須恵器 杯	口径高さ 12.0 2.4	内寄して伸びて口縁部に至る。縁部は肥厚して丸い	底部外面糸切り痕ナデ、その他回転ナデ	焼成: 良好 色調: 暗灰色
12	灰色粘質土	須恵器 杯	底径 9.6	口縁部は平底の底部からゆるやかに立ち上がる	底部外周に糸切り未調整、内面ナデ、その他回転ナデ	焼成: 良好 色調: 青灰色
13	灰色粘質土	須恵器 杯	口径 14.6	口縁部は外反して開く、端部は丸い	内外面回転ナデ	焼成: 良好 色調: 暗青灰色
14	灰色粘質土	須恵器 杯	口径 15.0	口縁部は外反して開く、端部は丸い	内外面回転ナデ	焼成: 良好 色調: 淡青灰色
15	灰色粘質土	須恵器 皿	口径 13.0	口縁部は直線的に短く伸びる端部は丸い	内外面回転ナデ	焼成: 良好 色調: 淡青灰色
16	灰色粘質土	須恵器 杯	底径 10.0	口縁部は平底の底部からゆるやかに立ち上がる	底部外面停止糸切り未調整、その他回転ナデ	焼成: 良好 色調: 淡青灰色
17	灰色粘質土	須恵器 杯	底径 8.6	口縁部は平底の底部からゆるやかに立ち上がる	底部外周に糸切り未調整、内面ナデ、その他回転ナデ	焼成: 良好 色調: 淡青灰色
18	灰色粘質土	須恵器 杯	底径 9.2	口縁部は平底の底部からゆるやかに立ち上がる	底部外周に糸切り未調整、内面ナデ、その他回転ナデ	焼成: 良好 色調: 淡青灰色
19	灰色粘質土	須恵器 高台杯	底径 7.4	底面外周の内側に高台を付ける	高台内側に若干糸切り痕が残る、その他回転ナデ	焼成: 良好 色調: 淡青灰色
20	灰色粘質土	須恵器 高台杯	底径 底径 7.8	底面外周の内側に高台を付ける	高台内側に糸切り痕を残す、底部内面ナデその他回転ナデ	焼成: 良好 色調: 淡青灰色
21	灰色粘質土	須恵器 高台杯	底径 7.9	底部外周の内側に高台を付ける	高台内側に糸切り痕ナデ、杯部内面ナデ、その他回転ナデ	焼成: 良好 色調: 暗青灰色
22	灰色粘質土	須恵器 高台杯	底径 9.0	底部外周の内側に高台を付ける	高台内側はナデ、杯底部内面ナデ、その他回転ナデ	焼成: 良好 色調: 青灰色
23	灰色粘質土	須恵器 高台杯	底径 9.2	底部外周の内側に高台を付ける	高台内側はナデ、その他回転ナデ	焼成: 良好 色調: 灰色
24	灰色粘質土	須恵器 高台杯	底径 9.8	底面外周の内側に高台を付ける	高台内側はナデ、杯底部内面は磨滅、その他回転ナデ	焼成: 良好 色調: 淡青灰色
25	灰色粘質土	須恵器 高台杯	底径 8.0	底部外周の内側に高台を付ける	高台内側は不明、杯底部内面ナデ、その他回転ナデ	焼成: 良好 色調: 淡青灰色
26	灰色粘質土	須恵器 高台杯	底径 9.0	底部外周の内側に高台を付ける	高台内側はナデ、杯底部内面ナデ、その他回転ナデ	焼成: 良好、色調: 青灰色 底部外面にへう配りあり
27	灰色粘質土	須恵器 高台杯	口径高さ 16.6 8.0 器高 5.6	底部外用付近に高台を付ける。口縁部は角度を持って立ち上がり、直線的に伸びる	高台内側に回転糸切り痕が残る。杯底部内面ナデ、その他回転ナデ	焼成: 中や不良、軟質 色調: 灰白色
28	灰色粘質土	須恵器 高台杯	口径高さ 14.0 8.2 器高 5.8	底部外用付近に高台を付ける。口縁部は角度を持って立ち上がり、直線的に伸びる	高台内側に回転糸切り未調整、杯底部内面ナデ、その他回転ナデ	焼成: 良好 色調: (外周)淡青灰色 (内面)淡青灰色

No	出土地点	種別	種類	法量	形態の特徴	手法の特徴	書考	
29	灰色粘質土	須磨郡	高台坪	底径	9.8	底部外周付近に高台を付ける	高台内側に糸切り痕が残る、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡青灰色
30	灰色粘質土	須磨郡	高台坪	底径	10.0	底部外周付近に高台を付ける	高台内側に糸切り痕が残る、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡青灰色
31	灰色粘質土	須磨郡	高台坪	底径	9.0	底部外周付近に高台を付ける	高台内側回転糸切り未調整、底部内側ナデその他回転ナデ	焼成：良好 色調：青灰色
32	灰色粘質土	須磨郡	高台坪	底径	8.0	底部外周付近に高台を付ける	高台内側に糸切り痕が残る、その他層数により不明	焼成：やや不良、軟質 色調：灰白色
33	灰色粘質土	須磨郡	高台坪	底径	8.0	底部外周付近に高台を付ける	高台内側回転糸切り未調整、その他層数により不明	焼成：やや不良、軟質 色調：灰白色
34	灰色粘質土	須磨郡	高台坪	底径	11.7	底部外周付近に高台を付ける	高台内側回転糸切り未調整、底部内側ナデその他回転ナデ	焼成：良好 色調：暗青灰色
35	灰色粘質土	須磨郡	壘	口径	10.0	口縁部は外反して開く	口縁部内外面回転ナデ	焼成：良好 色調：淡青灰色
36	灰色粘質土	須磨郡	壘	底径	6.2	口縁部は端部付近で器出して開く	口縁部内外面回転ナデ	焼成：良好 色調：淡青灰色
37	灰色粘質土	須磨郡	皿型壘	底径	4.3	口縁部はあまり開かず長く伸びる	口縁部内外面回転ナデ	焼成：良好 色調：淡青灰色
38	灰色粘質土	須磨郡	壘	口径	21.1	口縁部は外反して開く	口縁部内外面回転ナデ	焼成：良好 色調：淡青灰色
39	灰色粘質土	須磨郡	壘	口径	19.6	口縁部は外反して開き、端部はやや肥厚する	口縁部内外面回転ナデ、胴部内面平行タキ内側あて具	焼成：良好 色調：淡青灰色
40	灰色粘質土	須磨郡	壘	口径	1.0	口縁部は外反気味に伸び、2本の沈線と間に波状文を施す	口縁部内面回転ナデ	焼成：良好 色調：淡青灰色
41	灰色粘質土	須磨郡	壘	口径	1.0	口縁部は外反し、2本の沈線と波状文を施す	口縁部内面回転ナデ	焼成：良好 色調：淡青灰色
42	灰色粘質土	須磨郡	壘	口径	0.9		外面平行タキ、内面同心状あて具	焼成：良好 色調：淡青灰色
43	灰色粘質土	須磨郡	壘	口径	0.8		外面平行タキ、内面同心状あて具	焼成：良好 色調：淡青灰色
44	灰色粘質土	須磨郡	壘	口径	0.8		外面平行タキ後方タキ、内面同心状あて具	焼成：良好 色調：淡青灰色
45	灰色粘質土	須磨郡	壘	口径	7.8	底部外周付近に高台を付け、胴部は内方気味に伸びる	高台内側糸切り未調整、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡青灰色
46	灰色粘質土	須磨郡	壘	口径	8.6	底部は厚く、「ハ」字状に開く高台が付く	高台内側ナデ、底部外面回転ナデ	焼成：良好 色調：淡青灰色
47	灰色粘質土	須磨郡	壘	口径	12.8	底部外周付近に高台を付ける	高台内側不明、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡青灰色
48	灰色粘質土	須磨郡	壘	口径	13.2	厚手の平底部から段階的に立ち上がる	底部外面、胴部外面ヘラ等による調整	焼成：やや良好 色調：淡青灰色
49	灰色粘質土	須磨郡	高坪			やや閉き気味の胴部に内湾する厚部を付ける	坪底部外周ヘラケズリ後ナデ 底部内面ナデその他回転ナデ	焼成：良好、色調：青灰色 坪底部内面にヘラ記号あり
50	灰色粘質土	須磨郡	高坪	高さ	3.4	裾部が大きく開く胴部に内湾する厚部を付ける	裾部及び厚部に回転ナデ	焼成：良好 色調：淡青灰色
51	灰色粘質土	須磨郡	高坪	高さ	10.9	裾部は開き端部で器曲する、透かしの痕跡あり	内外面回転ナデ	焼成：良好 色調：淡青灰色
52	灰色粘質土	須磨郡	高坪	高さ	9.5	胴部は開き端部で器曲する	内外面回転ナデ	焼成：良好 色調：淡青灰色
53	灰色粘質土	須磨郡	高坪	高さ	9.8	胴部は開き端部で器曲する	内外面回転ナデ	焼成：良好 色調：淡青灰色
54	灰色粘質土	須磨郡	はそう	口径	8.2	胴部上半に最大径を持つ	胴部外面に2本の沈線とクシ状T.具による新文文を施す	焼成：良好 色調：淡青灰色
55	灰色粘質土	須磨郡	平皿把手					焼成：良好 色調：淡青灰色
56	灰色粘質土	須磨郡	把手					焼成：良好 色調：淡青灰色
57	灰色粘質土	上郡	壘	口径	15.1	口縁部は外反して開く、胴部は変らない	内面胴部以下ケズリ、その他内外面付着	焼成：良好、色調：黒灰色 内外面付着
58	灰色粘質土	七師郡	壘	口径	19.7	口縁部は外反して開く、胴部は変らない	内面胴部以下ケズリ、その他内外面付着	焼成：良好、色調：暗褐色 外面に付着

№	出土地点	種別	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
59	灰色粘質土	十部器	甕	口徑 22.1	口縁部は外反して開く、唇部は歪らない	内面底部以下ケズリ、その他ナデ	焼成：良好、色調：暗褐色外面に黒付着
60	灰色粘質土	上脚器	甕	口徑 23.3	口縁部は外傾して開く、唇部は歪らない	内面唇部以下ケズリ、その他ナデ	焼成：良、色調：淡褐色外面に黒付着
61	灰色粘質土	土師器	甕	口徑 25.7	口縁部は外反して開く、唇部は歪らない	内面底部以下ケズリ、その他ナデ	焼成：良好、色調：淡黄灰色
62	灰色粘質土	十部器	甕	口徑 26.1	口縁部は外反して開く、唇部は歪らない	内面底部以下ケズリ、その他ナデ	焼成：良好、色調：淡黄灰色
63	灰色粘質土	十部器十部	坏	口徑 9.8 底径 6.7 器高 2.5	口縁部は平底の底部から角度を持って立ち上がる	底部外面回転糸切り未調整、底部内面ナデ、その他回転ナデ	焼成：良、色調：淡黄灰色、灰藍色内面に一部赤色顔料が残る
64	灰色粘質土	十部器十部	坏	底径 6.2	口縁部は平底の底部から角度を持って立ち上がる	底部外面回転糸切り、底部内面ナデ、その他回転ナデ	焼成：良好、色調：淡褐色
65	灰色粘質土	七部器十部	坏	底径 5.3	口縁部は平底の底部からゆるやかに立ち上がる	底部外面磨滅、その他回転ナデ	焼成：良好、色調：淡黄灰色
66	灰色粘質土	上脚器十部	坏	底径 7.1	口縁部は平底の底部からゆるやかに立ち上がる	底部外面回転糸切り未調整、その他回転ナデ	焼成：良、色調：淡黄灰色外面に黒付着
67	灰色粘質土	土師器十部	坏	底径 7.5	口縁部は平底の底部から角度を持って立ち上がる	底部外面回転糸切り未調整、その他磨滅により不明	焼成：良好、色調：淡黄灰色
68	灰色粘質土	土師器十部	坏	底径 7.2	口縁部は平底の底部からゆるやかに立ち上がる	磨滅により不明	焼成：良好、色調：淡黄灰色
69	灰色粘質土	十部器十部	坏	口徑 18.6	口縁部は端部付近で外反する	内外面回転ナデ	焼成：良好、色調：淡黄灰色
70	灰色粘質土	上脚器十部	坏	底径 8.9	口縁部は平底の底部からゆるやかに立ち上がる	底部外面回転糸切り未調整、その他回転ナデ	焼成：良好、色調：淡黄灰色
71	灰色粘質土	土師器十部	高台坏	底径 9.7	高台は「ハ」字状に開き、底部はゆるやかに立ち上がる	高台内側内面糸切り未調整、その他回転ナデ	焼成：良好、色調：淡黄灰色
72	灰色粘質土	土師器十部	高台坏	底径 7.8	高台は「ハ」字状に開き、底部はゆるやかに立ち上がる	高台内側磨滅により不明、その他回転ナデ	焼成：良好、色調：淡黄灰色
73	灰色粘質土	十部器十部	高台坏	底径 6.9	高台は「ハ」字状に開き、底部はゆるやかに立ち上がる	高台内側磨滅により不明、その他回転ナデ	焼成：良好、色調：淡黄灰色
74	灰色粘質土	上脚器十部	高台坏	底径 7.2	高台は「ハ」字状に開き、底部は平底、底部は角度を持って立ち上がる	高台内側、底部内面磨滅により不明、その他回転ナデ	焼成：良好、色調：淡黄灰色
75	灰色粘質土	七部器十部	高台坏	底径 8.3	高台は「ハ」字状に開き、底部は平底、底部は角度を持って立ち上がる	高台内側磨滅により不明、その他回転ナデ	焼成：良好、色調：淡黄褐色
76	灰色粘質土	土師器十部	高台坏	底径 7.0	高台は長く、断面三角形状を呈する	高台内側磨滅、底部内面ナデ、その他回転ナデ	焼成：良好、色調：淡黄灰色
77	灰色粘質土	土師器十部	高台坏	底径 6.0	高台は長く、断面三角形状を呈する	高台内側磨滅、底部内面磨滅、その他回転ナデ	焼成：良好、色調：淡黄白色
78	灰色粘質土	七部器十部	高台坏	底径 6.0	高台は長く、断面三角形状を呈する	高台内側ナデ？その他回転ナデ	焼成：良好、色調：淡黄灰色
79	灰色粘質土	上脚器十部	高台坏	底径 5.4	高台は「ハ」字状に開く	高台内側磨滅、その他回転ナデ	焼成：良好、色調：淡黄白色
80	灰色粘質土	上脚器十部	高台坏	底径 5.3	高台は「ハ」字状に開く	高台内側ナデ、その他回転ナデ	焼成：良好、色調：淡黄灰色
81	灰色粘質土	土師器十部	高台坏	底径 4.1	高台は「ハ」字状に開く	磨滅により不明	焼成：良好、色調：淡黄白色
82	灰色粘質土	七部器十部	高台坏	底径 4.5	高台は「ハ」字状に開く	高台内側磨滅、その他回転ナデ	焼成：良好、色調：淡黄灰色
83	灰色粘質土	七部器十部	高台坏	底径 4.4	高台は「ハ」字状に開く	磨滅により不明	焼成：良、色調：淡黄灰色、高台内側に黒付着
84	灰色粘質土	上脚器十部	脚付き	底径 4.2	内部に空洞のない柱状の脚部を持ち、底部が広がる	磨滅により不明	焼成：良好、色調：淡黄灰色
85	灰色粘質土	土師器十部	脚付き	底径 5.3	内部に空洞のない柱状の脚部を持ち、底部が広がる	脚部外面ナデ、その他磨滅により不明	焼成：良好、色調：淡黄灰色
86	灰色粘質土	土師器十部	脚付き	底径 6.0	内部に空洞のない柱状の脚部を持ち、底部が広がる	脚部外面ナデ、その他磨滅により不明	焼成：良、色調：淡黄灰色、平底中央に穿孔あり
87	灰色粘質土	白磁	高台坏	底径 7.1	高台は翻り出して軽い	胎は高台部にほかからない	色調：灰白色

No	出上地点	種別	部種	法	寸法	形態の特徴	手法の特徴	備考
88	灰色粘質土	陶器		口径	15.8	口縁部は内側に肥厚する	外面に器文と蓮文を施す	焼成：良好 色調：淡黄灰色
89	灰色粘質土	陶器	高台碗	底径	4.4	高台は削り出しで深い	軸は杯中央部及び周縁部、高台縁付き部以外に施される	焼成：良好、色調：(輪)淡黄灰色、(胎土)淡黄褐色
90	灰色粘質土	陶器	高台碗	底径	4.4	高台は削り出しで深い	軸は杯中央部及び周縁部に施される	焼成：良好、色調：(輪)淡黄灰色、(胎土)淡黄褐色
91	灰色粘質土	土器部	上製文脚					焼成：良好 色調：淡黄灰色
92	灰色粘質土	土器部	把平					焼成：良好 色調：淡黄灰色
93	灰色粘質土	土器部	かまど					焼成：良好 色調：淡黄灰色
94	灰色粘質土	土器部	土製門輪	直径	9.2			焼成：良好 色調：黄灰色
95	灰色粘質土	須恵器	上馬	残存長 胴部径	5.2 3.2	頸部、凹紋、尻尾は欠損する		焼成：良好 色調：青灰色
96	SD-01 灰色砂質土	須恵器	蓋	つまみ径	4.6	平らな天井部に輪状つまみを付ける	天井部外面凹輪ヘラズリ後ナデ、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰色
97	SD-01	須恵器	高台杯	底径	8.4	高台は「ハ」字状に開き、杯部はゆるやかに立ち上がる	高台内面回転ナデ、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰色
98	SD-01	須恵器	高台杯	底径	8.8	高台は「ハ」字状に開き、杯部はゆるやかに立ち上がる	高台内面回転ナデ、杯底部内面ナデ、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：暗青灰色
99	SD-01	須恵器	高台杯	底径	8.4	高台は「ハ」字状に開き、杯部はゆるやかに立ち上がる	高台内面糸切り後ナデ、杯底部内面ナデ、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：暗青灰色
100	SD-01	須恵器	杯	底径	7.7	口縁部は平底の底縁から角縁を持って立ち上がる	底部外面回転ナデ未調整、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：暗黄灰色
101	SD-01	須恵器	杯	口径	15.9	口縁部は内凹して伸びて端部に差す	内外面回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰色
102	SD-01	須恵器	皿	口径	21.1	口縁部はやや外反する	内外面回転ナデ	焼成：良好 色調：暗青灰色
103	SD-01 灰色砂質土	須恵器	壺	底径	7.7	やや平らな底部に「ハ」字状に開く高台を付ける	高台内面糸切り後ナデ、高台外面回転ヘラズリ後ナデ	焼成：良好 色調：暗青灰色
104	SD-01 灰色砂質土	須恵器	高杯			脚部に遺かしの痕跡がある	杯底部外面凹輪ヘラズリ後ナデ、底部内面ナデ	焼成：良好 色調：暗青灰色
105	SD-01 灰色砂質土	須恵器	高杯	脚径	8.9	脚部は「ハ」字状に開き、端部は上下に拡張する	内外面回転ナデ	焼成：良、色調：淡黄灰色 遺かしの痕跡あり
106	SD-01	須恵器	壺	底径	9.3	高気味の痕跡を持つ	内外面回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰色
107	SD-01	須恵器	壺	胴径	11.3	肩部はやや張り気味	内外面回転ナデ	焼成：良好 色調：青灰色
108	SD-01	須恵器	壺	口径	15.6	口縁部は大きく外反する、肩部は丸い	杯部外面平行タタキ、内面同心門あて具縁その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰色
109	SD-01 灰色砂質土	須恵器	壺	口径	17.2	口縁部は大きく外反する、端部は丸い	口縁部内外面回転ナデ、杯部外面平行タタキ	焼成：良好 色調：青灰色
110	SD-01	須恵器	壺	器厚	1.1	底部外面に2条の沈線と波状文が残る	内面回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰色
111	SD-01 灰色砂質土	須恵器	壺	器厚	1.0	底部外面に1条の沈線と波状文が残る	内面回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰色
112	SD-01	須恵器	壺	器厚	1.0	底部外面に波状文が残る	内面回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰色
113	SD-01	須恵器	壺	器厚	0.9	底部外面に2条の沈線と波状文が残る	内面回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰色
114	SD-01 灰色砂質土	須恵器	壺	器厚	0.7		外面平行タタキ、内面放射状あて具縁	焼成：良好 色調：淡黄灰色
115	SD-01	須恵器	壺	器厚	0.9		外面平行タタキ、内面同心門あて具縁	焼成：良好 色調：淡黄灰色
116	SD-01	須恵器	壺	底径	11.2	平底の底部を持ち、脚部は底部人指をト字に持つ	杯部外面糸切り、その他回転ナデ	焼成：やや不良 色調：淡黄灰色
117	SD-01	須恵器	壺	底径	11.6	平底の底部から脚部は角縁を持って立ち上がる	外面へうなどによる調整、内面回転ナデ	焼成：やや不良 色調：灰白色

No	出土地点	種別	部相	法量	形質の特徴	手法の特徴	備考
118	SD-01 灰色砂質土	須磨器	葉	底径 13.8	平底の底部から胴部は角度を 持って立ち上がる	底部外面へうなどによる調整 その他回転ナデ	焼成：良、色調：青灰色 底部内面黒色物付着、薄?
119	SD-01	須磨器	葉	底径 15.1	平底の底部から胴部は角度を 持って立ち上がる	底部外面へうなどによる調整 その他回転ナデ	焼成：良好 色調：青灰色
120	SD-01	須磨器	葉	底径 15.0	平底の底部から胴部は角度を 持って立ち上がる	底部外面へうなどによる調整 その他回転ナデ	焼成：やや良好、瓦黄 色調：深黒灰色
121	SD-01	土師器	甕	口径 14.7	口縁部はやや外反する	内面頸部以下ケズリ、口縁部 内外面ナデ	焼成：良好、色調：赭褐色 外面に塵付着
122	SD-01	土師器	甕	口径 14.1	口縁部はわずかに外反する	内面頸部以下ケズリ、口縁部 内外面ナデ	焼成：良、色調：淡灰褐色 外面に塵付着
123	SD-01	土師器	甕	口径 17.2	口縁部は大きく外反する	内面頸部以下ケズリ、口縁部 内外面ナデ	焼成：良、色調：暗灰色 内外面に塵付着
124	SD-01	土師器	甕	口径 16.0	口縁部は外反する	内面頸部以下ケズリ、口縁部 内外面ナデ	焼成：良、色調：淡褐色 外面に塵付着
125	SD-01	土師器	葉	口径推定26.0	口縁部はわずかに外反する、 胴部は歪まない	内面頸部以下ケズリ、口縁部 内外面ナデ	焼成：良、色調：淡黒灰色 内外面に塵付着
126	SD-01	土師器	葉	口径 25.4	口縁部は大きく外反する、胴 部は歪まない	内面頸部以下ケズリ、口縁部 内外面ナデ	焼成：良好、色調：暗褐色 外面に塵付着
127	SD-01	土師器	十裂支脚	残存高 13.2			焼成：良好 色調：淡褐色
128	SD-01	土師器	かまど				焼成：良好 色調：淡褐色
129	SD-01	土師質土器	鉢	口径 15.1 底径 6.0 器高 5.7	平底の底部から口縁部はゆる やかに立ち上がり、器縁的に 伸びて端部に至る	底部外面赤褐色ナデ、その 他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰色
130	SD-01	土師質土器	鉢	口径 15.3	口縁部は内角気味に伸びて端 部は小さく外反する	内外面回転ナデ	焼成：良好、色調：淡灰色 内外面に塵付着
131	SD-01	土師質土器	杯	口径 10.2 底径 4.4 器高 2.9	口縁部は平底の底部からゆる やかに立ち上がり、やや内角 して開く	底部外周削減、その他回転ナ デ	焼成：良好 色調：淡黄灰色
132	SD-01	土師質土器	杯	口径 11.2	口縁部は直線的に開き、端部 は鈍い	内外面回転ナデ	焼成：良好 色調：淡灰白褐色
133	SD-01	土師質土器	杯	口径 13.2	口縁部は直線的に開き、端部 でわずかに外反する	内外面回転ナデ	焼成：良好 色調：淡灰白褐色
134	SD-01	土師質土器	杯	底径 5.0	口縁部は平底の底部からゆる やかに立ち上がる	底部外面赤褐色未調整、そ の他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰色
135	SD-01	土師質土器	杯	底径 4.4	口縁部は平底の底部からゆる やかに立ち上がる	器縁のため調整不明	焼成：良好 色調：淡灰色
136	SD-01	土師質土器	杯	底径 4.9	口縁部は平底の底部からゆる やかに立ち上がる	底部外面赤褐色未調整、 その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄褐色
137	SD-01	土師質土器	杯	底径 4.6	口縁部は平底の底部からゆる やかに立ち上がる	底部外面赤褐色未調整、 その他回転ナデ	焼成：良好 色調：灰白色
138	SD-01	土師質土器	杯	底径 5.3	口縁部は平底の底部からゆる やかに立ち上がる	底部外面赤褐色未調整、 その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰白色
139	SD-01 灰色砂質土	土師質土器	杯	底径 6.4	口縁部は平底の底部からゆる やかに立ち上がる	底部外面赤褐色未調整、 その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡灰褐色
140	SD-01	土師質土器	杯	底径 7.2	口縁部は平底の底部からゆる やかに立ち上がる	底部外面赤褐色、その他回転ナ デ	焼成：良好 色調：淡灰色
141	SD-01	土師質土器	杯	底径 5.3	口縁部は平底の底部からゆる やかに立ち上がる	底部外面赤褐色未調整、 その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡灰白色
142	SD-01	土師質土器	高台皿	口径 11.0	口縁部はあまり立ち上がりず 高台は「八」字状に開く	内外面回転ナデ	焼成：良、色調：淡褐色 内面に赤色顔料残存
143	SD-01	土師質土器	高台皿		口縁部はあまり立ち上がりず 高台は「八」字状に開く	内外面回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰色
144	SD-01	土師質土器	高台杯	底径推定 6.8	高台は「八」字状に開き、杯 縁はゆるやかに立ち上がる	高台内面ナデ、その他回転ナ デ	焼成：良好 色調：淡灰白褐色
145	SD-01	土師質土器	高台杯	底径 6.0	高台は「八」字状に開き、杯 縁はゆるやかに立ち上がる	高台内面削減、その他回転ナ デ	焼成：良好 色調：淡灰白褐色
146	SD-01	土師質土器	高台杯	底径 6.2	高台は「八」字状に開き、杯 縁はゆるやかに立ち上がる	高台内面削減、その他回転ナ デ	焼成：良好 色調：淡灰白褐色

No	出土地点	類別	器種	法量	形 態 の 特 徴	平 法 の 特 徴	備 考	
147	SD-01	土師質土器	高台杯	底径推定 6.0	高台は「ハ」字状に開き、杯部はゆるやかに立ち上がる	高台内側磨減、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰白色	
148	SD-01	灰色砂質土	土師質土器	高台杯	底径 6.9	高台は「ハ」字状に開き、杯部はゆるやかに立ち上がる	高台内側磨減、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡灰白色
149	SD-01	土師質土器	高台杯	底径 7.6	高台は「ハ」字状に開き、杯部はゆるやかに立ち上がる	高台内側磨減、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡灰白色	
150	SD-01	土師質土器	高台杯	底径 7.5	高台は「ハ」字状に開き、杯部はゆるやかに立ち上がる	高台内側磨減、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：灰白色	
151	SD-01	土師質土器	高台杯	底径 8.5	高台は「ハ」字状に開き、杯部はゆるやかに立ち上がる	高台内側磨減、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰色	
152	SD-01	土師質土器	高台杯	底径 8.7	高台は「ハ」字状に開き、杯部はゆるやかに立ち上がる	高台内側磨減、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰白色	
153	SD-01	土師質土器	高台杯	底径 9.0	高台は「ハ」字状に開き、杯部はゆるやかに立ち上がる	高台内側磨減、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄白色	
154	SD-01	土師質土器	高台杯	底径 5.2	高台は低く、断面三角形形状を呈する	高台内側磨減、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰色	
155	SD-01	土師質土器	高台杯	底径推定 5.4	高台は低く、断面三角形形状を呈する	高台内側磨減、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄白色	
156	SD-01	土師質土器	高台杯	底径 6.5	高台は低く、断面三角形形状を呈する	内外側磨減	焼成：良好 色調：淡灰白色	
157	SD-01	土師質土器	高台杯	底径 7.1	高台は低く、断面三角形形状を呈する	高台内側ナデ、その他磨減	焼成：良好 色調：淡黄灰白色	
158	SD-01	土師質土器	高台杯	底径 6.2	高台は低く、断面三角形形状を呈する	高台内側磨減、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰白色	
159	SD-01	土師質土器	高台杯	底径 6.6	高台は低く、断面三角形形状を呈する	高台内側磨減、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡灰白色	
160	SD-01	土師質土器	土師	口径推定23.8	口縁部は外反する	内面頸部以下ハケ目、外冠ハケ目	焼成：良、色調：暗灰色 外側に磨き	
161	SD-01	陶器	鉢	胴径 1.0	内面に円弧状の条痕を飾す	外側回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰色	
162	SD-01		須恵器器底片		器底に条痕が付着する		色調：淡黄灰色	
163	瓦葺り灰色粘質土	須恵器	杯	口径 12.6 器高 4.3	口縁部は平底の底部からゆるやかに立ち上がり、端部で直曲する	底部外面回転糸切り未調整、杯部内面ナデ、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：暗黄灰色	
164	瓦葺り灰色粘質土	須恵器	杯	口径 12.8	口縁部は内湾気味に伸びて端部で直曲する	内外側回転ナデ	焼成：良好 色調：暗黄灰色	
165	瓦葺り灰色粘質土	須恵器	杯	底径 7.4	口縁部は平底の底部からゆるやかに立ち上がる	底部外面糸切り後ナデ、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：暗黄灰色	
166	瓦葺り灰色粘質土	須恵器	高台杯	底径 8.7	底部外側内側に高台を付け杯部は角張って立ち上がる	高台内側回転糸切り未調整、杯底部内面ナデ外側回転ナデ	焼成：良好 色調：灰白色	
167	瓦葺り灰色粘質土	須恵器	杯	底径 6.5	底部に平坦面を持つ	底部外面回転糸切り未調整、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰色	
168	瓦葺り灰色粘質土	須恵器	高杯		杯部はゆるやかに立ち上がる 断面に透かしの間隙あり	杯底部内面ナデ、外側一部ナデ	焼成：良好 色調：黄灰色	
169	瓦葺り灰色粘質土	須恵器	罍	器高 0.8		外側平行タケカキ目、内側放射状嵌て具痕	焼成：良好 色調：暗黄灰色	
170	瓦葺り灰色粘質土	土師質土器	高台杯	底径 6.3	高台は「ハ」字状に開き、杯部はゆるやかに立ち上がる	高台内側磨減、その他回転ナデ	焼成：良好 色調：淡黄灰色	
171	瓦葺り灰色粘質土	土師質土器	蓋鉢	器厚 0.6	口縁部は内湾する、端部付近に穿孔あり	調整不明	焼成：良好 色調：暗褐色	
172	瓦葺り灰色粘質土	土師質土器	鉄鉢	口径 27.0	口縁部は内湾する	内面に一部ズリ残存、外面は不明	焼成：良好 色調：暗褐色	
173	瓦葺り灰色粘質土	土師質土器	底存高 15.1				焼成：良好 色調：淡黄灰色	
174	SD-01	木製品	下駄	全長 17.9 幅 7.8	曲は欠損するが、高下駄である	裏面に一部ケズリ痕跡が見られる		

## (瓦類)

No	出土地点	器種	種別	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	瓦葺り	軒丸瓦	国分寺1期軒丸瓦 (B類)	隆起した中層に6個の蓮子を容れ、7弁の花文を隆起し、腰線で蓋した外に7単位の唐草文帯を並べし外区に英文帯を添らす	瓦当面外周に深い腰線を施す 瓦当表面は丸瓦接合時にナゲ調整を施す	焼成：良好 色調：淡青灰色
2	瓦葺り	軒丸瓦	国分寺1期軒丸瓦 (A-2類)	No1に同じ	瓦当面外周は平縁 その他No1に同じ	焼成：不良、色調：(外面)黒灰色、(断面)灰白色
3	瓦葺り	軒丸瓦	国分寺1期軒丸瓦 (A-2類)	No1に同じ	瓦当面外周は平縁 その他No1に同じ	焼成：不良、色調：(外面)黒灰色、(断面)灰白色
4	瓦葺り	軒丸瓦	国分寺1期軒丸瓦 (B類)	No1に同じ	瓦当面外周に深い腰線を施す その他No1に同じ	焼成：良好 色調：淡青灰色
5	灰色粘質土	軒丸瓦	国分寺1期軒丸瓦 (A-1類)	No1に同じ	瓦当面外周は平縁で面取りを施す、その他No1に同じ	焼成：良好 色調：淡褐色
6	灰色粘質土	軒丸瓦	国分寺3期軒丸瓦	退化した小室の中層を中心に四葉風の花文を飾り、外区に菱形した唐草文4単位を施す	瓦当表面は丸瓦接合時にナゲ調整を施す	焼成：良好 色調：淡褐色
7	灰色粘質土	軒平瓦	国分寺1期軒平瓦 (A類)	3個の花文に4単位の唐草文を配し、内外を交差で纏んだ英文帯を添らせる、文帯はシャープ	瓦当面外周は平縁、瓦当下面に平足部を持つ、平瓦当下面はタキ底をナゲ調整	焼成：良好 色調：暗茶褐色
8	SD-01	軒平瓦	国分寺1期軒平瓦 (A類)	No7に同じ 文帯はややシャープ	頸部は段張、その他No7に同じ	焼成：良好 色調：淡青灰色
9	瓦葺り	軒平瓦	国分寺1期軒平瓦 (B類)	No7に同じ 文帯はやや鈍い	瓦当面外周に尖帯を施す、頸部は欠損、その他No7に同じ	焼成：やや不良 色調：淡灰色
10	瓦葺り	軒平瓦	補修瓦	瓦当面に平瓦タキ原形により施文する	頸部は段張、平瓦当下面に瓦当面と同様のタキが成る	焼成：やや不良 色調：淡黄灰色
11	灰色粘質土	軒平瓦	補修瓦	瓦当面に平瓦タキ原形により施文する	頸部は深い段張風に作り出す	焼成：やや不良 色調：淡黄灰色
12	灰色粘質土	軒平瓦	国分寺1期軒平瓦 (A類)	No7に同じ 文帯はややシャープ	瓦当面外周は平縁、頸部は深い段張、その他No7に同じ	焼成：良好 色調：淡青灰色
13	灰色粘質土	軒平瓦	国分寺1期軒平瓦 (A類)	No7に同じ 文帯はシャープ	瓦当面外周は平縁、頸部は段張 その他No7に同じ	焼成：良好 色調：淡青灰色
14	瓦葺り	軒平瓦	国分寺1期軒平瓦 (A類)	No7に同じ 文帯はシャープ	瓦当面外周は平縁、頸部は段張 平瓦当下面にタキN字を成す	焼成：良好 色調：淡褐色
15	瓦葺り	軒平瓦	国分寺1期軒平瓦 (B類)	No7に同じ 文帯は鈍い	瓦当面外周に尖帯を付ける、頸部は曲線状、その他No7に同じ	焼成：良好 色調：淡青灰色
16	瓦葺り	軒平瓦	国分寺1期軒平瓦 (B類)	No7に同じ 文帯は鈍い	瓦当面外周に尖帯を付ける、頸部は曲線状、その他No7に同じ	焼成：良好 色調：淡青灰色
17	瓦葺り	軒平瓦	国分寺1期軒平瓦 (B類)	No7に同じ 文帯は鈍い	瓦当面外周に尖帯を付ける、頸部は曲線状、その他No7に同じ	焼成：良好 色調：淡青灰色
18	瓦葺り	軒平瓦	国分寺1期軒平瓦 (A類)	No7に同じ、文帯はやや鈍い 瓦当面にはなれ跡あり	瓦当面外周は平縁、頸部は深い段張、その他No7に同じ	焼成：良好 色調：淡青灰色
19	瓦葺り	丸瓦	玉縁式	内面に新土の合わせ目痕あり	外面ナゲ、内面日本糸切り痕	焼成：良好、色調：淡青灰色
20	瓦葺り	丸瓦	玉縁式	内面に新土の合わせ目痕あり	外面ナゲ、内面日本糸	焼成：良好、色調：淡青灰色
21	瓦葺り	丸瓦	玉縁式	内面に新土の合わせ目痕あり	外面ナゲ、内面日本糸	焼成：良好、色調：淡青灰色
22	瓦葺り	丸瓦	玉縁式		外面ナゲ、内面日本糸切り痕	焼成：良好、色調：淡青灰色
23	灰色粘質土	丸瓦	玉縁式		外面ナゲ、内面日本糸	焼成：良好、色調：淡青灰色
24	瓦葺り	丸瓦	玉縁式		外面ナゲ、内面日本糸切り痕	焼成：良好、色調：淡青灰色
25	瓦葺り	丸瓦	玉縁式	小室丸瓦	外面ナゲ、内面日本糸	焼成：良好、色調：淡褐色
26	瓦葺り	丸瓦	行帯式		外面ナゲ、内面日本糸	焼成：不良、色調：淡黄灰色
27	瓦葺り	平瓦	KA		外面タタキ、内面日本糸切り痕	焼成：良好、色調：青灰色
28	瓦葺り	平瓦	KA	外面にハナレ砂	外面タタキ、内面日本糸切り痕	焼成：良好、色調：淡青灰色
29	瓦葺り	平瓦(間切り)	KA	外面ハナレ砂、内面横溝有	外面タタキ、内面日本糸切り痕	焼成：良好、色調：淡青灰色
30	灰色粘質土	平瓦	KB、		外面タタキ、内面日本糸切り痕	焼成：不良、色調：淡灰色
31	灰色粘質土	平瓦	KB、		外面タタキ、内面日本糸切り痕	焼成：良好、色調：淡灰色
32	SD 01	平瓦	KB、	外面ハナレ砂	外面タタキ、内面日本糸切り痕	焼成：良好、色調：淡灰色

No	出上地点	器種	種別	形態の特徴	手法の特徴	備考
33	SD 01	平瓦	KB <sub>1</sub>		外面タタキ、内面布目葺	焼成：良好、色調：灰色
34	丸瀝り	平瓦	KC	外面ハナレ砂	外面タタキ、内面布目糸切り葺	焼成：良好、色調：淡灰白色
35	瓦瀝り	平瓦	KC	外面ハナレ砂	外面タタキ、内面布目葺	焼成：良好、色調：灰白色
36	瓦瀝り	平瓦	KC		外面タタキ、内面布目葺	焼成：良好、色調：灰色
37	SD-01	平瓦	KC	外面ハナレ砂	外面タタキ、内面布目葺	焼成：良好、色調：暗青灰色
38	灰色粘質土	平瓦	KC		外面タタキ、内面布目葺	焼成：良好、色調：淡黒灰色
39	灰色粘質土	平瓦	KC		外面タタキ、内面布目葺	焼成：良好、色調：淡黒灰色
40	SD-01	平瓦	KD		外面タタキ、内面布目葺	焼成：良好、色調：暗青灰色
41	瓦瀝り	平瓦	KD		外面タタキ、内面布目葺	焼成：不良、色調：黒灰色
42	SD-01	平瓦	KD		外面タタキ、内面布目葺	焼成：不良、色調：黒灰色
43	灰色粘質土	平瓦	KE		外面タタキ、内面布目糸切り葺	焼成：良好、色調：淡灰色
44	丸瀝り	平瓦	KE	外面ハナレ砂	外面タタキ、内面布目葺	焼成：不良、色調：淡灰色
45	SD-01	平瓦	KF		外面タタキ、内面布目葺	焼成：良好、色調：淡灰白色
46	SD-01	平瓦	KF		外面タタキ、内面布目糸切り葺	焼成：不良、色調：黒灰色
47	瓦瀝り	平瓦	KG	外面ハナレ砂	外面タタキ、内面布目糸切り葺	焼成：不良、色調：灰白色
48	丸瀝り	平瓦(隅切り)	KG	外面ハナレ砂	外面タタキ、内面布目糸切り葺	焼成：良好、色調：暗青灰色
49	丸瀝り	平瓦	KG	外面ハナレ砂	外面タタキ、内面布目糸切り葺	焼成：良好、色調：灰白色
50	瓦瀝り	平瓦	KG		外面タタキ、内面布目葺	焼成：良好、色調：暗青灰色
51	瓦瀝り	平瓦	KH		外面タタキ、内面布目糸切り葺	焼成：不良、色調：灰白色
52	瓦瀝り	平瓦	KI		外面タタキ、内面布目葺	焼成：良好、色調：淡茶褐色
53	丸瀝り	平瓦	KJ		外面タタキ、内面布目葺	焼成：良好、色調：淡灰色
54	灰色粘質土	平瓦	KJ		外面タタキ、内面布目葺	焼成：良好、色調：淡灰褐色
55	瓦瀝り	平瓦	KJ		外面タタキ、内面布目糸切り葺	焼成：良好、色調：暗青灰色
56	瓦瀝り	平瓦	II <sub>1</sub>		外面タタキ、内面布目糸切り葺	焼成：良好、色調：青灰色
57	丸瀝り	平瓦	II <sub>2</sub>		外面タタキ、内面布目糸切り葺	焼成：良好、色調：淡灰色
58	SD-01	平瓦	H <sub>1</sub>		外面タタキ、内面布目葺	焼成：良好、色調：青灰色
59	SD 01	平瓦	H <sub>2</sub>		外面タタキ、内面布目葺	焼成：良好、色調：青灰色
60	灰色粘質土	平瓦	H <sub>3</sub>		外面タタキ、内面布目糸切り葺	焼成：良好、色調：暗青灰色
61	丸瀝り	平瓦	NA		外面タタキ、内面布目葺	焼成：良好、色調：淡黄灰色
62	SD-01	平瓦	NA	外面にハナレ砂	外面タタキ、内面布目糸切り葺	焼成：良好、色調：淡灰白色
63	灰色粘質土	平瓦	NA		外面タタキ、内面布目糸切り葺	焼成：不良、色調：灰白色
64	SD 01	平瓦	NB		外面タタキ、内面布目葺	焼成：良好、色調：淡茶褐色
65	灰色粘質土	平瓦	NB	外面にハナレ砂	外面タタキ、内面布目糸切り葺	焼成：良好、色調：淡灰色
66	SD-01	平瓦	NB		外面タタキ、内面布目糸切り葺	焼成：良好、色調：淡青灰色
67	灰色粘質土	平瓦	NB		外面タタキ、内面布目糸切り葺	焼成：良好、色調：淡青灰色
68	瓦瀝り	平瓦	その他	外面にハナレ砂	外面タタキ、内面布目糸切り葺	焼成：良好、色調：淡黄灰色
69	SD-01	平瓦	その他		外面タタキ、内面布目葺	焼成：不良、色調：淡灰褐色
70	SD-01	平瓦	その他		外面タタキ、内面布目葺	焼成：不良、色調：淡灰褐色
71	灰色粘質土	平瓦	その他		外面タタキ、内面布目葺	焼成：良好、色調：青灰色
72	ND 01	平瓦	その他		外面タタキ、内面布目葺	焼成：良好、色調：淡灰色
73	SD-01	平瓦	その他		外面タタキ、内面布目葺	焼成：不良、色調：黒灰色
74	瓦瀝り	セン				焼成：良好、色調：灰白色
75	SD 01	セン				焼成：良好、色調：青灰色



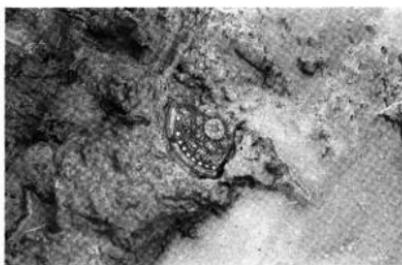
圖

版

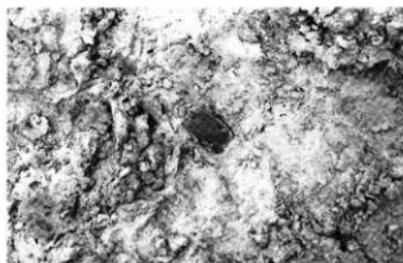




調査前全景



灰色粘質土中軒丸瓦出土状況



SD-01 下駄出土状況



SD-01 セクション



SD-01 遺物出土状況



SD-01 完掘状況



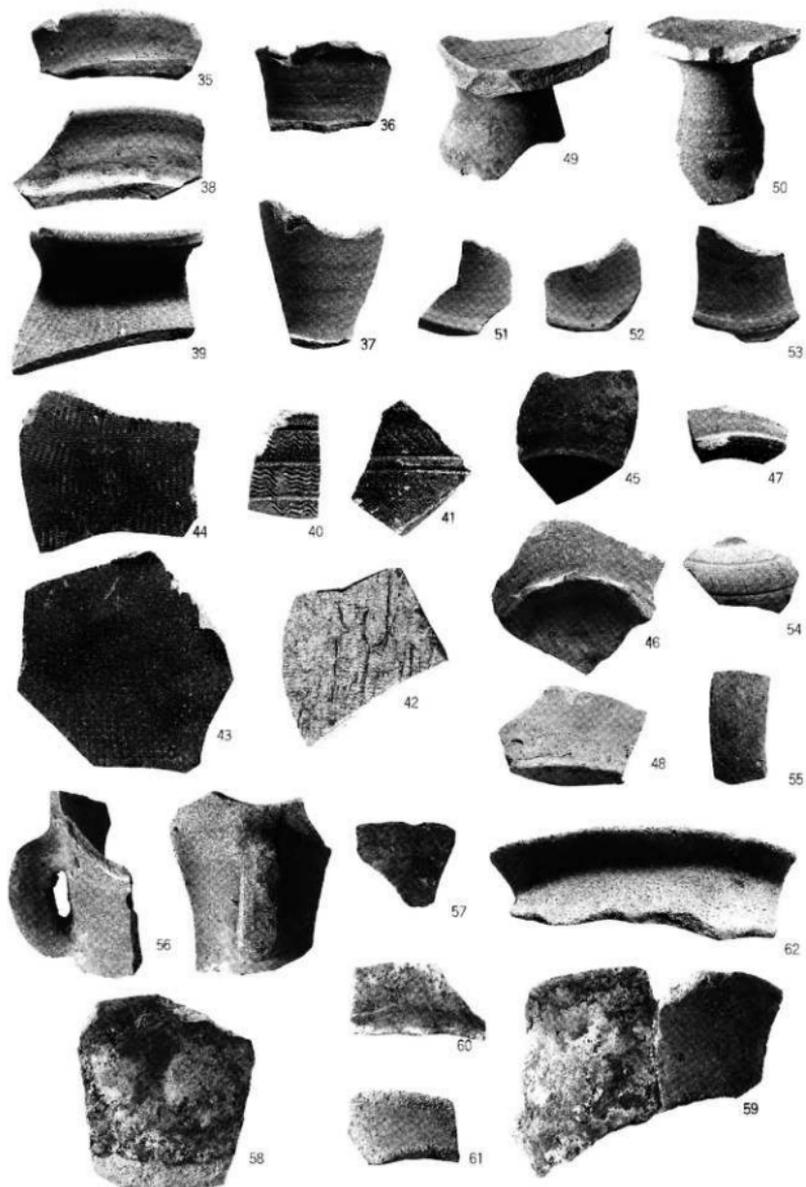
瓦溜り検出状況



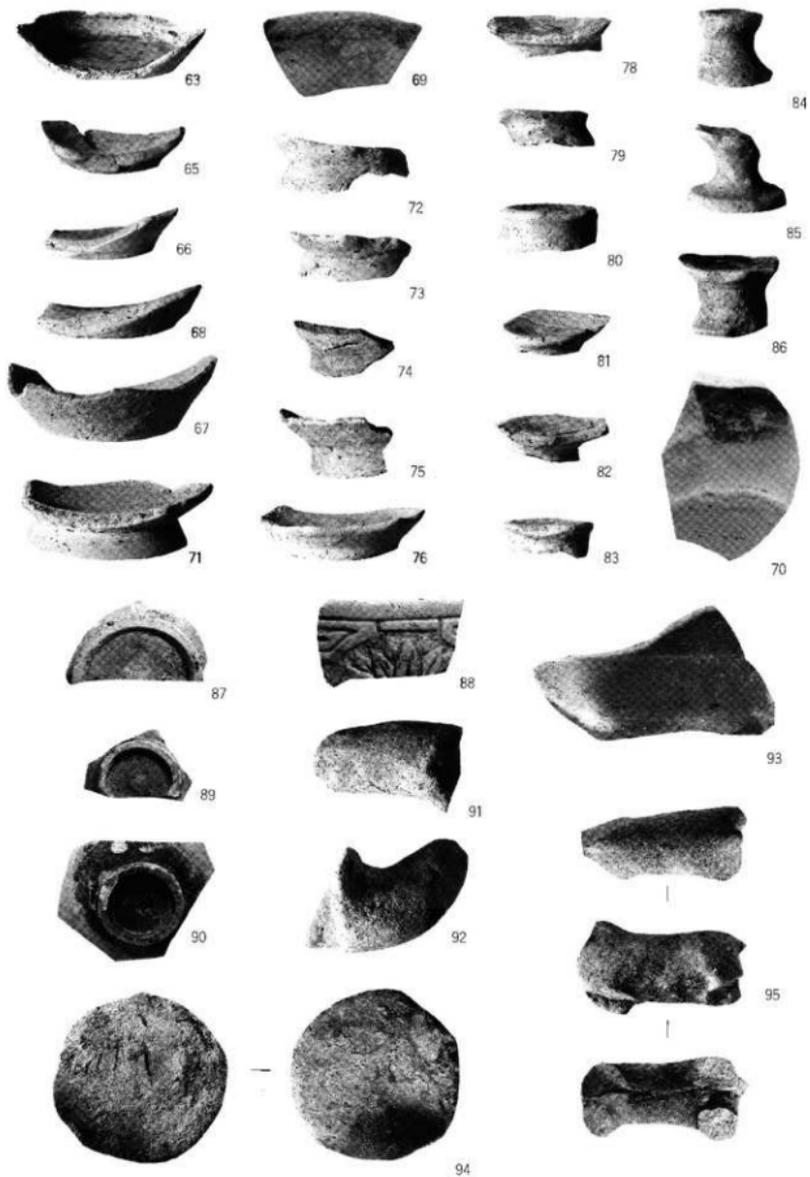
調査後全景



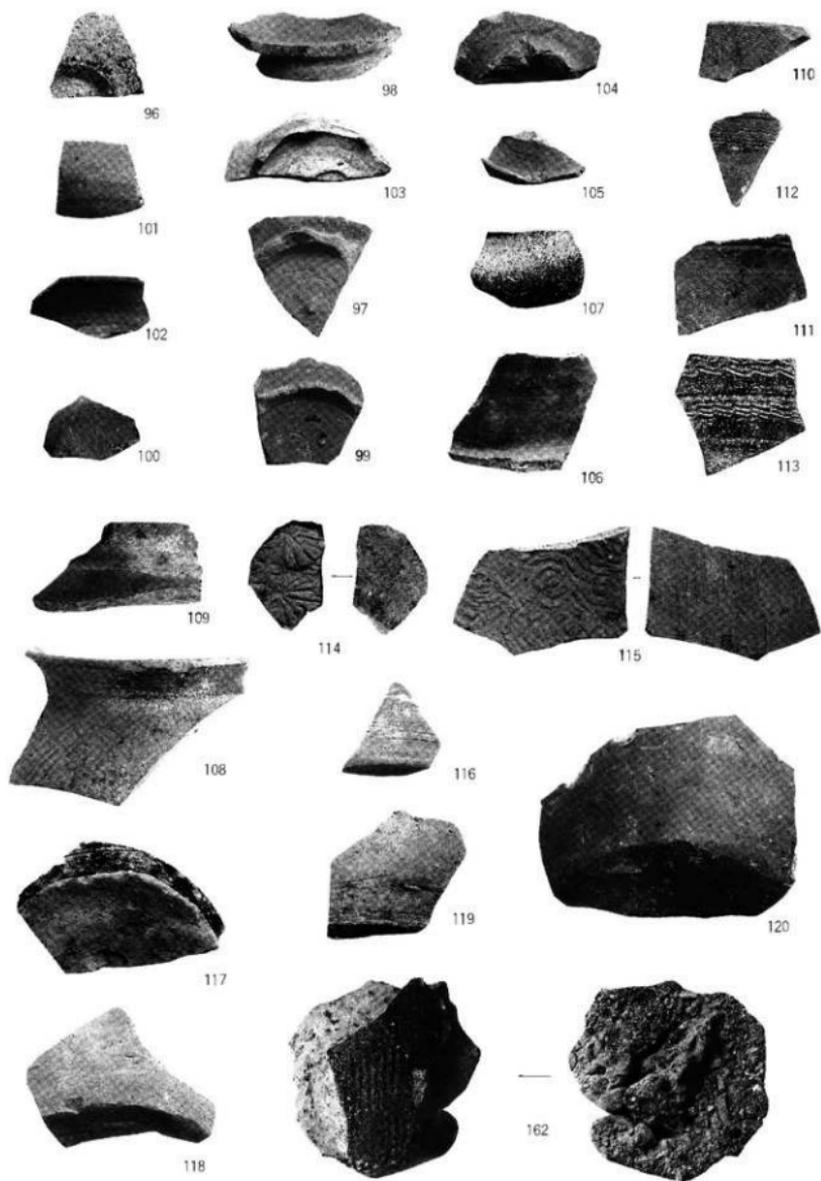
灰色粘質土出土遺物(須惠器)



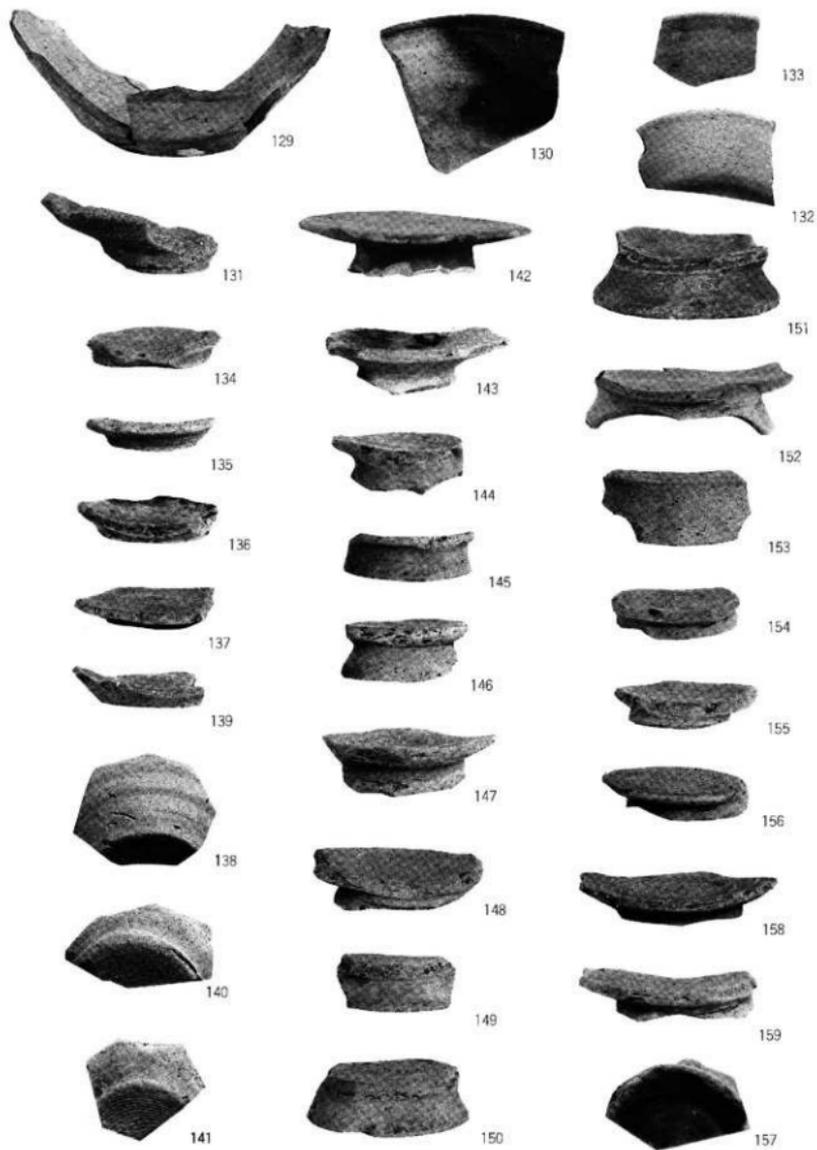
灰色粘質土出土遺物(須惠器、土師器)



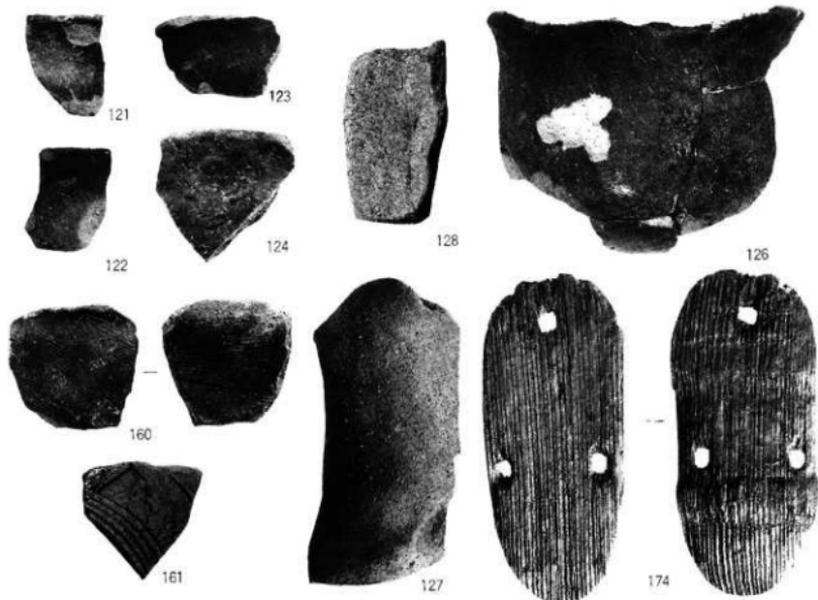
灰色粘質土出土遺物(土師質土器、その他)



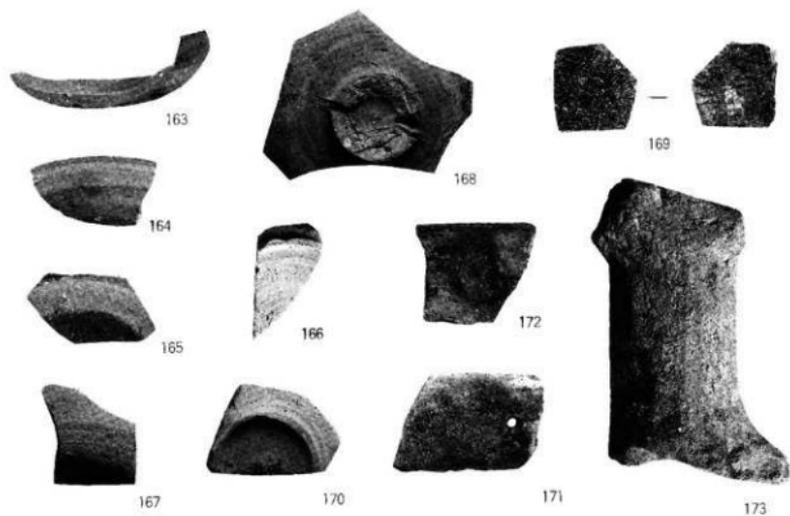
SD-O1出土遺物(須恵器)



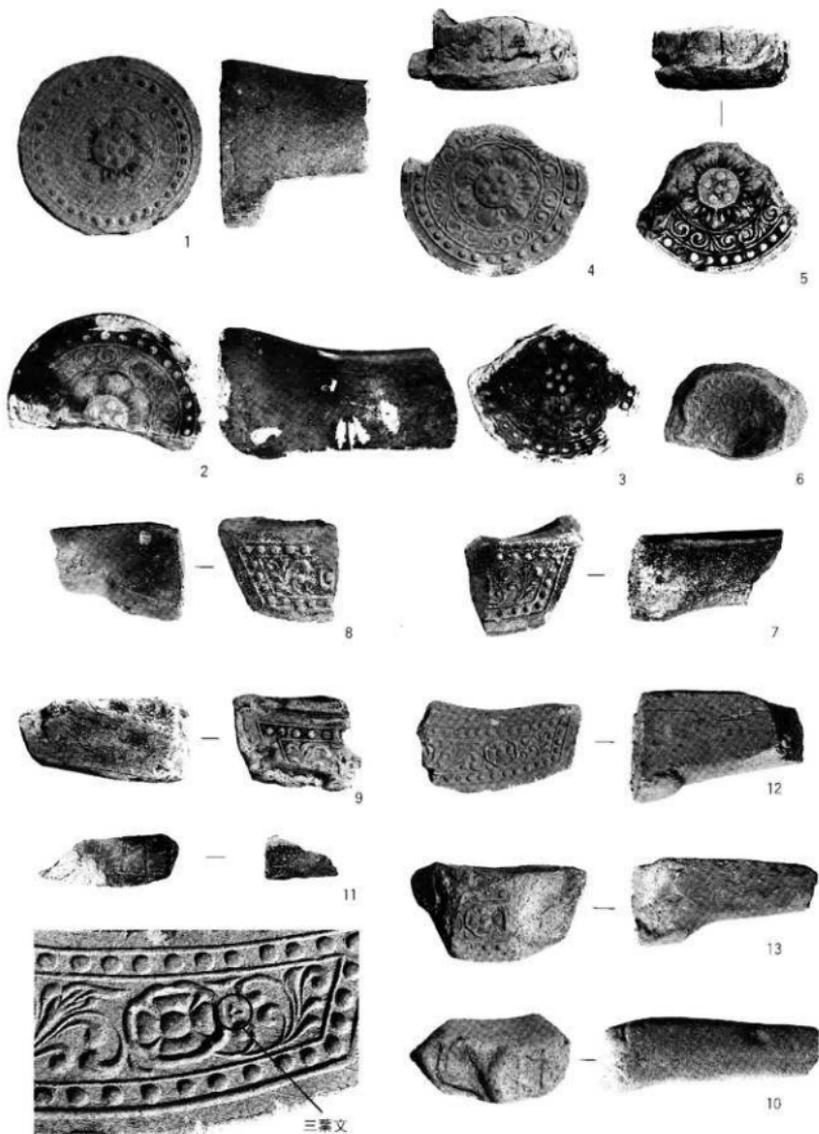
SD-01 出土遺跡(土師質土器)



SD-01 出土遺物 (土師器、その他)



瓦溜り出土遺物



軒丸瓦、軒平瓦



14



15



16



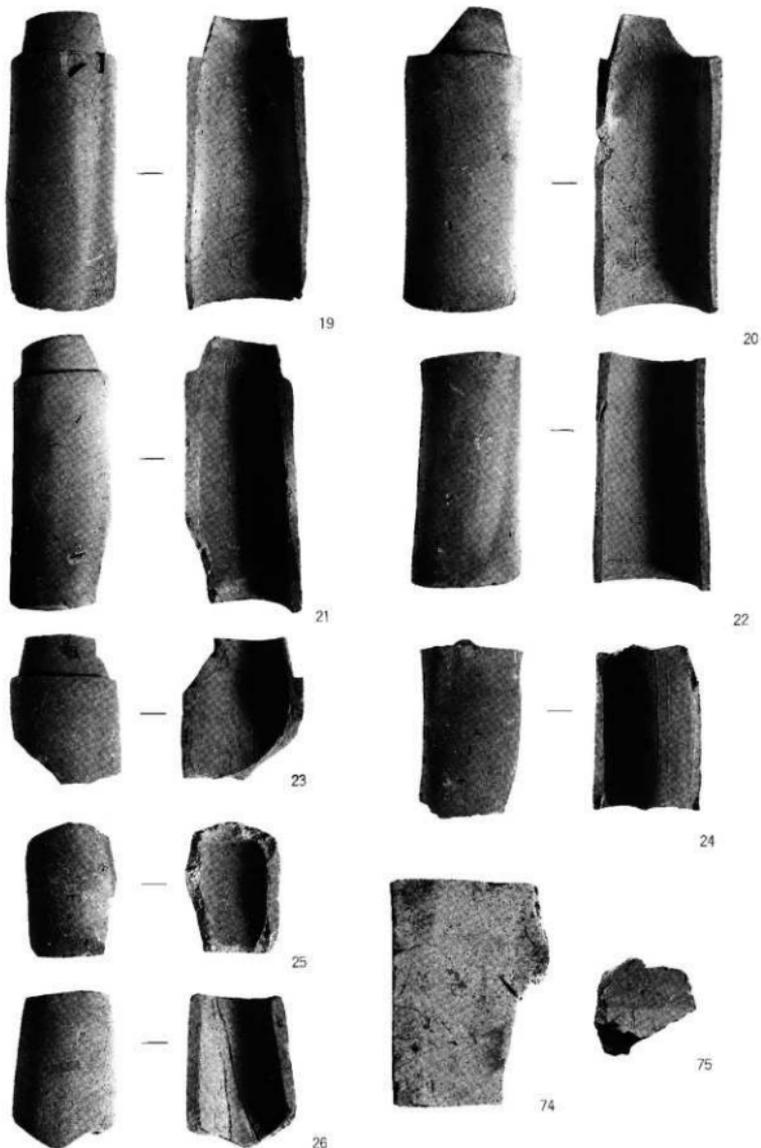
17



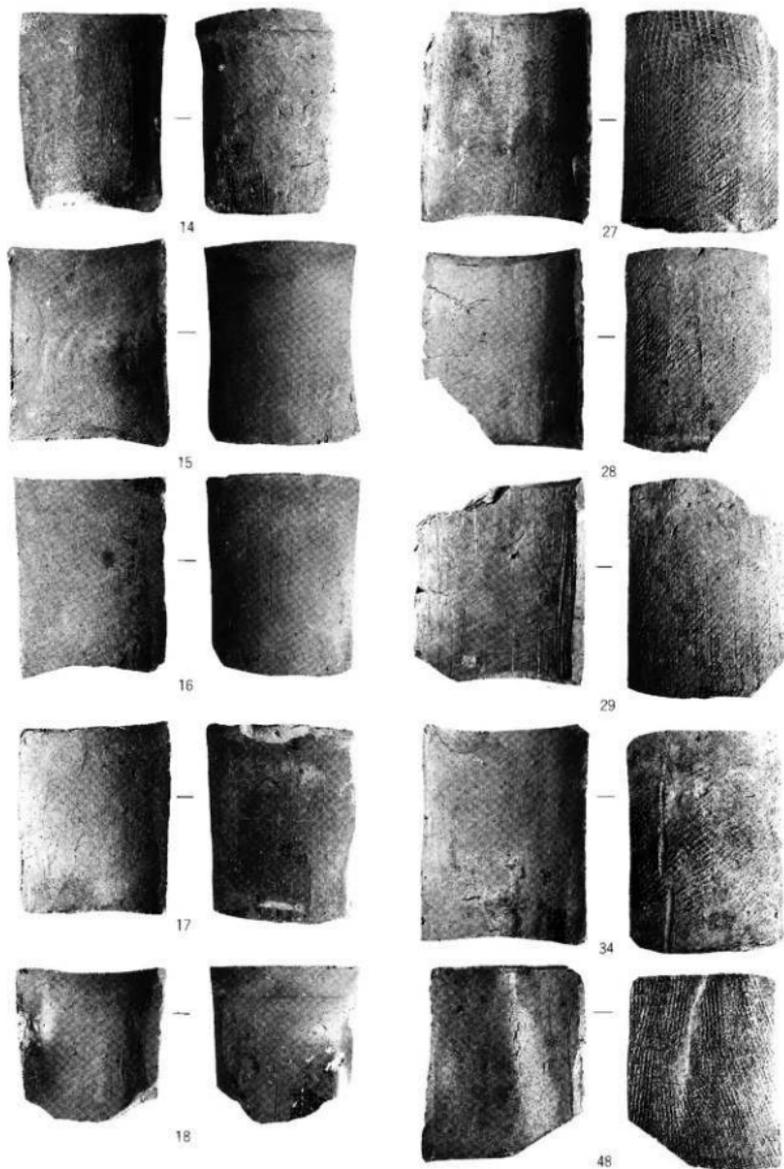
18



軒平瓦



丸瓦、セン



軒平瓦、平瓦

PL-12



KA



KB<sub>1</sub>



KB<sub>2</sub>



KC



KD



KE



KF



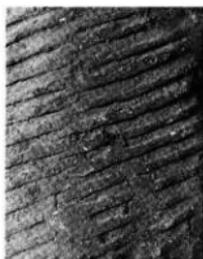
KG



KH



KI



H<sub>1</sub>



H<sub>2</sub>



NA



NB

平瓦タタキ分類表

出雲国分寺跡発掘調査報告書

1965年3月

発行 松江市教育委員会  
財松江市教育文化振興事業団

印刷 松栄印刷(有)  
松江市西川津町667-1